不思議な物に作り變へ
朽ちずに長く殘したが
きけ!! かねの音、ヂンドンと
ありや海蛆が弔ひに
一時毎に鳴し居る

父が死んだときいた王子は失望の上句に身を起してアリエルに伴いて行つた、アリエルの聲のする方へと伴いて行くと、大きな木の下にプロスペロとミランダが座つてる所へ來た、ミランダは父の姿以外には人の顏を見た事がなかつたんで、

「ミランダお前は彼處に見えるものは何んだか知つてるかい。」

「御父さんあれは幽靈でせう、あちこち眺めて居ますよ大變綺麗な者ですが、幽靈ぢやないんでせうか。」

「あれはね、私等と同じに食つたり眠つたり五體もあるよ、此の人は船にのつて居たんだ、困難に出遇つて顏が少し變つて居るが、中々の好男子だ連れの人々に離れて探し歩いて居

たのだ。」

ミランダは男と云ふものは皆御父さんの樣に、嚴しい顏をして灰色の髯を生やして居るものだと思つて居たが、此の美しい若い王子の姿を見て嬉しく思つた、フエルデイナンドも此んな離れ小島に斯くも美しい少女を見、前には不思議な音樂の音をきゝ、心を蕩かせる島に來たので、あの女は島の女神だらうと思つて話しかけた。

ミランダは決して島の女神ではないと耻しさうに答へて、己が身の上を話さうとしかけたが、父に止められて仕舞つた、父は此の男女二人が互ひに賞め合つて居るのを見て大に喜んだ、二人は一目見て戀に落ちたのだと思つたからだ、が然しフエルデイナンドの眞心を試して見ようと難題を出した、嚴格な調子で父は、

「御前は此の島へ間諜となつて來たんだらう、而して此の島を取りに來たに違ない、乃公について來い、貴樣の首と足を縛つて潮水を飲ませ、貝や、枯れた根、橡の殼を食はしてやるんだ。」

「何をッ、最つと強い敵なら從ひもしようが貴樣なんかの老ぼれに。」

と劔を拔いて切りにかゝつた、處がプロスペロは魔法の杖を以て、立つたまゝに王子の身體を動けない樣にして仕舞つた、ミランダは父にすがつて、

「何ぜそんなに酷い事遊ばす、可愛いさうですよ、此の方は妾が遇ひました二人目の男の方で正直な樣な人ですが。」

「お默り!!　最う一言も云つちやいけない叱るよ乃公は、此の詐り者を蔽ふ奴があるか、カリバンと此奴と二人しか見やしない癖に一番好い男だと思つて居やがる、馬鹿だよお前は、此奴がカリバンよりも好い男子の樣に、此奴よりもいゝ男がまだ他にいくらでもあるんだ。」

と父は娘の眞心も試して見た。

「妾は此の方で澤山で御座います、他に好い男なんか見たくはありません。」

「おい若い奴!!　乃公には抵抗する事は出來まい。」

「はい全く出來ませぬ。」フエルデイナンドは、自分は魔術の力で抵抗力のなくなつた事とは知らないで、不思議なプロスペロに從はねばならないのを驚いて居た、プロスペロにつきながら洞穴の方へ行く時にミランダの方を出來る限り見ながら、「乃公は何んだか夢を見て居る樣だ、然し日に一度づゝ牢屋の中からあの美しい少女を見る事が出來れば、あの老人の脅す位は耐へることが出來るんだ。」と獨り語を言つて居た。

プロスペロは此の若者をそんなに長く洞穴へは入れて置かないで、六つかしい仕事を命じ、娘には此の見張番をせよと云ひ付けて、自分は勉强室に入つて秘密に兩人の行動を看視して居た、プロスペロのフエルデイナンドに命令したのは、重い木の丸太を積み重ねる仕事だつたが、若い王子の身空でそんな勞働には慣れて居ないから、直ぐに勞れて死にさうになつたのを娘が見付けて、

「おゝそんなに御働き遊ばすのは御止しなさい、御父さんは勉强して居ますから三時間位は大丈夫、一寸御休みなさいませよ。」

「優しい御孃さん、僕は此の仕事をして仕舞つてから休む事にします。」

「いえ若し貴郎が御休みなら其の間丈けは、妾が木を積みますから。」

と云つても王子は承知しなかつた、其のために娘は手傳ひの代りに邪魔になつて二人は間

話しを仕始めて木を積む事は御留守になつて仕舞つた。

プロスペロは此の命令を出したのも、元はたゞ愛情を試めして見ようとの考へなので、娘が考へて居る樣に本計りは見て居ないで、二人に見付らない樣に、どんな話しをして居るか聞かうと思つた、フエルデイナンドは、娘に名を聞いた、娘は父から止められて居たけれど己れの名を話した、プロスペロは己が魔術のために娘が自分に不從順になつて、戀に陷入つた事を決して怒らないで、却つて此れをきいて微笑んで居た、そんな事を知らぬ二人は、

「僕は貴女を今まで見た女の中で最も愛します、而して貴女は世界のちらゆる女の中で一番美しい。」との讃美の語に娘は、

「妾は今まで女の顏と云ふものは覺えが御座いません、又貴郎より外の男の方も見たことが有りませんの、男と云つては父の顏しか知りません、此の島の他の國に居る人はどんな姿をして居ますか知りません、眞實ですよ、然し妾は貴郎以外に此の世の中に誰れも欲しくは有りません、妾が好きな貴郎の外にどんな男の顏を考へる事もいやで御座います、お

や此んな事まで御話して、父の命令を忘れて仕舞ひました。」

プロスペロは又もや微笑んで頷き、「此れで事は思ひ通りに運んだんだ、娘はネープルスの女王になれるんだ。」と獨り言を云つた。

フエルデイナンドは長々と美しい語で、無邪氣なミランダに、僕は將來ネープルスの王になるので貴女を女王にすると云ふことを話して聞かすと、

「其れを御きゝ申しますと何んだか嬉しくつて涙がこぼれます、清い心で妾が申しますが貴郎さへ妾を御娶り下さいますれば、妾は貴郎の妻になりませう。」

フエルデイナンドは思はず感謝しようとした所へ、父プロスペロが現はれて此れを止め、

「娘、心配しなくつてもいゝよ、乃公は今まで皆聞いて居た、フエルデイナンドよ、乃公は御前をひどく使つたから御禮に娘を上げるよ、今までの御前の苦しい役目は皆乃公が、御前の愛を試して見たのだ、御前の眞の愛は實に貴いものだ、其れで此の娘を貰つて行つて呉れ、乃公の娘は立派だと自慢するのを笑つて呉れるな、乃公は今一寸用があるから歸つて來るまで茲に待つてゝ二人が話して居れ。」と此の命令にはミランダは背くことは出來

ないのだ。

プロスペロは茲を去つて幽靈のアリエルを呼んだら直ぐに出て來た、アリエルはプロスペロの弟とネープルス王の事について自分がやつた事を熱心に話し、

「私は彼等の前に、見れば恐ろしくて、覺えがなくなる程の物を種々と現はしてやつた、而して彼等がさまよつて居る間には食物がなくなつた時、不意に御馳走をして見せて、食はうとしますと、私は恐ろしい鷲の風で現はれました、すると今までの御馳走は何處かへ消えて無くなつて仕舞ふんです、鷲の風で私は彼等に言つてやりました、貴樣等はプロスペロと娘を國の外へ追ひ出して、殘酷な奴等だ、其の酬ひが來たんだからさう思へつて云つたんです。

ネープルス王とアントニオは貴郎に對して行つた不正な事を後悔し出しましてね……其の樣子は實際後悔したらしく見えましたよ、ですから流石に私共も氣の毒になつて仕舞ひました。」

「ぢや二人を茲へ連れて來い、幽靈のお前達でさへ氣の毒に思ふ位だ、乃公は彼奴等と同じ人間仲間だ同情するよ、御苦勞だが早く連れて來て呉れないか。」

アリエルは王とアントニオと老人のゴンザロを連れて來た、三人はアリエルが導くために奏する音樂の音を不思議さうにきゝ驚きながらやつて來た、ゴンザロと云ふ老人はかの昔プロスペロが此の惡い弟達から流される時に、小舟の中へ食物や著物を入れて置いて呉れた人であつた。

プロスペロと云ふことをまだ知らない彼等は悲しさと恐れに襲はれて居た、プロスペロはまづ第一にゴンザロを「生命の親だ」と呼んで自分の身を明かしたから、弟と王とは害を加へてやつたプロスペロだと云ふ事が始めて判つた、アントニオは涙を流し悲しさうに心から懺悔して兄の赦しを願ひ、王も弟を助けた事を懺悔した、プロスペロは二人の罪を赦し、二人はプロスペロに領地を元の如く返さうと相談して居るとプロスペロはネープロス王に向つて、

「私も貴郎に贈りたいと思つて居る物が有りますが。」

と云つて戸を開くと其所には王子のフエルディナンドとミランダが將棋をやつて遊んで居

た、互ひに親子は暴風に遇つて行方不明に離れて居たのが、此の不思議な再會に涙を流して喜んだ。

「あら!!　立派な人だ事、此んな人達の住んで居る處はきつと立派な所に違ひない。」と娘はさけんだ、王は、美しい若いミランダの姿を見て、恰度、自分の息子が其處に居たと同じ樣に驚いた。

「此の娘は誰れですか、始めに吾々の仲を離し後に又た結びつけた女神に相違ない。」

王子フエルデイナンドも始めてミランダを見た時に、父と同樣に間違へた事を思つて微笑みながら、

「御父さん、此れも矢張り人間ですよ、然し神樣の御力で此の少女は私の者となりました、御父さんは最う亡くなつたと思ひましたから、御許しを願はないで此の女を選びました、是は此のプロスペロさんの御嬢さんで昔しはミランダの名高い公爵、令名は昔しよく聞きました、今はプロスペロさんを見ないと思つて居ましたが、此の土地で私を助けて下すつた其の上に、可愛い御嬢さんまで頂いてあの方は私の第二の御父さんです。」

「そんなら乃公は其の御嬢さんの父だ、それに……娘に謝やまると云ふのは何んだか變だな。」

「最うそんな必要も有りません、か樣に幸福に後始末がつけば過去の事は御互ひに思はない事にしませうよ。」

而してプロスペロは弟を抱いて再び其の罪を赦し、

「此れは全く神樣が乃公の娘をネープロスの女王にしようと思召しになつて、乃公達を國から追放になつたので、其の御蔭で此の離れ小島で王子が娘を愛して呉れる樣になつたからね……。」

此のプロスペロの親切な語は弟を慰めることが出來ようと思つたが、弟は耻ぢ入つて一言も發する事の出來ぬ位に泣き通して居た、老人ゴンザロも此の樂しい和解を見て嬉し泣きに泣いて若い此の新郎新婦のために幸福あれと天に祈つた。

プロスペロは、

「船は安全に港に着いて、水夫共は出帆の用意をして居ますよ、私と娘は明朝御一緒に參

る事として、私の洞穴で何か食べませう夜には私が此の小島に上陸してからの、生活の御話しも致すますから……おい、カリバンや。」

出て來たカリバンは、食物を洞穴の中へはこんだ、人々は醜い風をした野蠻な化物の樣な顔には驚いた、やがてプロスペロは此の島を愈々出發する事となつた。

出發前には、アリエルの職を免じて此の幽靈を喜ばしてやつた、忠實に主に使へて居たアリエルは、時には自分の翼を自由に驅つて野鳥の樣に、空中やら綠の木の中や、なつた果物の間、香りのいゝ花の中を飛び歩きたかつたのだ、プロスペロは、

「アリエルよ、今は御前を自由にしてやるぞ。」

「難有う御座います旦那樣、然し成らうことなら御一緒に順風と共にあなたの船に御伴致し無事御歸りの後に御解職を、さすれば私も非常に愉快に後々が暮せます。」

と云つて小歌を謠ひ出した。

乃公が願ひは蜜蜂と
一りんざくらを床として
梟の聲に眠りたい
夏は樂しや蝙蝠の
背に打ちのり飛んで行く
面白いぞや乃公は今
枝に花さく下に住む。

プロスペロは今は最う魔法も使ふまいと思つて、魔術の法と杖とを地中に埋めて仕舞つた、仇敵であつたネープルス王の弟と仲直りした上は、故國に歸つて領地を持つことと娘ミランダと王子フエルディナンドとの結婚以外に何も心に殘る事はなく、歸國の後は、直に二人に祝言させてと樂しんで出發した、幽靈のアリエルが安全に送り届けて呉れたので航海は無事にすんで故國に歸つた。

御意のまゝ

封建時代のフランスの國は數多の公國に分裂して居て、互ひに攻爭して居る中には、兄を殺して其の領地を奪ふ弟が出て來る樣になつた、此の領地を奪はれた公爵は數人の忠實な臣下を連れてアーデンの森に退隱することゝなつて、此の人のいゝ公爵は自分のために骨身も厭はず働いて呉れる臣下と一緒に住んで居た、そして領地は敵の奪略に任かせて置いて自分等は何處までも此の舊主人に仕へようと臣等は思つて來たのであつた。

昔しは規則正しい華美な生活も、今は放縱に馴れて、自由な今度の生活を古しへの英國のロビンフードの樣な愉快な暮しに送つて居た、宮中からは毎日多くの貴族共が訪ねて來るし、黄金時代の人々の樣に呑氣に暮して居た、夏の日に一同は大きな木の蔭に横つて野鹿の飛び廻つて遊んで居るのを眺めながら、森の住民の樣な可愛らしい無邪氣な動物を好んで自分等の餌食のために彼の動物を殺すに忍びないと哀れんで居た、冬の風が吹き出して

公爵は自分の境遇の變つた事を思ふては、

「此の寒い風が吾が身體に吹きつけるが吾れのためにはいゝ、相手だ、吾れの事情を眞によく表はして別に吾れに媚びる樣子もない、風は鋭く吹いて刺すとも不親切者や恩知らずの樣にひどくはない、世の人々は逆境に落ちると其處からいゝ方へ脱がれ出たいと思ふことは、藥用の寶石を毒を含んで居る蛙の頭から取る樣なものだ。」

此の樣に公爵は己れの見た物から道德的批判をして人々にもさう敎へて、浮世からは離れて、木の音も人の辯舌と聞き、流るゝ小川からは、青物を得、小石が轉つて居ても御說敎をきくのだと、すべての物を善意に解釋して居た。

追放された公爵にロザリンドと云ふ娘があつた、が、奪略者の公爵のフレデリックが前の公爵を追放した時に自が娘のセリアの友達として宮中に止めて置いた、親達が恨み合つて居るのに此の二人の娘の間は又仲が非常によくつて、セリアはロザリンドの父を己れの父が虐待して權利を取つたのを氣の毒に思ひ、ロザリンドが父の事を思つて悲觀して居る時には、此のセリアは極力此れを慰める事にして居た、或る日の事にセリアはロザリンド

をいつもの樣に慰めて親切に話して居た。

「ロザリンドさん、何うぞ最少し、はき〳〵して下さい。」

と云つた折柄、使ひの者が來て、今相撲が始まるから見たいならば御殿の前の庭へ來いとの、公爵からの通知を傳へて來た、セリアは其れを見たならばロザリンドの心を慰める事が出來ようと思つて一緒に行く事にした。

今の時代では相撲は田舍者に行はれて居るのであるが、昔しは貴族の家庭で流行つたものだつた、其故にセリアとロザリンドは此れを見に行つた、見ると太い骨格の全身を相撲で固めた强よさうな人が、まだ年の若い此の道には未熟らしい人と、試合をするので見物の人々は多分若いのが殺されて仕舞ふだらうと思つて居た。

公爵は見に來た此の二人の娘等に、

「お前達も此相撲を見に出て來たのかい、此んな段違ひの勝負を見たつて面白くもあるまい、あの若い者が氣の毒だ、どうだ御前達があれに試合を止せと云つて見て呉れないか。」

女達は此の事を喜んで、始めセリアが若者に思ひ止れと勸め、次ぎに危險だから止したらどうかと、親切に言つたけれど思ひ止まる所か、反つて此の優しい娘達の前で大に己が勇ましい奮鬪振りを見せたいと思つて、二人の親切の語を無下に斷つて、

「あなた方の御言はどんなことがあつたつて厭やとは申しませぬが、此の事丈は御斷り申します、どうか味方して御覽なすつて居て下さい、何に負けたつて哀れんで呉れる人もなし恥にやなりません、殺されたつて自分の身一つ切りです、何も持つて居ませんから大丈夫、私なんか世の中の場所塞ぎで死んだ方がようございます。」

試合は始つてセリアは若者が無事にと祈つたロザリンも其れ以上に心配して居た、朋友もないから死んだがいゝと云つた若者と同じく、ロザリンも不運な身で、自分が危險の場にある樣に相撲を眺めて居て、戀をして居ると他から思はれる位であつた、娘共の親切な思ひが屆いたものか若者は勇氣が加はつて驚くべき働をした、遂に結果は若者が敵手をさん〳〵に傷けて物言ふ事も働くことも出來ない樣にしたから、フレデリック公爵は此の若者の表はした勇氣と手練を甚く讃め、吾が臣下に列せよと言つて名と家柄をきいた。

「私の名はサーローランド、ド、ボーイの末の子、オーランドーと申すもので御座いま

す。」

此のオーランドーの父サー、ローランド、テイボーイは數年前死んだ人で、かの追放された公爵の親友で臣下であつたのだ、公爵は此の若者に對する態度がすつかりと代つた、氣色を代へて此の場を立ち去つた、兄の友達と云ふ事を憎みながらも青年の勇氣には感じて「あいつが他の人の子供だといゝのだが。」と云つて居た。

ロザリンドは此の新しい好きな若者が、父の舊友の息子であつたときいて喜んで、セリアに話して、

「妾の御父さんはサー、ローランド、ド、ボーイが好きでした、此の人の息子と云ふ事を始めから知つて居たら、相撲止めよと泣いてゞも止めるのでしたのに。」

とのべて、二人は若者の傍へ來た、若者は俄に公爵の機嫌が惡くなつたから困つて居る二人が來て種々と親切に慰めて、去る時にロザリンドは此の大膽な父の舊友の子に振り返つて、己が首から鎖りをはずして、

「あなた、どうか此れを掛けて下さい、妾はもつといゝ物が御上げしたいが、今の不運な身には其れが適いません。」

セリアとロザリンド二人切りの時になると、ロザリンドはいつもオーランドーの事を云ふから、ロザリンドはあの美しい青年と戀に落ちたのだと悟つて、

「あなた、そんなに早くも思ひ込むなんていゝのですか。」ときけば、

「私の御父さんは、あの人の父を愛して居ましたもの。」

「だからつて、あなたがあの人を愛すると云ふ譯も有りませんわ、妾の父があの人を憎みましたから、妾もあの人が憎いかつてさうは行きませんからね。」

フレデリックはローランド、デイ、ボーイの息を見て、貴族の中に、虐待してやつた兄の友達が澤山居る事を怒つた、時には人々が賞める姪のロザリンドをさへ不快に思つて居たが、其の恨みが俄かに出て來て、シーリアとロザリンドが、オーランドーの事を話して居た時に、フレデリックは室に入つて來て、ロザリンドを怒つて打ち眺め此の宮殿を出て入つて追放した父の側へ行けと命じた、シーリアは種々と辯じて賴んだが父は免さぬ。

「ロザリンドを此處へ置いてやつたのも、つまり御前のためぢやないか。」

「いえ妾は置いて頂戴と云つて賴んだ事は御座いません、其の時はまだ年が若くつて、ロザリンドさんはどう云ふ性だか判らない時分なんですもの、然し今は長い間二人が一緒に起き臥しゝて性質も分りました、妾は獨りで暮す事は出來ません。」

「だが彼女は賢過ぎて御前の友達には駄目だ、優しい所や默り者で辛抱强い點等は、人々に賞められて可愛さうだと云はれて居る、彼女を庇うなんて馬鹿だよ、彼女を追拂へば御前は立派な女だと人々から賞められるんだ、一旦此うと云つた日には後には引かぬ乃公だ、彼女の事に餘計な贔負は止したがいゝ。」

シーリアは父の心はどう云つたつて思ひ止まらせる事は無益だと悟り、其れよりロザリンドに從いて行かうと決心して、夜中密に父の宮殿を逃げ出しロザリンドと一緒に、今は追放になりアーデンの森に住居して居る、ロザリンドの父の許に行つた。

逃げ出す前にシーリアは二人の女が、立派な着物を着て行く事は危險だからと、田舍娘の姿に着物を變へて行かうと云ひ出した、ロザリンドは其れよりも男の風をして行くのが最もよい考へだと二人の相談が直ぐに定まつて、ロザリンドは身丈が高いから田舍の若者の風體にシーリアは田舍娘の姿となり二人は兄妹と云ふ事にして、ロザリンドはガニミードと云ひシーリアはアリーナと呼ぶ事にした。

此の假裝で寶石や金錢を持つて、二人の姫君達は長い旅路に上つた、アーデンの森は公爵の領地から遠く離れて居る所にあつたのだ、ロザリンドは男裝したから中々衣服の工合が立派な男になつて居たが、親切なシーリアは新に兄としてのロザリンドを賴りに勞れながら伴いて來た、ロザリンドは眞に兄、ガニミードと呼んでもいゝ位に、此の妹の田舍娘アリーナを慰めながら氣丈夫に連れて歩いて行つた。

遂にアーデンの森に着いたものゝ適當な旅店もないし、食物と休む所が無いものだから今まで妹に面白い事を話して慰めて來たガニミードも、今は勞れて、

「妾は男の着物を着て居るのが心苦しくなつて仕舞つた、女の樣に泣きたくなつたわ。」

「最う此れで歩くのは止しにしませう。」

ガニミードは男として女を慰めるのが、義務だと云ふ事を思ひ出し、新しい妹に勇氣をつけようと思つて、

「妹！　アリーナ最う旅もお仕舞ひだ、アーデンの森は此處だぜ。」

と慰めても勞れた女の身にはどうする事も出來なかつた、假令此處がアーデンの森でも何處に父の公爵が居るか知らない、二人の女は悲しくなつては來るし腹は空いて來る、其の上道を迷つたので、落膽して草の上に座つて死を待つて居た、其處へ通りかゝつた一人の田舍者をガニミードが呼び止めて、男らしい調子で話しかけた。

「おい御前の親切でも金づくでもいゝ、何處か休む所へ連れて行つて呉れないか、此の女はね、妹だが草臥れて腹が減つて居るんだ。」

「私はほんの羊飼の下僕で主人の家は今賣家にならうてんで、其處へ行つたつて何も有りません、然し有り合せの物で宜くば其處へ行つたら、主人は喜んで御迎へしませう。」

二人は其男に隨いて行つた、まづ助かつたと思ふと新しい元氣が出て來たのであつた、後に此の羊と家とを買つて其の男を下男として、茅屋ながらも食物には困まらないで、父公爵の家が見付かるまでは茲に滯在する事に定めた、旅の勞れで休んだ後は此の新生活が面白くなつて來て、羊飼夫婦の樣な氣になつて住んで居た、時としてはガニミードも、嘗て、大膽なオーランドー青年を戀したロザリンド姫の心にかへつて青年の上を思ふ事もあつた、嗚呼彼の青年は父の舊友の息子であつた、妾は其の居る所から勞れ果てゝ此所まで離れて仕舞つたが、妾の身とオーランドーとの間も此んなに離れたのかと思つて居たが、計らずも其の青年オーランドーは矢張り此のアーデンの森に來て居たのであつた。

サー、ローランド、デイ、ボーイは自分が死ぬ時に末子オーランドーは、まだ年が若いから長男オリバーに監督を依頼して、良敎育を授けて祖先代々の家名を傷けない樣にと言つて死んだ、オリバーはつまらない男だつたから、父の遺言を守らないで弟を學校へもやらず、家へのらくらと遊ばせて置いた、然しオーランドーの氣高い性質は亡くなつた父に能く似て居て、敎育がなくとも良敎育の下に育つた人と同じ樣な風だから、オリバーは此の弟の秀でて居る人格や風采を嫉んで、亡きものにしようと思ひ、多くの人々を殺した有名な相撲の達人に命じて殺して貰はうと思つた、而して前に書いた樣に弟を試合に勸めたのであつたが、まんまと失敗したのである、實に殘酷極まる長男であつた。

當て事は外れて、弟が勝つたものだから、兄の憎しみは益々大になつて、オーランドー

の寢て居る室を燒き倒さうとした、其の計畫を亡父の臣下でサー、ローランドに似て居る末子のオーランドーを好んで居た者が、此れを立ち聞して居て、公爵の宮殿から歸るのを待つて、今や危險の迫まつた此の若者を助けようと、

「おゝ若樣、御優しい若樣!!　何故貴郎樣はそんなに御正直で御溫和しくつて居らつしやいます、又何故に有名な力士と試合をなさる程、御勇氣を御持ち遊ばす?　あなたの御豪い御評判は御家に迄も最う來て居ます。」

「何云つてるんだい、何事か起つたのか。」

老人は彼れに向つて惡者の兄がオーランドーに人望の有のを嫉み、今又公爵の宮殿で試合に勝つた名譽を聞いて、彼れの寢室に火をつけて亡きものにしようとして居ると話し、最後の法としては、一時も早く此處を逃げて危險を避けたが宜からうと勸めた、此の老人の名はアダムと云つた人で、オーランドーに金が無い事を知つて居たから、自分の貯へから出して與へ、

「貴郎の御父樣から頂いた御金を貯へて置きまして、此に五百クラウン丈け有つて居りますし、此れは老が寄つて最う御奉仕することが出來なくなつたときの用意のために備へて居ましたんですが、此れを若樣に差し上げませう、後のことは何にどうにでもなりす、鴉だつて神樣の御蔭で生きて居ますから、私は此う老人に見えても若樣の御用にかけては何んでも若い者に劣らないで、御働き致すつもりで御座います、さあ!　此の御金を御持ちなさい。」

「おゝ老人能く御前は先代より忠實に仕へて呉れた、當世の人とは違つて居る、ぢや御前と二人で一緒に茲を立ち去ることにしやうか、何處かへ行つて其の御金を無駄にしないで何か二人でいゝ方法を見付けよう。」

かくて二人は此處を出發してあてもない旅に出かけた、而してアーデンの森に來た時には丁度先きに話した、ガニーミードとアリーナが出遇つた樣な困難を二人も此處でやつたのだ、二人は矢張り誰か人に遇ひたいと、勞れと空腹を忍びながら歩き廻つたが、アダムは遂に堪えかねて、

「旦那樣、私は空腹くつて死にさうで御座います、最う到底も歩けません。」

と云つて地上に倒れ、最う死ぬものと覺悟して、主人に告別した、オーランドーは此の老人の弱つた有樣を見て、老人を腕に抱きながら心持のよい木の蔭に連れて行き、

「おい老人や此の木の下で勞れた體を休めて居れ、死ぬなんて云つちや駄目だよ。」

と云ひ捨てゝ食物を探しに出かけて行つた、丁度森の一部に來ると其處には公爵や其の友達が一緒に晝飯を食つて居る所へやつて來た、公爵は草の上に座つて大きな木が屋根の樣に其の上に茂つて居た、オーランドーは此の食物を奪ひ取つてやらうと己が劍を拔いて、

「おい待て其れを食ふな、乃公に渡して仕舞へ。」

「御前は苦しまぎれに其んな事をするのか、或は又始めからの無作法者か。」

「實は私は空腹で死にさうで御座います。」

「そんなら何もそんな眞似をしなくも、此處へ來て一緒に食へばいゝぢやないか。」

オーランドーは此の優しい語をきいて、劍を收めて今までの粗暴な振舞ひを赤い顏して謝した、而して食物を頂きたいと願つた。

「どうか御赦しを、實は此の森に居る者は皆亂暴な連中ばかりと思つて居たものですから、つい六つかしい顏をして見ましたが、こんな大きな木の下に呑氣さうに暮して御出でになる貴郎達は、一度は榮華な日を送り、敎會の鐘の音響く處に御育ちになつて、貴人の饗宴にも御出席になつた事もありませう、人の憐れに御同情の涙のある御方ならば、今の亂暴を謝しますから、どうか御助け下さい。」

「さうだ私達は一度はいゝ身分の者であつた、今は此の恐ろしい森に住んでは居るが街や市に住んで敎會の鐘聲を聞いた事もあり、貴人の招待にも預り、同情の涙に咽んだ事もあるから、まあ座り給へ、而して君の欲しい丈け食ひたまへ。」

「實は私の身を愛して呉れます一人の老人が、私と一緒に來たんですが、飢えと勞れが出まして、動く事も出來ぬ位に弱つて居ます、其れに食はせない中は一片も私は食べる事は出來ませぬ。」

「そんなら其の人を連れて御出で、君が歸つて來るまでは食はないで待つて居るから。」

オーランドーは恰も牝鹿が子に物を與へる樣に飛んで行つたが、やがて腕にアダムを抱へて來た。

「其の大切な荷物を茲に置いて座り給へ、二人共よくお出でだ。」

老人に食物を勸めて慰めてやつたから、老人は漸々と健康狀態になつて來た、公爵はオーランドーの名を聞いて、己が舊友のサー、ローランド、デイ、ボーイの息子であると知つて、自己の保護の許に置いた、オーランドー主從は公爵と共に森の中に住む事になつた。

オーランドーが茲に來た時はガニミードとアリーナが着いて羊小屋を買入れてから、幾日も經ぬ時であつた、ガニミードとアリーナは森の中の木に、ロザリンドと云ふ名を彫りつけて、其れにロザリンドを戀る歌が掲てあつたのを發見して、二人は大に驚きどうしてこんな物があるかと考へて居たが、或日偶然にオーランドーに遇ひ、彼れの首にかゝつた見覺のある鎖を見付けた、而して其れはロザリンドの與へた物であると云ふ事が判つた。

然しオーランドーは、あの氣高い優しい情のあるロザリンド、自分が胸の中にいつも影のあるあの女、木に名を彫りつけてまで戀ひ慕つて居たあの女が、今見た羊飼ひだとは思はなかつた、小奇麗な羊飼ひの若者の品のいゝ所が氣に入つて、言葉をかはす樣になり、どこか戀しいロザリンドに似て居るとは思つたが、貴いお姫樣の風が無い樣に思はれて居た、それにガニミードが子供と成人の何方にもつかぬ樣子をして滑稽を交へて話して、

「僕は此の頃此の森の中で、若い木の葉を取つてロザリンドと云ふ名を彫りつけ、荊棘に種々の歌が掲てあるのをよく見るがね、其れが皆ロザリンドと云ふ女をほめてあるんだ、僕が其れをかいた戀人に逢ふなら、戀に關していゝ相談相手になつてやるんだがね。」

オーランドーは戀人とは實は自分であると白狀して、いゝ相談とは何だかとガニミードに聞いて見た、ガニミードは此れから毎日、自分と妹のアリーナの住んで居る小屋へ來るがいゝと話して、

「そしてね僕がロザリンドの眞似をするんだ、君はロザリンドに戀をする樣子をして、僕は出來心の女共がする樣に、君の戀に對して愛想づかしをやるよ、そすれば君の戀を癒す一方法だと思ふ。」

オーランドーは此れでは餘り快らないと思つたが、兎に角ガニミードの家へ行く事に贊成して、毎日ガニミードとアリーナとを訪問して、羊飼ひのガニミードをロザリンドと呼び、甘い戀の話しをやり出し、若者が戀人の機嫌を取る樣にやつたが、ガニミードはロザ

リンドを戀ふるオーランドーの惱みを癒すと云ふ事は大した進歩が出來なかつた。

オーランドーは此れは、ほんの笑談の戯れだとは知りながら、自分の胸中の事を話し等し、ガニミードは此れをきいて滿足して居た、此の二人の若者はかくて數日を暮し、人のいゝアリーナも、ガニミードの幸福を見ながら、其なすがまゝにして置いて、面白がつて居たのだ、ロザリンドも父の公爵に自分の事を話さない樣にオーランドーに云ふ事は氣が付かなかつた、最う此の時はオーランドーから父の住所をきいて知つて居たのだ、或る日ガニミードは父の公爵に出遇つたが、公爵は話の末に、ガニミードの家柄を聞いた、其の時貴郎の家と同じだと答へた、公爵は、小奇麗な若者とは云へ羊飼ひが乃公と同じの家柄などとはと思はず笑ひ出した、ガニミードは公爵の樣子が健康らしく見えて居たから、話しを打ちあけることを今暫らく延して置く事にした。

或る朝オーランドーが、ガニミードを訪ねて行かうとした時に、一人の男が地上に眠つて居て大きな綠の蛇が其の首の周りに卷きついて居た、蛇はオーランドーの近付いて來るのを見て忙いで藪の中へ逃げ込んだ。尙ほ近づくと、牝の獅子が地上に頭を上げて居る、獅子は寢て居る人や死んだ人を食はないから、男の眼の覺めるのを猫の樣に戍守つて居た、オーランドーは丁度、此の人を救ふために、神樣から云ひつかつて此處へ來た樣なもので其の男の顏を見ると其れは自分の殘酷な兄のオリバーで、オーランドーを燒き殺さうとした位の奴であつた、其れ故に此の兄を獅子に食はせてやらうかとも思つたけれど、兄弟の情誼と、優しい性質のオーランドーは此の兄に對した初めの怒りを止めて、劍を拔いて獅子を斬つて殺し、毒蛇と猛獸との二つの危險から兄の生命を救つた、然し其のために獅子の牙で自分の片腕を傷けられた。

此の獅子と格鬪中に兄オリバーが目を覺ますと、自分がいつか虐待した、弟のオーランドーが、己が身を救はんために鬪つて居るのを見て、耻しさと後悔に堪えかねて、己が行爲を弟の前で涙を流して謝した、弟は、兄の後悔したのを喜んで其の罪を赦してやつた、互ひに抱き合つて嬉し泣きに泣いた兄は實は弟を殺さうとして來たのだつたけれど、此の時から、眞の愛情で弟を愛した。

オーランドーは腕の出血が烈しいために、ガニミードの所へ行けないと言傳けをして貰

ふ事とし、

「其の人の名は假りに笑談に、ロザリンと私が云つて居ます。」

と自分の災難を告げさせた。

オリバーはガニミードとアリーナの家へ行つて、オーランドーの大膽な話しをして、彼が自分の生命を救つて呉れ、而して自分は昔し彼れを酷く扱つた兄であると打ち明けて、二人の仲の和解したと云ふ事を話した。

オリバーが己が前非を悔いた其の優しい心に、アリーナは直にオリバーを愛する樣になつた、オリバーも自分の苦惱を斯程に同情して呉れるアリーナの心を難有く思つて、アリーナと戀に陷入つた、二人の戀は其れでいゝとしても、ガニミードの心はオーランドーが危險を冒し獅子のために負傷したと云ふことについては非常に心配して、人事不省になつて仕舞つた、正氣に返ると、

「僕はあのロザリンと云ふ女の性格を示さうと思つて、態とこんな風にして見たのです、オリバーさん、どうか弟さんに僕どんなに巧く芝居をやつたか、話して下さいと。」

然しオリバーは此れは眞に、正氣を失つたので若い者に似合はない弱い男だと見て、

「今女の眞似をしてさう云ふ事を御やりになつたのなら、今度は男の樣に氣をしつかりと御持ちなさい。」

「左樣ならさう云ふことにします、いつそ僕は女に生れた方がよかつたんだ。」

オリバーは長い間を此の訪問に費して、弟の所へ歸つて來て此の話しをして、ガニミードの弱つた樣を語り、羊飼ひの娘のアリーナと戀し合ふに至つた事、其れ故自分は此處で、あの女と結婚して羊飼ひとなつて止まり、自分の財産はオーランドーにやると云ふ事も云つた、オーランドーは大に賛成して、「それはいゝ事です、其れぢや明日結婚なさい、而して其の席へ公爵や友達を招待しませうよ、一寸行つて羊飼ひの娘に其の話しをして居らつしやい、ガニミードは今私の病氣の見舞に來ますから私は獨りで居ますよ。」

オーランドーとガニミードは、オリバーとアリーナの間に起つた急な戀について、話し合つて居た、而して明日オリバーは結婚をする樣に取り計らひ、自分の身も懷しいロザリンドと結婚する樣になつたらば、どの位樂しいだらう等と話した、ガニミードは其れはい

い事だと云つて、

「君が眞にロザリンドを戀ひ慕ふ事が、君の云ふ通りなら明日はロザリンドの姿を君に見せよう、其のロザリンドは君に結婚の約束をするだらう。」

此話しは不思議な樣だが、ガニミードはロザリンドであるからちつとも不思議ではないので、其を魔術か何かでする樣に云つて、此術は伯父の有名な魔法使ひから、習つたんだと云ひ譯をして居た、オーランドーは半信半疑で此を聞き眞面目な話かときけば、

「僕の生命に懸けても承け合ふ、だから君も晴着をつけて結婚式に公爵やなんかを、招待し給へ、君さへ結婚したい氣なら、女は明日茲に來るよ。」

皆は、此の二組の結婚式を祝はうと集まつて來たが、まだ一人、嫁の姿が見えないので、可怪しな事だ、ガニミードが、オーランドーにからかつたなと思つて居た。

公爵は自分の娘が茲に今日は來ると云ふ樣な事だから、其の羊飼ひが連れて來るか知らんと思つてオーランドーに尋ねて見た。

「さあ其れは眞ですかどうですか。」と答へた時、ガニミードが出て來て、

「若し私が御姫樣を御連申せば、結婚は御赦し下さいますか。」

「赦してやる共、澤山の王國をつけてまでも許すよ。」

やがてガニミードとアリーナは去つたが、ガニミードは男の服裝を捨てると、最う魔術なんか使はないでも元の女の姿となつて、ロザリンド姫に成り變り、アリーナも田舍娘の服裝を取り去つて美しい着物をつけると、何の苦もなく昔しのシーリア姫に成つた。

後では公爵がオーランドーに、どうもあのガニミードは娘ロザリンドに似て居ると話すと、オーランドーも左樣思ふと答へた、應がてロザリンドとシーリアは名々の服裝で入つて來た、ロザリンドは魔術でやつた等とは最早や詐れず父の膝の下に跪いて、祝福を祈つた、一同は本當に魔術の力で斯うなつたのか知らんと思ふ位で、然しロザリンドは今までの話しをのこらず話して從妹のシーリアを妹の樣にして、連れて來た事を物語つた。

公爵は大に喜んで先きに承諾した結婚を是認したから、オーランドーとロザリンド、オリバーとシーリアの二組の結婚は同時に擧げられた、此んな森の中の事とて素より莊麗には此の結婚式が行はれず、然し幸福な結婚である事は類がなかつた、一同は涼しき木蔭に祝

宴を開いて、公爵も此の戀人共も滿足の極みであつた、其處へ突然使者が來て公爵の領地が戻る樣になつたと云ふ喜ばしい報知を持つて來た。

奪略者の兄の公爵は娘シーリアの逃げ出した事を大に怒つて、又追放された公爵の居るアーデンの森には人々が毎日集まつてると云ふ事をきゝ、大に其の人望を嫉んで大軍を引いて己れは其の指揮官となつて、兄を始め其の臣下共を殺さんと此の森に進んで來た、所が、神は此の惡い兄の心を悔悟させる樣に導いた、森の入口で隱者の德の高い僧に出遇ひ其の人の話しを種々ときいて、己が非を悟つて眞人間にならうと心を改めた、自分は以後は僧となつて寺に暮さうと考へて、不正に奪つた領地を返さうとて第一に使者を送つた。

思ひがけなく此の吉報が二人の女の、結婚の日に來たので從姉の父の公爵のために自分は最早や國の後嗣には成れないとしても非常に喜んで心から御祝ひを述べた、それでロザリンは後嗣となつたが二人は決して嫉み怨みは交へて居なかつた、公爵は追放中に忠實に一緒に暮して呉れた臣下共に賞與を出し、忠義な臣下共も芽出度く舊領地へ公爵と一緒に歸る事を限りなく喜んだ。

から騷ぎ

メッシナの宮殿に、二人の姫君が居て其の名はヒーローとビートリスと云つて居た。

メッシナの領主はレオネトと云ひ、ヒーローは娘でビートリスは姪にあたる娘であつたがビートリスは愉快な性質で突飛な戯談を云つては、從妹のヒーローが氣が鬱いで居る時に慰めて居た。

此話が起る時は、恰も軍隊の高位にある若い人達が戰爭を終つてメッシナの街を、通る序にレオネートを訪問に來た時であつた、アラゴンの王子のドンペドロニフローレンスの貴族クローデイオも友達として來た、又氣輕者の、バヂユアの貴族ベネディックも來た。

此れらの客人は前にも來た事があつたので、主人の領主は、娘と姪を舊知己として引き會せた、ベネディックは早やくも室に入つて來て、レオネートや其子と一緒に活潑な會話を始め出した、話相手から除け者にされる事が厭ひなビートリスは、

「ベネディックさん、貴郎はまだ喋つて居らつしやるの、誰れも貴郎を見て居ませんのに。」

ベネディックも此のビートリスの樣ながちや〳〵者の此の遠慮のない言ひ方に氣まづく思ひ、あんなに喋る女はきつと上品な者にはなれないと考へて、此の前にメッンナに來た時にあの女が始終、笑談をいつては嬉しがつて居た事を思ひ出した、然し斯う云ふ笑談を云ひ合ふ樣な事は餘り惡くもないものと見えて、二人は、また彼れ是れと、戯談や罵り合つて御互ひに終にはいやな氣持になりながら、

「御孃さんあなたはまだ生きて居ますか。」と今ビートリスが云つた言葉に對抗した。

今や爭ひは兩人の間に始まつて長い間罵り合つて居た、ベネディックが先きの戰ひで勇敢な働きをした事は、ビートリスも知つては居たが其れを冷笑し、王子がベネディックの話しを喜んできいて居たのを見て「王子の幇間だ」と笑つた、此の冷語がベネディックの心を一番深く刺し尙ほも女は「臆病者」だと罵つた、戯言は最う通り越して眞實になつて來た、ベネディックは、「王子の御幇間」と云はれてから、ビートリスを惡い女だと思つた。

優しいヒーロー姫は貴い御客樣の前に默つて座つて居た其間はクローディオはヒーローの美しさに見とれて居た、王子はベネディックとビートリスの二人の口論に大に驚いてレオネートに囁いた。「あの人は愉快な御孃さんですね、ベネディックには過ぎた妻です。」

「あの人達は一週間の間でも結婚して居たら狂人の樣に兩方が話し合ふでせう。」

レオネートは不釣合な夫婦と考へ、王子は此の二人の論を始終考へて居た。

王子はクラウディオと共に此の宮殿から歸つて、いゝ連れ合ひだと賞めるものは一人もないビートリスとベネディックを一つ結婚させて見ようと考へ、同時にクロウディオもヒーロー姫の事を云つて居るから此れを一緒にしようと考へて、

「君はヒーロー姫を愛するかね。」

「此の前僕がメッンナに行つた時は、軍隊生活の軍人として彼の女を見たんで、好きでは有つたが戀する程ではなかつた、今は平和の時で戰爭と云ふ觀念が僕の胸を去つて、優しい軟かい感情になつて居るから、美しいヒーローが急に好きになつて戀しい。」

然し王子がレオネートにクロウディオを婿にして呉れと、願ふ氣を失はない樣に旨く取り計つたから、レオネートは此れを承知して、氣高いクロウディオと優しいヒーローとの

婚約は難なく成立し、人望あるクロウディオは友の王子の親切に依つて、一日も早くヒーロー姫との結婚式を擧げようと日を選むべく考へて居た。

然しクロウディオは此の美人との結婚が、まだ五六日待たねばならぬので、長引く事が不平だつた、クロウディオには堪えがたく長いと思はれても、王子は自分には此の短い時日の中に、ベネディックとビートリスとが御互ひに戀し合ふ樣になる樣な、其う云ふ旨い場合はないかと考へて居た、此れをきいたクロウディオは大に賛成して、レオネートも助力しようと約し、ヒーローも從妹のためにいゝ夫が出來ると云ふ事なら、どんな仕事でもすると云ひ出した。

計畫は此の人々がベネディックにビートリスが君を愛して居ると云ふを知らせ、ヒーローはビートリスにベネディックが貴女を愛して居ると云ふ事を知らせなきやならぬと王子は考へた、王子とレオネートとクロウディオが愈々實行する事に決し、ベネディックが園亭で書見をして居る時に、王子は園亭の後の木の中へ入つて、態と聞える樣に、

「レオネート君來給へ、先日貴郎が御話しになりました事は、何ですつて？　あのビートリスがベネディックに戀してるつて事ですか、僕はさう云ふ事とは思ひませんね！」

「いや、あの女がベネディックさんに氣があるのは不思議ですよ、あの男を嫌ひな樣な風をして居ます所が面白いぢやありませんか。」

「さうだ、其れにつきヒーローが僕にいつか話しましたがね、ベネディックさんをビートリス孃が思ひ焦がれて、若し妻にして頂けなきや絶望の餘り、死んで仕舞ふとか云つて居たさうですよ。」

日頃美しい女達、殊にビートリスに對して罵つたベネディックの事だからそんな事はない等と話して居た。

「此れはベネディックに聞かした方がいゝと思ふ。」

「なぜ、それは笑談かも知れぬ、却つてビートリスさんが困るかも知れぬ。」

「いや笑談ではない樣だ、ビートリスさんは實にいゝ女だ、ベネティックを愛するとは實に賢い女だ、さあ彼方へ行かう。」

二人は此の話をベネディックに聞えよがしに話しながら立ち去つた、ベネディックは熱

心にきいて居たが、「そんなことがあるか知らん」と考へ初めた何かニコ〳〵と、獨語をつづけて、

「此れは計略ではない樣だ!! ヒーローさんからきいたと云つてる、乃公を戀して居る!! 考へものだ、乃公は決して結婚と云ふ事は考へて居なかつた、然し乃公は獨身で死ぬと言ふのもつまらぬ話だ結婚と云ふことも考ふべきだ、皆は女が綺麗だと云つたが實際あの女はさうだ、又乃公を戀する位賢いとの事だ馬鹿ぢやない樣だ、やあ彼女が來ややがつた、一つ己に心があるか探つてやらう、今日も相變らず彼女は美しい。」

ビートリスは側へ來ていつもの樣に威張つて、

「妾は厭やなんですけれど、今日の晝飯に貴郎を御招して來いと云ふ事でした。」

ベネディックは彼女に對しては、政略的に話さうとは思はなかつたが、

「其れはどうも御苦勞樣。」

ビートリスが二言三言亂暴な口を利いたけれど、ベネディックはあんな口調で云つて居ても親切を隱して居るんだなと思つて、聲高く云つた。

「彼女を可愛いと思はなきや乃公は惡者だ、彼の女を戀せねば乃公は猶太人だ、其の中に本心を確めよう。」

と此のベネディックは皆の計畫通りに旨く綱に引つかゝつた、此度はヒーローがビートリスを旨く引きかける役目だ、此の爲めにヒーローは自己に使つて居る二人の侍女、ウレスラとマーガレットとを呼んで、まづマーガレットに、

「マーガレットや、客間へ行つて見て御出で、ビートリスさんが王子樣やクロウディオと談話して居なさるだらうからね、其の時にビートリスさんに、そつと今妾とウレスラとが花園に散歩して貴女の事について話し合つて居ますつて、さう云つてお呉れ、而して忍冬の茂つて居る園亭の中に隱れて居る樣に云つておくれ。」と園亭の中へビートリスをば誘ひ入れる樣にマーガレットに命じた、其の園亭は前にベネディックが自分の噂を聞いて居た場處であつた、マーガレットは、

「畏りました、御云ひ付けの通りに致しませう。」と答へた。

ヒーローはウルスラと一緒に花園へ行つて、

「ウルスラや、ビートリスさんが來た時には、此の小徑を往つたり來たりして、ベネディックさんの噂ばかりしますから御前は人一倍にあの方を賞めてお呉れ、妾はね御前にベネディックさんがビートリスさんを愛して居ると云ふ事を話しますからね――いゝかい、さあ始めるよ、ビートリスさんが妾等の話しをそつと今きゝに來るからね。」

やがて話しは始まつた、ヒーローはウルスラが話した事に答へる樣な調子で、

「いえきつとさうだよ、あの心はね――岩の中に入つてる鳥の樣に耻がつて居らつしやる癖にあの方は餘り輕々しすぎるからだね――。」

「ですけれど、ベネディック樣がビートリス樣を御愛しなすつて居らつしやる事は確かで御座いますか。」

「王子樣も妾の夫クロウディオも云ひました、而してビートリスさんに其う知らせて呉れと妾は賴まれたんだけど、妾はあの人等に、若しベネディックさんを思つて下さるなら、さう云はないで置いた方がいゝでせうと云つて置いたよ。」

「さうです共、其の事をあの方が御知りにならない方がいゝんです、其うでなけりや、ビートリス樣は其れにかこつけて御戯談をなさいますよ。」

「ほんとにあのベネディックさん程、利巧な氣高い青年は妾まだ見た事がないよ、ビートリスさんは御嫌ひになつてる樣だ。」

「さう云ふ樣な御考へは餘り當つてる方ぢや御座いませんと思ひます。」

「然しビートリスさんに誰が其の話しをしたがいゝか知らん、妾が話せばきつと嘘だと笑つて仕舞ひなさるんですもの。」

「おゝ貴女樣は御從妹樣を惡者になさいます事、あの女もベネディック樣の樣な立派な方を御厭やなんどと思し召すものですか、正しい御心があれば左樣は云へませぬ。」

「あの御方はイタリーの國でも妾の夫を除けては、實に名譽ある方なんだよ。」

と今度は話題を代へる樣に眼くばせをすると、ウルラスは、

「御姉樣はいつ御結婚遊ばします。」

「明日にしようと思つて居るが、明日はどんな着物を着ていゝか御前相談して御呉れ。」

ビートリスは此の對話を熱心に息もつかずに聽いて居たが、二人が立ち去つたのを見濟

まして、叫んだ。

「妾には寝耳に水だ、ほんとうだらうか、嘲笑や輕視の心はもう御さらばだ、處女の驗しも最う止めだ、ベネディックさんを愛して、妾の亂暴な心はベネディックさんの可愛がつて下さるあの手の中に、馴れ込んで仕舞ひませう。」

此の昔の仇敵が、新しく愛すべき友達となつたと云ふ事は實に喜ばしい事で、かの頓才のある良き王子の計畫で此の兩人が互ひに好きになる樣に詐かされた後の、兩人の會見は面白い觀物だ。

然し茲にヒーロー姫の運に一つの悲しい反動が起ると云ふ事を考へて來た、其れは結婚の朝に、ヒーロー姫と父のレオネートの間に悲しむべき報せが來た、王子には腹違ひの弟があつたメッシナに王子と一緒に戰爭から歸つて來た人で、ドン、ジョンと呼んで氣の鬱鬱とした面白くない人で惡いことを企む性質の人だつた、日頃から兄の王子を惡んで居て又其の友のクロウディオも惡んで居たから此の人とヒーロー姫との結婚を邪魔してやらうと、惡人仲間のボラチノと云ふ人を雇つて、此の事に關して旨くやるなら、賞美を出すと云つて賴んだ。

其處でボラチノはヒーローの召使ひのマーガレットの御機嫌を取つて取り入つて、ヒーロー姫の寢た後で、姫の寢室の窓へマーガレットがヒーロー姫の着物を着てクロウディオにヒーロー姫だと見える樣にすればいゝので、而して其の姫の風采で私と話しをして呉れと、ボラチノが賴み込んだのが、此の惡計の法であつた。

其して置いてドン、ジョンは王子やクロウディオの所へ行つて實にヒーロー姫は輕卒な女だ、姫は眞夜中に寢室から男と密會をすると云ひふらした、此れが然かも結婚の前晩の事でドン、ジョンは其の現場を皆に御覽に入れると云ひ、皆は其れに贊成してクロウディオは、

「よし今晩は其の證據を見屆けて、明日結婚の式場で彼の女をうんと耻かしめてやる。」

「さうし給へ、僕も其の事については大に君に助力するから。」

ドン、ジョンは其の夜皆をヒーロー姫の寢室近くへ連れて來ると、其處にはボラチノが立つて居てマーガレットと話しをして居て、ヒーローの着物そつくり着込んだマーガレット

の姿は、王子もクロウディオも彼女はヒーローだと信じ込んだ、此れを見てクロウディオの怒りは頂點に達し、ヒーローを此れまで愛して居た心は遽に、憎惡に變じ、此の惡い女のための罰としては、敎會で此の結婚前に於て男と密會した事を曝露してやると勢ひ込んで居た。

翌日人々は結婚を祝はうと集まつて來て、クロウディオとヒーロー姫は僧の前に立ち僧は愈々祝言の事に進まうとした刹那に、クロウディオは聲を激して、此の何も知らないヒーロー姫の罪を鳴らした、姫は此の語に驚いて、

「あんなに荒立つて仰有やいますが、正氣でせうか。」

レオネートは恐れて王子に向ひ、

「君!!　何で君は默つてるんだ。」

「僕は何か云はなくちやつならないですか、僕は親友をつまらぬ女に介した事は實に不名譽だと思つてる所だ、レオネートさん、僕自らも、僕の弟も、今悲しんで居るクロウディオも、現在昨夜ヒーローさんが、寢室の窓から男と話して居る所を見たんですぞ。」

傍に來合せて居るベネディックは此れを聞き驚いて、

「此れや婚禮らしくないです、喧嘩だ。」と云つた。

突然の事に傷心したヒーロー姫は、「おゝ神樣!」と僅かに云つたが、其儘其所で、顏色は死んだ樣に變つた、王子とクロウディオは其んな事は御構ひなしに、敎會を立ち去つて仕舞つた、ベネディックは後に殘つて居て、ビートリスはヒーローを介抱して居た、ベネディックは、

「どうしたんです一體?」ビートリスは愛して居る從姉の事だから、

「妾は死んだのかと思ひましたよ。」ヒーロー姫の德の高い性質を思ふては、此んな話しは信ずる事が出來ないと云つた、哀れなのは父のレオネートで、吾が娘の不名譽を罵られて悲しみの餘り、最うあの娘は生きてなくともいゝと思つて居た。

老僧は人情によく通じて賢い人であつたから、注意して姫の顏を罵られた時から見て居た、姫の顏は始めは驚いて耻ぢて赤めた色をして居たが、後に其の赤めた顏を消す天使の樣な白い色が見え、姫の眼に自己の無實の罪だと云ふ事を證する樣な輝きを見たから、悲

哀に沈んだ父に向つて、

「此の美しい御嬢さんが誤解されたのだ、若しも、私の信ずる事に、誤りが有つたとしたらば、私を馬鹿とも御叫び下さい、私の説教を御信心なさらなくも宜しい、私の観察、私の年齢、名譽を御信用なさらなくても宜しい、御嬢さんは確に罪は有りませぬぞ。」

ヒーローが正氣に歸つた時に、僧はヒーローに言つた。

「御嬢さん、貴女を今罵つた人はどんな人ですか。」

「其の人達は妾を罵るべき事を知つて居ませうけれど、妾は何にも知りません。」

ヒーロー姫は父に向つて、

「御父さん、妾が昨晩他の男と密會して居たと云ふ事を御信用になりますなら、妾を憎んで殺して下さい。」

「此れは何か不思議な事で、王子様とクロウデイオさんが誤解してるに違ひない。」

と僧はレオネートに、ヒーローは死んだと云ふ事にして、彼等に知らせるがいゝ、丁度倒れて居る時に歸つて行つたから都合がいゝ、其れでレオネートは非常に悲しんで葬式の用意をして置けと云つた、父は、

「其してどうするのですか。」

「御嬢さんの死んだと云ふ報知は、彼の人等が憎んだ心が哀れみの心に變ります、此れでいゝのですが、まだすつかり、いゝのぢやありません、此の報らせを聞いてクロウデイオさんは御嬢さんの生前の行ひを考へ出します、而して叱るべき罪が假令あつたにせよあんなにひどく、責るんぢやなかつたと云ふ事を考へ出して、元戀して居た通りに悲みます。」

ベネディックは此れをきいて居て、

「レオネートとさん、今の御話しの通りになさい、僕はいくら二人と親しくつても此の事は秘密にして置きますから。」

レオネートは此う云ふ事に強いられて悲しさうに、

「此んな小さい足手纏ひが、私の身について居ますのが悲いんです。」

親切なレオネートとヒーローを慰めて去らしめ、ビートリスとベネディックは二人茲に殘つて居た、此れは二人の身に計畫が行はれてからの初めての會見で、兩方の心の變る樣

と期待されて居た、悲しさに二人の心は捕へられて快しい思はなく、ベネディックは話しかけ、

「ビートリスさん貴女は今まで泣いて居ましたか。」

「はい最う少し泣かして頂きます。」

「たしかに貴女の美しい御従姉さんは悪いと思ひます。」

「あの女の正しいと云ふ事は妾が證據立てねばなりません。」

「どうして其れをなさいますか、僕は世の中に貴女を一番愛して居ます、其れは不思議ではないでせうか。」

「其れは不思議ぢや有りますまい、妾にだつて、貴郎を世の中で一番愛して居ますと云へますもの、然し御信用なさいますな、而してまだ妾は嘘を云つた事は有りませぬ、妾は白狀する事も拒む事もありませぬ、妾は従姉の身の上が悲しう御座います。」

「貴女は僕を愛して呉ます、僕は貴女を愛すると斷言します、さあ貴女のためにどんな事でもして見せます。」

「ぢやクロウーディオさんを殺して下さい。」

「其れは飛んでもないこと！」ベネディックは親友を愛して居た。

「だつてクロウーディオさんは従姉を罵つて叱つて、耻を搔た悪人ぢや有りませんか。」

「僕は人間です、御きゝなさいビートリスさん！」

然しビートリスはクロウーディオの事について辯解をきかなかつた、尙ほも執念くクロウディオに復讐して呉れとベネディックに願ひ、

「窓の外に居た男つて云ふのは誰れだい名を云はして下さい、美しい優しいヒーローさんは悪者にされました、耻をかゝされました、あの方には其んな眞似は出來ません、クロウーディオのために、男であつたら、友であつたら、此のまゝには置きません、妾のために男の方は誰でせう、勇氣は情義のために沮喪するのですもの、願つても男になれない此の身を悲んで女として死にませう。」

「御待ちなさい此の手で僕は貴女を愛します。」

「其の御語ですが妾の愛を何か他の事で役に立てゝ下さい。」

「貴女は御心からクロウーデイオを惡人と御考へですか。」
「確かにさう思ひます。」
「宜しい僕は貴女を愛します、僕は彼れを殺します、貴女の御手に接吻をして御別れにしませう、此の手でクロウーデイオをやつつけます、僕の事を御きゝになる時に僕の事を思つて下さい、さあ彼方へ行らつしつて御從姉さんを慰めて上げて下さい。」
ビートリスの懇望に依つてベネデイックは大に動かされてヒーロー姫の〻親友クロウーデイオと戰はうと思つた、レオネートも悲みの餘り死んだ娘の仇だと計に、王子やクロウーデイオと決鬪をしようと思つて居た然し王子等はレオネートの年寄つて居るのや悲んで居るのを氣の毒に思つて、「いや御止しなさい僕等と爭ふなんてね御老人。」
其處でベネデイックが來て、クロウーデイオにヒーロー姫のために決鬪をしようと申し出た、王子とクロウーデイオは御互ひに「はゝあビートリスがやつて呉れと賴んだのだせ。」と話し合つて居たがクロウーデイオは決鬪を承知せねばならぬ破目になつて、大に困つて居る處へ、奉行の一人がかのボラチノを囚人として王子の前に引つぱつて來た、ボラチノはドン、ジョンから賴まれてやつた事を朋友の一人に語して居る處を、聞れたのであつた。
ボラチノは姫の服裝をして居たのは、マーガレットで窓から話して居たのは自分であつた事をクロウーデイオの問に對して白狀して仕舞つた、依つてクロウーデイオの心は姫の無實の罪であつた事を得心した、此れを聞いてドン、ジョンは兄の怒りに觸れてはと、事露顯に及んだからメッシナの市から逃げて仕舞つた、茲に於てクロウーデイオはヒーローを無實に責めたことを悔み、其ため死んだと聞いて大に悲しんだ、ヒーロー姫の面影がちらついて初めに愛した時の事が忍ばれ、王子は、「君の胸は張り裂けるばかりだらうな。」
「あゝ僕はボラチノの白狀して居るのをきいてる時は、毒を呑んだ思ひをしたよ。」
クロウーデイオは繰り返し老人に、自分の罪を謝し、己が許嫁の女に對して無暗な云ひがかりをした罪は、どんな事をされてもかまひませんからと、老人に云つた。
「ぢやあ明日其の罰としてヒーローの從妹と結婚して貰ひませう、其れはヒーローに大變よく似て居る女ですよ。」
「えゝもう御約束した限り、どんな知らぬ婦人とでも黑奴とでも結婚しませう。」

と然し其の夜は戀しくつて、レオネートがヒーローの墓だと敎へた墓所の前で、夜中涙を流して泣き通した。

翌日は王子がクロウーデイオを連れて敎會へ來ると、最う僧レオネートも姪も皆來て居て、第二回目の結婚を祝はんために集まつて居た。レオネートは花嫁をクロウデイオに紹介したが其の女は假面を冠つて居たから顏は見えない、クロウーデイオは假面の女に、

「此神聖な僧の前で僕に御手を下さい、貴女が僕と結婚なさるならば僕は貴女の夫です。」

「妾が生きて居た時は、貴郎の最愛の妻でした。」と此の女が假面を取つた、レオネートの姪ではなくて、眞の娘ヒーローであつた、死んだと思つた女が、生きて居たのだから、クロウーデイオは大に驚き喜んで、自分の眼を疑ふ位、同時に王子も等しく驚いて、

「此りやヒーローさんぢやないか、ヒーローさんは死んだんだつた!?」

「ヒーローは死にました、ですけれど其れはヒーローを非難する人が生きて居る中です、今は非難者もありませぬから。」

僧は結婚式後に此の不思議な事件の說明をする事を約して、結婚をせよと勸めた、其の時にベネデイックが出て來て、ビートリスと婚禮がしたいと云ひ出した。ビートリスの愛のためヒーロー姫のために己れは決鬪しようとした事も話し、又自分等は戲れの計略にかけられた事が判つたけれど其れが、今は却つて眞實の戀になつた事も話した、尙ほベネデイックは今は他に目的はない此の計略を喜んで承け、自分を戀する餘りに死んで仕舞ふと云ふ、ビートリスは可愛さうだ、どうしても結婚をするのだと申し添へ、ビートリスはベネデイックが今肺病ださうだから自分の役として、其れを助けて介抱したいと云つた。

此れで二人の狂氣の樣な性質は和解せられ、クロウーデイオとヒーローの結婚後に祝言の式を擧げて納つた。

扨てかの惡人のドン、ジョンは一旦國を逃げ出したものゝ、メッシナの宮殿の御芽出度い有樣を、自分の企圖は失敗に歸したにしろ、其の盛事を見んと立ち歸つた處を捕へられて、大に罰せられたのであつた。

眞夏の夜の夢

アゼンスの市に市民の娘は自分等の好きな男へは、嫁入りする事が出來ないと云ふ法律があつて、父が娘のために定めた婿を娘が嫌やだと云ふ事があれば、其の娘は法律に依つて死刑になると云ふ規則だつた、然し自分の娘を死刑に願ひたいと云ふ父親も無いから、我儘者の娘はあつたにしろ此う云ふ法律があるんだぞと兩親から折々、嚇される位な事はあつても、此の法律の事實上の執行は稀だつた。否や殆んどない位だつた。

然し茲に一例があつて、一人の老人名はエジウスと云つて、此の頃はアゼンス公の配下であつたセシュウスの許へ來て、己が娘のヘルミアにアゼンスの貴族の、デメトリウスと結婚せよと命じた處が、娘は他にアゼンスの青年リサンダーと云ふ者を戀して居たので、老人エジウスはセシュウスの法廷へ願ひ出で此法律で娘を御罰し下さる樣にと申し出た。

ヘルミアは己が不從順な事を謝つて其の理由は、貴族デメトリウスは己が親友のヘレナを愛して居り、ヘレナも非常にデメトリウスを愛して居るから、父の要求には從ひにくいと云つたが頑固な父は赦さなかつた、王子セシュウスは、慈悲深い人だつたが自國の法律を曲げる事は出來ない、其れ故にヘルミアに四日間の猶豫を與へて四日目の最後にもまだ此の結婚を拒むならば、死刑にすると云ひ渡した。ヘルミアは此の人の前を去つて、戀人リサンダーの許に行き己が身の危期に迫まつた事や、かくなる上は戀人を捨見てゝデメトリウスに嫁入るか、或は四日間に姿を隱さねばなるまいと話した、リサンダーは此れを聞いて大に困つたが、自分の叔母がアゼンスの市から少し離れてる處に住んで居る事を思ひ出し、其處へ女が往つて居れば此の法律はアゼンス以外には適用が出來ぬからいゝと思ひ、女に夜父の家を脱け出して一緒に叔母の家へ行つて夫婦となる事にしようと相談した。

「ぢあ妾しは街から五六哩はなれたあの森で貴郎に遇ふ事にしませうあの樂い五月にヘレナと一緒によく散歩しましたつけ彼處で。」とヘルミアは大に力を得て親友ヘレナ以外には此逃亡一件を誰にも話さずに居たのをヘレナはデメトリュウスに此事を話した友の秘密を云ふ事は好まなかつたけれど、其森へデメトリュウスがヘルミアを追ひかけて行く時自分

は戀人の此デメトリュウスに伴はれて行けると云ふつまらぬ樂さについ話て仕舞つた。

此の森の中には妖怪共の巣む處があつて、王をオベロンと云ひ女王をチンタニアと云ふて誠に小さい從者を連れて、眞夜中に此の森の中で大に遊樂して居た、此の小人の王と女王が此の頃は不和になつて居て、月影の映る夜には爭ひ合ひ、常には決して會はない事にして、從者の侏儒共が樫の殼の中へ恐れて逃げ込む位、喧嘩して居た。

此の不和の原因は、女王チンタニアは己が友達が死にかゝつて居る時に、其子を奪つて來て、其をオベロンが呉れろと云ふのを斷つたのであつた。

彼の戀人同志が二人森の中で遇ふとした夜に、チンタニア女王は侍女を引きつれて散歩をして居たが、王オベロンが侏儒の侍從を從へて來るのに出遇つた。

遇ふや否や、「强慢なチンタニアよ」と小人の王は云つた。「嫉妬やきのオベロン樣何ですつて、侏儒共が其處に飛で居るな妾は一緒になる事は最う斷つてあるのに。」

「おい待つて呉れ、乃公は御前の夫ではないか、何故にチンタニアは夫のオベロンに背くのか、乃公の給仕にしたいからあの子供を呉れ！」

「心を落ち付けて考へて御覽なさい、貴郎の侏儒國は何も妾から子供を取らなくつてもいいぢやありませんか。」と大に怒つて去つた。

「宜し行くなら行け、夜明け前に貴樣を攻めてやるから。」

オベロン王は寵臣のパックを呼びにやつた、ロビン、グッドフェーローとも呼ばれた此の者は利巧で狡猾な妖怪で、近傍の村々で惡戲事をして居る奴で、牛乳場へ入り込んで牛乳を盜んだり、牛酪を作る器の上で判らぬ樣に踊つて居る、牛酪作りの女は牛酪に變へる事が出來ずにはかどらない事があり、田舍の若者共は仕事が出來なかつたり、酒店で惡戲をすると麥酒がちつとも出來なかつたりする事があつた、五六人の村の人が愉快に酒を飲まうと集まつて居ると、燒いた蟹の姿でビールの鉢の中へ飛び込んで、老人が此れを呑まうとすると唇を刺したり、皺の寄つた老人の頭へビールをこぼしたりさせた、又此の老人が非常に悲げに人々に話して居ると、三脚の椅子に其人が腰かけて居るのを、そつと滑らせて尻餅ちつかせると、人々は思はず腹を抱へて笑つて後でどうも濟みません等と謝つて居る樣な事もあつた。オベロン王は不愉快であつた所にパックが來たので、

「おい最つと此方へ御出でよバックや、乃公に「怠けを好む」と女共が呼んでる、あの花を取つて來て呉れんか、あの紫色の小さい花の汁液を、寢込んでる奴の眼の中へ注ぎ入れて置くと、起きてから其奴等が目についたものを非常に好むつてね――其の汁液をチンタニアが眠つて居る眼瞼の中へ注ぎ入れてやるんだ、彼女が目を覺ますと第一に見る物は、獅子であらうか熊であらうか、猿でも何でも愛する樣になる、さうして置いて最一つの魔術を彼女に行つてやるんだ、さうすればあの子供を乃公の給仕に寄こす樣になるんだ。」

不思議な事をやる事の好きなパックは、主人の此の戯れ事をきいて面白がり花を探しに走つて行つた、オベロンは彼の歸つて來るのを待つて居る時に、森の中に入て來るデメトリュウスとヘレナの姿を見た、デメトリウスが伴つて來るヘレナに對して何か叱つた居る樣子で、ヘレナは其の語をきゝながらデメトリュウスに昔の戀を思ひ出して貰ひたいと賴んで居た、けれど、デメトリュウスは情愛けなく跳ね付けて逃げ出したから、ヘレナも出來る丈後から追ひかけた。

侏儒王オベロンは眞の愛と云ふ事を大に好んで居たから、ヘレナのため同情して、ヘレナがデメトリュウスのために愛せられて居る幸福な場合を見度く思ひ、折り柄パックが小さい紫の花を取つて戻つた來たから、王は、

「おい其の花はまだ他に役に立たせるんだ、今ね其處に輕薄者の青年に戀して居るアゼンスの女が居るから、御前は青年の眠つて入る時に、戀の汁を目の中へ注ぎ入れてやれ、尤も女の傍に居る時でなくつちや駄目だよ、すると若者が目を覺まして第一に見る者は其の女なんだ。」

パックは旨くやりませうと返事をして、オベロンと別れた、チンタニヤ女王は眠ろうと園亭の方へ行つたけれどオベロンの姿は見認めなかつた、女王が寢る其の亭は、麝香草の生へ茂つて居る堤で、忍冬の葉の生ひ茂つて居る下にくりんざくらや、香りのいゝ菫や薔薇が咲き亂れて居る處で、臥床の蔽ひは蛇の光滑な皮で、小さい蔽ひだけれど此の一寸法師の女王は其れで充分だつたのである。

オベロンは女王が侍女共に己が寢て居る中は斯樣にして居れと命令して居たのを見た。

「御前達の中誰かは薔薇の蕾に居る尺蠖虫を殺して御呉れ、それから最一人の者は蝙蝠を

捕へて妾の小さい外衣を造へて御呉れ、後の者達は喧しい梟が妾の傍へ來ない樣に見張りをするんです、最初は一同が妾が眠れる樣に歌を謠つて御呉れ。

一つ針持つ斑蛇
針鼠よ來るなかれ
ゐもりよ昆蟲よよくぞあれ
小さき女王に近かよるな
聲美しき鶯よ
子守歌をいざ歌へ
眠れよ、眠れ、子守歌、眠れよ、眠れ子守歌
害も呪ひも迷はしも
吾が女王近く寄りなすな
子守の歌に此の美しさ
夜をこそ女王は休みませ

女王が美しき子守歌に寢て仕舞つた時に、女王から命ぜられた仕事をするために皆は傍を離れた、オベロン王はそつと傍近く進みよつて、チンタニア女王の目の中へ例の汁液を注ぎ入れて、

汝の目覺めて見た者に
眞に愛こそ注げかし

と云ひながら此の動作をやつた。

一方ではデメトリュウスと結婚する事が厭やで、死刑を避けるために父親の家をにげ出した、ヘルミアは森の中へ來た時に戀しいリサンダーが待つて居て、早くも叔母の家へ行かうと連れだつて森の半頃まで行くと、ヘルミアは大變に勞れ、リサンダーは自分のためには生命まで投げ出して呉れるヘルミアのためだから、大に介抱して居たが夜明けまで此處の軟い苔の上に寢て勞れを休める事にして、リサンダーはヘルミアから少し離れて横になり二人は熟睡して仕舞つた。

茲へ來た例の惡戲者のパックは此れを見て、一人はアゼンス風の青年今一人の女は矢張

りアゼンスの着物を着て居るから、此れがてつきり先刻王から云ひつかつた、アゼンスの女と輕薄者の青年だなと思つて、幸ひ二人が一緒に寢て居るから此の青年が目を覺ませば第一に見える者は此の女で、丁度よしと、そつとバックは青年の目の中へ花の汁液を注ぎ入れた、すると折りも折り此處へ、ヘレナがやつて來て其の殺那にリサンダーの目が覺めて、無性にヘレナが戀しくなつて、ヘルミアに對する迷ひは亡くなつて遂に此のヘレナと戀に落ちて仕舞つた。

若しリサンダーが目を覺ました最初に、ヘルミアを見たのならば始めから自分には忠實な女の事其れ以上に愛する事も出來ないから、バックの仕事は無効だつたのだが、誤ちの巧名で、ヘレナが通りがゝつたばかりにリサンダーは最うヘルミアを忘れて、ヘレナの後を戀しいと計りに追かけて行つて、後に殘されたヘルミアは眞夜中に此の森の中で熟睡をつづけて居た。

此んな事が起つたのは、前にかいた通りにヘレナが自己を荒々しく振り捨てゝ、逃げ出したデメリウスの後を追ひかけて居たが女の足弱い悲さには、男の走つて行くのに追ひつく事が出來ず、遂にデメトリュウスを見失ひ失望して森の中をさまよつて居ると、リサンダーが眠つて居た場所へ偶然に歩いて來たのであつた、女は此れを見て、

「おゝ茲に横になつてるのはリサンダーさん、寢て居なさるのか死んでるのか知ら？」

そつと搖り起しながら、

「もし貴郎生きて御出でになるなら、起きて頂戴。」

リサンダーが目を開くと最う先刻の藥が廻はつて居て、ヘレナを見るなり非常に懷かしい戀しさうな言葉で話しかけた、ヘレナはデメトリウスがヘルミアと非常手段に出る位な戀し合つてる仲だつたのを知つて居るから、此んな話しをしかけられて大に驚いたが、戯談を云つて居るのだと思つて、

「あゝ何故妾は、人さんから笑はれたり嘲られたりする樣に生れて來たんでせう、デメトリウスさんが妾にちつとも、親切な言葉をかけて下さらないと思へば、貴郎は又そんな風に妾を御からかひになるんですもの、妾は貴郎を今日まで實際眞面目な方だとばかし思つて居ましたわ。」

と云つた切り大に怒つて其處から逃げ出し、リサンダーは最うヘルミアが隣に寢て居るのを打ち忘れて其の後を追ひかけたのであつた。

ヘルミアが目を覺ましたけれど、自分獨り切りだと知つて悲くなり、リサンダーさんはどうしたのかと、森の中を探し廻つて居る中に、此方のデメリウスはヘルミアや戀敵のリサンダーを尋ね飽ぐんで寢て居る所をオベロン王に見付かつた、オベロンはバックに輕薄者の青年の目に汁をつぎ込めと命じて置いたが、今此の青年の寢込んで居るのを見て、其目の中へ汁液を注ぎ込んだ、目を覺まして見るとヘレナの姿を見てリサンダーと同じ樣に愛の言葉を以て、今度はヘレナに話し始め、其の時ヘルミアがリサンダーの姿を見付けて馳け寄つて來た、然しデメトリュウスとリサンダーの二人はあの烈しい藥のため惑はされて一時にヘレナに對して、口說き始めた。

驚いたのはヘレナで此れは、デメリウスもリサンダーも、友達のヘルミアまでが自分に戲談をするのだと思つた、同時にヘルミアも驚いた、何故にリサンダーとデメトリュウスが同時にヘレナを戀する樣になつたのか其れが判らず、ヘルミアは此れが戲談處ではなかつたので、今までの親しい女友達は今は爭ひ出した。

「不親切者のヘルミア樣、よくも貴女はリサンダーさんに妾を嘲笑ふつもりで御世事を云ふ樣に云ひつけて呉れましたね、貴女に焦がれ切つて居るデメトリウスさんは妾を、足で蹴つた人です、其の人に云つけて妾を、女神だの美女だの極樂に住んで居る乙女だのゝと云はせて下さいましたね、妾を憎んで居るデメトリュウスさんが貴女の指金でなくてどうして此んな事が妾に云はれます、貴女の友達を男から戲談せて置いて喜ぶなんて貴女は實に不親切者です、若し學校時代の親しい交際は御忘れになつて？　何度も〳〵二人は一つ席に腰かけて一つ歌を謠ひ合つたり、同じ花を縫つて見たり、同じ御手本で習つた仲でしたらうか、二つの櫻實の樣に生育つた二人は喧嘩する事はないぢや有りませんか、實に不實な女です、悲しんでる友達を男に笑はせるのですもの處女らしくも無い方ですね。」

「あゝ驚いた、妾は貴女にそんなに怒られる必要はないわ、妾は貴女を笑やしなくつてよ貴女こそ妾を嬲つてる癖に。」

「妾が嬲るつて!?　へん貴女はそんな六つかしい顏して居て、妾が彼方向くと直ぐ笑ふん

でせう、而して御互ひ同志に目くばせして又戯談をする樣に、させるんですもの、貴女に若しか可愛いさうだとかいふような、優しい御心があつたら其んな事は出來ますまい。

此の二人の女の言ひ張つて居る時に、デメトリュウスとリサンダーは二人を殘して、森林の中へ入つて行きヘレナを奪ひ合はんために決闘をし始めた、二人の男が居ないと云ふ事が二人の女に氣が付いて、又もや戀人を探しに勞れ果てゝ森の中をさまよい歩いた。

一同が行つて仕舞ふとかの侏儒の王とパックとが此の喧嘩を聞いて居て、

「パック！　貴樣がやり損ふたのだ、うつかり思つてやつたのだに相違ない、自分勝手に其れ共やつたのかい。」

「へい實際やり損ひでした、陛下は私がアゼンスの服裝をした男を知つてると御思召しは御座いませんでしたらう、然し此れで彼奴があんなに喧嘩し出したんですから、却つて惡戯が面白うなつて來ました。」

「デメトリュウスとリサンダーは決闘する場所を探しに行つた事は、貴樣も聞いたらう、今夜は深い霧を降らせる樣に貴樣に命ずる、而してあの喧嘩の連中が暗に迷つて、御互ひが分らなくなつて仕舞ふ樣にするんだ、貴樣は名々の聲色を使つて甘く詐し、皆が貴樣に伴ひて來る樣に罵つてやれ、皆は實際相手が罵つて居る樣に思つて伴いて來るよ、而して最う歩けない位に奴等を草臥させて置いて眠らせて仕舞へ眠つた所を見濟まして此最一つの花の汁をリサンダーの目の中へ入れてやると、リサンダーはヘレナを新しく戀した事を忘れて元通りにヘルミアを慕ひ出す左うすれば二人の女も丁度旨く男が各々を愛する樣になつて幸福となる皆は今までの事は苦しい夢を見て居たと思ふだらう早くやるんだぞパック!!乃公は此れからチンタニアが藥が廻つて乃公を愛する樣になるのを見屆けに行く。」

チンタニアの所に來て見るとまだ眠つて居た、オベロンは道に迷つた田舍漢が同じく寢込んで居るのを見て、

「此奴が乃公のチンタニアの戀人にしてやらう。」と云つて驢馬の頭を其の田舍漢の身體の上にのせたら、驢馬は丁度此の男の肩の上に成長して居る樣に見えて、田舍漢は起き上つて、オベロンに此んな事されたとは氣が付かずに、一寸法師の寢て居る園亭の方へふらふらと歩いて行つた。

「おゝ妾の目には何んていゝ天使だらう、御前は美しいと同じく賢いの？」
とチンタニア女王は小さい紫の花の利目が表はれてきいて見た、馬鹿な田舎漢は、
「奥さん!!　私に森の外へ出られる樣に道を敎へて下すつたら、其の代りに何んでも貴女の御用を致します。」
「森の外へなんか行きたくないわ、妾は御前が好きになつた、一緒に彼方へ行きませう御前の召使ひとして一寸法師を澤山上げよう。」
と四人の侏儒、ピースブロサム、コムエップ、モッス、ムスタードシードの四人を呼び寄せ、
「御前達は此の美しい方に使へなさい、此の方の御歩きになつたり御寵になる時に、踊つて見せて御上げ、而して、葡萄や杏や蜜蜂から蜜を取つて來て食べさせて上げなさい、さあ一緒に行きませう、而して御前の可愛らしい毛の多い頰をいぢらせて下さい美しい驢馬さん、御前の美しい大きい耳に接吻をさせて下さい、其れが樂しみだわ。」
「やいピースブロッサムは何處に居るのだ。」と田舎漢は女王が優しい事を云つて呉れるのにも係はらずに只だ新しく、臣下が出來たのを喜んで居た、小さいピースブロッサムは、
「閣下此れに居ります。」
「乃公の頭を掻いて呉れ、コブウエップは何處だ。」
「はい此處に居りますので。」
「其處の蘇に居る赤い蜂を殺せ、而して蜜を乃公に持つて來い、餘り劇しく働いて蜜の袋を破るな、それからムスタードシード!!」
「はい、何事で御座います。」
「何んでもないが、乃公の頭を掻く事をシース、ブルッサムに手傳つてやつて呉れ、何だか顏に澤山毛が生えた樣だ、散髮屋へ行かなきやならぬ。」
「あの貴郎は何を召し上ります、栗鼠が持つて居る物を取つて來る位大膽な一寸法師が居ます、胡桃を取つて來て上げませう。」
馬鹿な田舎漢は驢馬の頭を冠つてから、驢馬らしい食物を欲しがつて、「いや乃公は乾した豌豆が欲しい、然し貴女の召し使ひを働かせるのも氣の毒だ、眠らうよ其方がいゝ。」
「そんなら寢ませう、妾は御前を抱いて……おゝ可愛いこと、どんなに御前が可愛いか知

れやしない。」田舍漢が女王の腕に抱かれて寢て仕舞つた時に、オベロン王は此の傍へ近づいて來たが、女王は驢馬の頭を花で飾つてやつて居た、やがて此れを見戍つて居たオベロンは再び子供を呉れと賴んだ、女王は自分の夫に新しい戀人と一緒に居る處を見られて耻ぢ入つた、今度は其れを拒む事が出來ずに子供を渡して仕舞つたので、オベロンは又他の花の汁を目の中に入れてやると正氣に歸つた女王ケンタニアは、どうしてこんな、いやな怪物を可愛いがつたのかと驚いた。

オベロンとケンタニアは今は仲が快つて、王は此夜の戀人共の喧嘩の話しをして、其の結果はどうなつたかを見に連れだつて出かけた、一寸法師の此の二人は直きに近くの芝生の地に戀人同志が寐込んで居るのを見出し、バックが最前の失敗を取り戻さうと戀人共を知れない樣に同じ場所に集めて置いて、王に貰つた消毒劑をリサンダーの目に注ぎ入れた。

ヘルミアは目を覺ました處が、見失つたと思つたリサンダーが傍で寢て居るから、眺めながら不思議だと思つてると、リサンダーは目を覺ますと戀しいヘルミアの姿が見えて、自分は毒が廻らなかつた以前の氣分になつて、ヘルミアを愛して居る事を話し此の夜の事件について語り合つた、此れが眞の事だらうか又は夜に同じ樣な夢を二人して見て居たのだらうか等と話し合つて居た、ヘレナとデメトリュウスも此の時に目が覺めて、心地よい熟睡はヘレナの怒つた心を和らげて、デメトリュウスはヘルミアを戀する事は止めて、女の父が云ひ張つた殘忍な宣告を取り消す樣にしようとして、アゼンスへ歸る道にヘルミアの父の、エジウスが逃げ出した娘を捕へに森に來たのに出遇つた、エジウスはデメトリュウスが己れの娘と結婚をする意志がなくなつたと云ふ事をきいて、四日目に自分の娘ヘルミアの禁を解き、同時にヘレナも前に戀した男デメトリュウスと祝言をする事になつた。

一寸法師の王と王妃とは此の戀人共の和解を見えない樣にして見て居たが、今や兩方の話は圓滿に解決が出來る樣になつたのを見て、大に喜び小人國中は臣下の侏儒共も此の結婚を祝はうと決した。

誰れかゞ此の侏儒と戯れの事件を語るものがあると、聞く人々は其れは皆が睡眠中に夢か幻でも見たのだらうと考へるが、吾が讀者諸君は、此の可愛らしい罪のない「眞夏の夜の夢」の話しをきいて、荒唐だなどと一概に云はない樣に願ひたい。

手段のための手段

ビーンナの市に優しい溫和しい公爵が支配して居た時、此の市の特別の法律として、人が若し自分の妻でない婦人と同棲してる場合には其者を死刑に處すと云ふ法律があつた、此の公爵は其の法律を適用した事がなく、市民をそんな事があつたとて大目に見て居たから、ビーンナの若い女の親たちは、此の法律が行はれないために娘の不行跡が多く、其のために公爵に對して不平は絶えなかつた。

公爵も風紀の亂れる事を見て、大に悲んだが此の法律を急に苛酷な元通りに、變更すると云ふことは暴君の仕業と感じ、自分は暫らく國を留守にして置いて、代理の人に一切の權利を任せて、此の不行儀な人々を自分としてゝなく、罰するやうに法律を勵行しようとした。

ビーンナの聖徒で、アンゼロと云ふ人は嚴格な、家庭に育つた人で、此の法律を勵行するに、適當な人として選ばれた、公爵は顧問の貴族エスカルスに、此の計畫を話た時に、此の人は、

「若し此の事を遂行するに名譽も資格もある人は、アンゼロ公です。」

と答へたので、今や公爵はポーランドに向け、旅行をすると云ふ名目の下に、ビーンナの市を去つた、後のことはアンゼロに任すと布れ出したが、此の旅行とは眞赤な嘘で、公爵は內密に國へ歸つて、僧侶の裝をして、此の聖徒アンゼロの施政をそつと見て居る積りだつた。

今やアンゼロが執政の時となつたが、此處に此の市の一紳士のクロウーディオと云ふ者が、若い女に親の家を逃げて來いと命じた事が、顯はれて此の紳士は新しい執政官のために捕へられたが、アンゼロは寛大であつた舊法律を引き出してクロウーディオを斬首する事に宣告した、此の若者は赦しを乞ふて止まないから、人のいゝエスカレスは此の人のために、願つて、

「あゝ此の人が助けたいと思ひます、此の人は立派な御父さんが有りますから、此の人の

犯罪を御赦しを。」

「法律は餌食に集まる鳥を嚇す案山子ぢや有りません、鳥は案山子が害がないと見ると直きに來て止ります而して恐れません、あの者はどうしても死刑にする。」

ワロウーデイオの友のルシオは、囚人の彼れを訪問した時、クロウーデイオはルシオに向つて、

「ルシオ君僕のために一つ骨折つて呉れないか、僕の妹のイサベラはセント、クレア寺に入ると云つて居たが、かれに僕の危險に迫まつて居る事を話して、かれに此の嚴格な代理官に親しくなる樣に云つて呉れ給へ、而して自身でアンゼロ樣の處へ行けつて命じて呉れ給へ、僕は其の事に大に望をかけて居る、と云ふのは彼女は辯舌も旨く、又無言に若い者の悲しみを表はして、男の心を感動さするから。」

クロウーデイオの妹は彼れの云つた樣に、此の日御寺へ新入することとなつて、其のため尼僧に關しての試問をされて居たが、人々がルシオが、この寺へ入つて來る聲をきいた時に、

「今の人聲はどなたですか、一寸待つて下さい。」と尼僧は答へて、

「あれは男の聲ですが、あなたは早く行つて其の用を聞いて居らつしやい、あなたが尼に御成りになつて、被衣を御着けになつたが最後、最う方丈樣の前でなくちや、男と話しは出來ませぬ身です、假令話しが出來ても、被衣を冠つてするので顏を出しては話せませぬ。」

「最う此の上の特權は御座いますまいか。」

「此れで充分ぢや有りませんか」

「妾は話したくは有りません、セーントクレア寺の尼には、最つと制束があつて欲しいと思ひますわ。」

又もやルシオの聲がするものだから、

「男の方がまだ呼んで居ますから、一寸會つて御上げなさい。」

イサベラはルシオの傍へ行つて、彼れの挨拶に答へて、

「靜かに！　誰方なの？」

「僕はイサベラさんに遇ひたい、あの不幸な兄さんを持つてるイサベラさんに。」

「どうして兄が不幸ですか、妾はイサベラです、あれの妹です。」
「貴女がさうですか、兄さんは僕を貴女に使はしました、兄さんは囚人です。」
「どうしてゝす、大變な事ですす妾に取つては。」
ルシオはクロウーデイオが若い女を家から、そゝのかせた罪で囚人になつた事を話した。
「ぢあ妾は從姉のジュリエットさんも心配です。」
從姉ではないが、昔し學校時代に仲がよくつて從姉妹だと云ひ合つて居たが、其れがクロウーデイオと戀し合つて居たのを知つて居たから、兄の刑罰は此の人のために起つたと知つた。
「ジュリエットさんだつてさうですから、兄さんと結婚なさればいゝのに。」
ルシオは勿論クロウーデイオは其れを好んで居るけれど、あの嚴しい代理の人が罪を宣告したのだと云つた。
「ですから、アンゼロさんの心を和らげるには、貴女が旨く御願ひなさるといゝのです、僕の役目は貴女と氣の毒な兄さんとの間を種々と取り計らうのです。」
「あゝ妾にはあのアンゼロ樣を動かす樣な、力は到底出來ませんもの。」
「ですから少し詐つてやつて見るですな、其う云ふ事をやる事を心配して居るために、僕等は時々得られる善い事も亡くする場合がありました、まづアンゼロ公の處へ行つて處女が泣いたり跪づけば男は神樣の樣になつて仕舞ひます。」
「妾は出來る丈やつて見ませう、一寸尼さんに此の事を話して置いて、後でアンゼロ樣の處に參りますから……兄さんにさう云つて下さい、夜になれば吉報を御報らせしますからつて。」
イサベラはアンゼロの居る處へ行つて彼れの膝下に身を投げて、
「妾は哀れな訟訴人で御座います、どうか妾の願ひを御聞き下さらばどれ丈妾は喜ばしい事やら判りませぬ。」
「願の趣は何んだ。」
イサベラは兄の事を涙を流し、感動させる樣な調子で哀れみを乞ふた。
「女の方、其の點は最う駄目だ、御前の兄は最う死刑を宣告して仕舞つたから、死なゝき

やならぬ身だ。」

「おゝ正しいけれど……酷い法律です事、妾には只つた一人の兄ですもの……天は貴郎樣に名譽を與へて居ます。」

と云つてイサベラは此の場所を去らうとした、一緒に來たルシオは、

「まだ早い歸つて來ちやいけない、最一邊行つてあの人の外衣に取り縋つて賴んで見給へ貴女はまだ冷淡だつた、最つと旨く賴まなくつちやいけない。」

イサベラは又もやアンゼロ公の膝に泣き伏して、慈悲心に訴へたけれど、頑として、

「宣告した後だから、最う晩い。」

「最う晩いと仰しやいますが、何故で御座いませう。」

「最う彼方へ行つて御呉れ、五月蠅いから。」イサベラは尙ほも、

「妾の兄が貴郎樣の地位に立つて居まして、貴郎樣が兄の場合に御在でゞ、貴郎樣が兄の樣に捕へられましたとすると、兄は決して此んなに嚴しくはしませんでせう、而して妾が貴郎樣の權利を持つて居り、貴郎樣が此のイサベラであつたとしても、妾は天に誓そんなに無情な事は致しませぬ。」

「いや、御前の兄を拘束したのは私ではない、法律だ、あの男が私の親戚であらうとも又兄弟でも、息子であつても法律の命令通りにしなきやならぬ、明日はあの男を死刑にしてやる。」

「明日？　ですつて、どうか最少し延ばして下さいまし、御延ばしを、兄はまだ死ぬ覺悟はして居ませぬから、妾共が臺所で時々會ふ樣に雞を殺す時でさへ、憐んでやるぢや有りませんか、よき公爵樣、まだ誰にも兄の樣な罪を犯したものは澤山有りますが、殺された人は御座いませぬ、此の宣告を御下しなすつたは兄が始めてゞ、其れで心配して居るのも兄が始めてゞ御座います、貴郎樣の胸に手をあてゝ御叩きになつて、胸に聞いて下さい、愈々兄の罪があると御胸が答へましたら、最う兄の助命は願ひませぬ。」

此の最後の語が前に述べた言葉よりも一層に、アンゼロを動かして加ふるにイサベラの美しさがアンゼロ公の胸に深く刻まれ、クロウーディオがした樣な戀に陷入つて、胸中に一種の矛盾が出來、イサベラの方から今や去らんとした。

「優しい公爵樣御歸り遊ばせ、妾は貴樣に賄賂を出しますから。」

「賄賂を出すとは、どう云ふ事か。」と此の事に驚きながら答へた。

「天が貴郎樣分けます此の贈物は、金や寶や、光つてる寶石類では御座いませぬ、夜明け前に天に祈ります、眞の祈禱……世の中の何物にも捧げない固き處女の祈禱で御座います。」

「宜しい明日私の所へ來るがいゝ。」

かくして兄の命を僅かに延期して、最一度願つて見よう、頑固なアンゼロの性質に對し種々の考へをしつゝ喜んで退出した、其の時にイサベラは、

「天は貴郎樣の名譽を安全に守ります。」と云つた。

此れをきいてアンゼロは心の中で、「アーメン私は御前の德から、又御前から救はれるんだ。」と云つた、が自分は戀と云ふやましい心に捕はれて居た事に驚いて「此れや何んだ、どうしたのだ、私はあの女に戀したのかな、あの女の願ひを又きいてやらうと思つたり、あの眼を喜んで見たり、私は夢を見て居るのか知らん、聖徒の敵が聖徒を釣り寄せんがために餌を寄こしたんぢやないかな、私が胸を刺す樣な女は決して淫らな女ではない、然しあの德のある女は私を全く引きつけたわい。」と獨り語を云つて居た。

罪多い戀の心に捕へられてアンゼロは己が宣告してやつた、死刑の囚人よりも多く心を傷めた、獄中に於てクロウーデイオは先きの良い公爵、今は僧服を身につけて、極樂へ行く道を話す若者の姿に變へて、平和、後悔の話しをしようと此のクロウーデイオを訪ねて來た。

アンゼロは今や罪深い事を考へ、イサベラを、そゝのかしたいとは思つて居るが、自分の意志に依つて其の罪する事を恐ろしく迷つて居た、然し最後の考へとして、賄賂をと云はれて驚いた此のアンゼロは、あの女が拒まない樣などんな高い賄賂を出しても、手に入れたい、兄の命を助ける位の事はしてやらうと思つて居た。

翌朝イサベラが來た時に、獨りで自分の前に來る樣に命じて、

「若し御前が私の不名譽な願ひをきいて呉れるならば、御前の兄の命は救してやる、と云ふのは私は御前に戀したからだ。」

「兄さんは、ジュリエットさんを愛して居ましたが、貴郎樣は妾に昨日死刑にしてやると

御話し遊ばしたでせう。」

「然しジュリエットが夜にクロウーデイオをそつと訪ねて來た樣に、御前も私を夜に訪ねて來て呉れるなら御前の兄の罪は赦してやらう。」

イサベラは兄のみならず己れまでも同じ罪に、誘惑するのかと驚いたが、

「其れが妾のためになり兄のためになる事ならば致します、而して死刑の宣告を受けて鋭い鞭を受けるのは紅石をつけてる樣に妾には思はれませう、而して耻を曝らさないで病床にある樣に死んで行きます。」

「いやそんな事はない、私の名譽にかけてもそんな事はしないから、信じて呉れ。」

イサベラは此んな不名譽な事がしたいのを、名譽にかけてもなんて云ふ言をきいて大に怒つて、

「信じたつて何が名譽なんです、いやらしい話!! 妾は貴郎樣に御頼み申しませう、宜しうございますか、妾の兄を赦すと御かき下さい、然うでなくば妾は此の事を世間に、大聲で吹聽しますから。」

「御前の云ふことを誰が信ずる奴がある、吾が汚れなき名、嚴格だと云ふ私が評判は、そんな御前如き者のために、落ちて堪るものかい、さあ私の意に從つて、兄の命を買ひ戻すか其れとも兄を殺してやらうか、御前の返答次第だ、明日まで待つてやるから返答をして呉れ。」

「誰れに此の事を云つたら信用して呉れるのか知らん。」とイサベラは兄の禁錮されて居る牢屋の方へ行く時に、云ひながら歩いて行つた、兄は僧の風采をして居る公爵と神樣の事について話しをして居たが、其處へジュリエットは涙を以て己が惡い事を告白し、クロウーデイオさんよりも罪が多いと泣いた、

イサベラは此處へ入つて來た時に、假裝した公爵は、

「皆一寸靜かに、其處へ來たのは誰方？」

「クロオーデイオ兄さんの事については、妾が一言か二言答へればいゝんです。」

其の時公爵は此處をはなれて、獄守に二人の會話がきける樣な處へ連れて來さした。

「何んだ妹？　何が嬉しんだい。」

イサベラは明日死ぬと云ふ事を話した。

「何か其の事が死なゝくつてもいゝ法はないのか。」

「死なゝくつてもいゝ法と云へば、兄さんは名譽を取られて裸體で放り出されるんです。」

「要領を旨くきかせて御呉れ、乃公にはちつとも分らない。」

「妾は考へてもぞつとします、兄さんは名譽は取られても、五つや六つの年を長く生き延びたいと御考へですか、兄さん死にませんか、死の考へは恐ろしいと云ふにあります。」

「なぜ御前は僕にそんな事を云つて耻をかゝせるのだ？　御前は生優しい事から決斷が出來ると思つて居るかい乃公が死なゝきやならぬと云ふ事は賄賂の樣なものが必要なのか。」

「さうですクロウーディオ兄さん、あの頑固な代理の公爵の云ふ通りに妾がなれば、貴郎の命が助かるんですの、妾の命が妾丈のものなら、兄さんを救ふ爲に投げ出すのは何んでもない事です。」

「難有うよ、イサベラ。」

「明日は死ぬ御用意をなさいませ。」

「死と云ふ事は恐ろしい事だな。」

「耻ぢて生きてる事は嫌やな事ですわ。」

然し死の恐れがクロウーディオの心に起つて來て、自分の罪を知りながら、

「妹？　僕は生きて居たい、御前が僕の命を助けるための罪と云ふのは、其れが代つて德になるんだ、さうして呉れんか。」

「不實な卑怯な方だ事!!　不正直な惡者ですよ兄さんは、貴郎は妹を耻をかゝせてまだしても自分の命が惜しいんですか。」

「いや聞いて呉れイサベラ。」

とクロウディオは、尙ほも己が妹を耻かゝせてまで生きて居たいと云ふ事を、弱身を種々と辯解したけれど、其の時に公爵が入つて來て云つた。

「今君と妹さんとの間の會話を聞いて居たが、アンゼロは決して妹さんを耻かしめる樣な男ではない、妹さんの德を試さんと計略にかけたのみで、妹さんは名譽を重んじて彼に拒絶した上は、アンゼロは君を赦さないだらう、君は死ぬを覺悟して、祈禱して居給へ。」

「どうしたらば妹は赦されるのでせう、僕は生きて居れば愛はなくとも宜しい。」

クロウーディオは最う今は悲しさと後悔で罵倒されて仕舞つた、公爵は今やイサベラと二人切りになつた所で、徳性からして決斷する樣に命じて、

「貴女を尼さんになした手は、貴女をよい樣にします。」

「あのいゝ公爵樣はアンゼロ樣を非常に買被つて御出でゝ御座います、若し公爵樣が御歸國にならば、妾はさう申してあの方に政治を取つて貰ひます。」

「其れは出來ぬ事もあるまい、アンゼロが貴女を責める事が出來ない事が茲に一つありますす、よく私の云ふ事を御きゝなさい、貴女は正しい方だと私は信じて居ます、兄さんの命を貴女が受戻すと云ふ事は決して、立派な貴女の人格を汚さない事です、今留守にして居られる公爵殿が歸つて此の事を御きゝにならば、必つと御喜びでせう。」

「妾は貴郎の御願ひになるなら何んでも致す心で御座います、惡い事で御座いませねば。」

「德を行ふには大膽になさい、心配してはなりませぬ、貴女は、かの海に沈んだ立派な軍人のフレデリックの妹のマリアナの話しを知つて居ますか。」

「あの人の話しは聞きました、あの人の話をきくと非常に賞めて居ました。」

「あれはアンゼロの妻ですよ、あの結婚は兄が死んだ船の甲板でした、あの哀れな婦人は此の事を深く思つて居ます、氣高い有名な兄の死んだ其の時、アンゼロは彼の女に對して非常に親切に愛して居ましたが、運が惡くなると夫の愛は減じて、良ささうに見えて居たアンゼロは、妻に不義のある樣に云ひ出した、泣き悲しんで居る妻を見捨てゝ仕舞ひました、アンゼロの不實な事は、今まで愛して居たのは水の流の如くに過ぎ去つて、マリアナは其れでも元通りの愛情を以て、殘酷な夫を愛して居るんです。」と公爵は自分の計略を話して行つた。

イサベラはアンゼロの許に、彼れの願ひ通りに夜中に行つて赦しを乞はねばならない樣になつた、マリアナはイサベラの代りに指定通りに暗夜にまぎれて、イサベラの樣な振りしてアンゼロに近づくと云ふ事になつた。

「ねえ心配しなくつてもいゝです、アンゼロはマリアナの夫ですもの、此の事はちつとも罪な行ひでは有りません。」

イサベラは此の計略を大に喜んで、其の通りにする事とし、此の事をマリアナに知らせに行つた、公爵はイサベラが自身の唇から悲しい話しをして、宗教的生活に入つた事や、公爵を神聖な人として指圖に従ふ事を聞いた、イサベラはアンゼロに面會の後公爵の命令通りにマリアナの家へ行つて會つた、公爵も來合せて居た。

「丁度いゝ時に會へた、何かアンゼロから話しでもあつたか。」

「アンゼロ樣の御住居は、練瓦の壁で花園が圍んであつて、西の方が葡萄畑になつて居まして其處に門口が御座います」と二つの鍵をアンゼロから貰つたと話して、出して見せた後で、

「此の大きい鍵は葡萄畑の門を開けるので、此の小さい鍵は葡萄畑から花園に行く小さい戸を開けるのです、妾はあの方を夜の靜まつた時に呼ぶ樣に約束して來ました、而して妾の兄さんの生命を助けて呉れる事も定めて來ました、其れは場所をきゝましたら二度ばかり熱心に道を敎へて呉れました。」

「其れでマリアナさんが見ねばならぬが貴女と打ち合はせする記しは無いのか。」

「其れは何も有りません、妾はあの人に時間を云つて置き、妾をいつも兄の所へ參る時に從いて來る侍女の樣にあの人に考へさせる樣にして、一緒に參ります。」

公爵はイサベラが考へ深い仕打を賞め、イサベラはマリアナに向つて、

「貴女があの人と御別れになる時、此れは小さい低い聲で、兄さんの事を宜しく賴みますと云つて下さいよ。」

マリアナはイサベラの云ふ通り今晩一つやつて見ようと思つた、此の仕事はイサベラの兄さんの命も亦イサベラの名譽も救ける事が出來ると思つて喜んで居た。

然しクロウーデイオの命が安全だと云ふ事は、公爵には保證が出來なかつたから、心配して其夜獄屋へ取つて歸して來た、クロウーデイオは其の夜の中に首を斬られはしまいかと思つて來て見ると、果して殘酷なアンゼロから命令が來てクロウーデイオの首を斬つて朝の五時までに差出せとの事だから、公爵はクロウーデイオに死刑執行を詐して牢屋で朝死んだ囚人の首を送つて置いた方がいゝとは思つたが、牢番の奴が此れに贊成しないと惡いと思つて、公爵は直筆で手紙を書いて判まで押して牢番に見せた、牢番は此れを見て

此の人は留守になつて居る公爵から秘密な命令を受けて來て居る人だなと思ひ、クロウーディオを赦して死人の首をアンゼロに送つた。

其れから公爵は自分の署名をした手紙をアンゼロに送つて、今急に事が起つて旅行は中止して明朝はビーンナの市に歸るから、市の入口で會ひたいと云ふ意味を書いて、其の時に權利を元通りに讓り渡して貰ひたい、若し市民の中誰かゞ冤罪に處せられて訴へたきものは、市に入つて來た時街で其の願ひを言ふがいゝと命令をかき添へた。

朝早くイサベラは獄屋へ來た時に、公爵は女の來るのを待つて居たが、秘密にしてクロウーディオが殺されたと云つた方がいゝと思つたから、イサベラが兄の罪は赦されたかときいた時に、

「アンゼロはクロウーディオを世界の外へ赦しました、クロウーディオの首は斬られてアンゼロの許へ送つたのです。」

「あゝ不運なクロウーディオ兄さん、惡いイサベラ、惡い浮世、憎いアンゼロの惡人!!」と悲しみの餘り叫び出した、公爵は女を慰めて、少し靜まつた時に最う直きに、公爵樣が御歸國になるから其の時にアンゼロに對する不平を訴へるが宜からうと云つて置いて、マリアナの處へ行つて、どんな風にやつたのか聞きに行つた。

後で公爵は僧の服裝を取り去つて、立派な服を着て今や歸國を喜んで出向ひに來た群臣の中に圍まれて市の入口に來て、アンゼロに出遇ひすべての權力を元の通りに讓り受けた其處へ例のイサベラが悲しさうにして來て、

「正しい立派な公爵樣へ、妾は殘酷にも首を斬られました、クロウーディオと申すものゝ妹で御座います、妾は兄の罪を赦して貰ひたさに、アンゼロ樣に致しました事が御座います、どう云ふ事であるかは貴い御前では申す必要は有りませんが、妾は御賴み申しました其の時あの方は御斷りになつて、其れから又妾が答へた事が御座います……此の事は長く御座いますから……、其の結果を耻ぢと悲しみの餘りに申しますと、アンゼロ樣は妾に不名譽な行ひを强請で置いて、妾の兄の罪を御赦しになるとの事で妾は心の中に考へて見ますと、妹としての殘念さが身に染みて德の心は其れに負けて、アンゼロ樣の强請を容れました、然し其の翌朝口の約束を破つて哀れな兄の首を御取りになりましたのです。」

公爵はそんな事は嘘だらうとアンゼロに聞いて見ると、彼れは法律に依つて死刑を宣した餘り悲んで狂人となつたのだと答へた、其の時に他の人が進み出た此れはマリアナで、

「氣高き公爵樣、丁度先から御光が照す樣に玆へ御出でになりました。妾は此アンゼロの妻で御座います、イサベラさんが今御云ひになつたのは嘘で、彼方は昨夜アンゼロと一緒では御座いません妾こそアンゼロと花園で遇ひました、此點に於ては事實で御座います。」

イサベラは僧のロドウック（公爵が假裝當時の名）に云つた事が眞であると申し立てゝ、イサベラ、マリアナ兩人は其の公爵の敎へに從つた、公爵はイサベラが不名譽な事をしなかつた事はビーンナの市に公開して證據立てる事が出來ようと云つた、アンゼロは女二人の違つた申し立てについては思ひかけない事になつて、自分はイサベラから非難される事をのがれたいと思ひ尙ほ其の口論の證據を願つて居たが、やがて、

「今まで私は微笑つて居ましたが、最う堪忍がならない、此の狂氣女は誰かに使はれて居ると思ひます、どうか閣下!!　證據を出して化の皮を露してやつて下さい。」

「宜い君の御滿足になる樣に皆を罰しませうエスカルス!!御前はアンゼロさんと一緒になつて此事件の解決を骨折つて呉れ其僧と云ふものも今呼びにやるから來たらば君のいゝと思ふ通りに罰して呉れ給へねアンゼロ君僕は暫く他へ行つて居るから此事件をよく解決し給へ。」アンゼロは公爵が居なくなつたから、自分のいゝと思ふ通りに裁判して判決する事が出來ると喜んで居た暫くの間で公爵は今の服を脫いで僧の服裝に扮してアンゼロやエスカレスの前に現れた人のいゝエスカンスはアンゼロが譫言されたと思つて居るから、

「早く此處へ來て下さい此等の女共にアンゼロさんを耻しめる樣に云つたのか貴郎は？」

「公爵樣は何處に御出でだか、私の言ふことを聞いて貰はなくちやあ。」

「公爵は私等だ、さあ聞きませう眞直ぐに話して貰ひたい。」

「大膽に云へば、第一公爵がイサベラに訴へられて其の事件を、うつちやつて行つて仕舞ふのは惡いです、ビーンナの國政迄に嘴を入れ公爵樣のなされる事非難するなら牢屋に打ち込むぞよ。」

「何ビーンナの國政迄に嘴を入れ公爵樣のなされる事非難するなら牢屋に打ち込むぞよ。」

其の時皆が驚いた事には、僧と思つて居た此の人が假裝を取り去ると公爵が露はれたのであつた、公爵は始めてイサベラに話しかけて、「イサベラ此處へ來なさい、御前の僧は今

や御前の公爵になつた、然し心は元と變らないまだ私は御前のために働いて居るのだ。」

「御赦し下さいまし、貴い御心を此の樣に御心配かけました事を。」

公爵は實は兄が死んだと詐つた事を心に謝したが、まだ云はなかつた、其れはイサベラの德を見ようと思つて、アンゼロは公爵が己が惡事を秘に見て居た事を始めて知つて、

「恐ろしい公爵樣、貴郎樣が私の行動を御覽なされる事神樣の樣であつて、其れを私が判らないと云ふのは私の罪以上の罪であります、最う此の上は私の耻を御云ひ下さるな自身で私の計畫を白狀させて下さい、死刑の宣告は私は望んで居ります。」

「御前の罪は明白である、クロウーデイオを死刑にした首臺に、御前を載せてやる、彼れと一緒に冥途へ行け、マリアナは寡姉となつて家に居させ、良い夫を持たせてやる。」

「もし公爵樣私は最うい〻人は入りませぬ。」と丁度イサベラがクロウーデイオの命乞ひをした樣に、公爵の膝下に跪いて、不親切者の夫アンゼロの罪を赦して呉れと賴んだ。

「美しいイサベラ樣、どうぞ一緒に願つて下さいまし、貴女の膝を御借し下さい、そして妾の生涯は貴女のために御助け致しますから。」

「御前はイサベラを困らすんだ、イサベラが私に赦して呉れと賴めば、兄の亡靈は冥途から怒つて恐ろしくも此處へ露はれて來るぞ。」

「イサベラ樣！　美しいイサベラ樣一寸で宜しいから妾のために、跪いて下さい御手を上げて、妾は皆云ひます、人々は此う云ひます、善良な人は惡い型にはまらない大部分は惡い者も、ために彌々よくなるつて云ふことです、妾の夫もさうしたう御座いますイサベラ樣、跪いて下さいませんか？」

「アンゼロはクロウーデイオのために死ぬのだ。」

然し公爵の喜んだ事には、可憐なイサベラが優しい姿で跪いて云つた。

「寛大な公爵樣、アンゼロ樣を死刑に遊ばす事は今兄が生きて居ますならば喜びますが今は亡き身の、其れが判らう筈は御座いませぬ、妾の見まするはアンゼロ樣は眞面目に此の法律を御勵行なさいましたまでの事、どうか死刑の事は御赦し遊ばす樣に、兄は死ぬ當然の事をしたのですから其れで宜しう御座います。」

公爵は敵の生命までも助けたいとの心に公爵は感じて、今まで自分の命數について心配

して居た兄クロウーデイオを牢屋から引き出して悲しんで居る妹の前に見せた。

「イサベラ握手をしよう、御前の愛らしい心のために、私はクロウーデイオを赦してやる、御前は私の妻となつて呉れ、さすればクロウーデイオは私の兄だ。」

アンゼロはクロウーデイオが無事だつたから、少しく目に輝きを見せて喜んだのを公爵が見て取つて、「扨てアンゼロ、君の妻を愛してやれ、あの女は君の命乞ひをした、喜べマリアナ、アンゼロ愛してやれよあの女を。」

アンゼロは僅かの間權力を得て居た中に、自分の心は如何に頑固であつたか、又慈悲心はいかに美しいものであるかと云ふ事を感じた、公爵はジュリエットとクロウーデイオとの結婚を申し渡し己れは德性と氣高い振舞に感動したあのイサベラを妻とする事にした。尼僧のイサベラは結婚して被衣を取る事が出來て、賤しい僧服を着て居た親切の僧今は貴い公爵はイサベラを入れて大に喜んだ、ピーンナの公爵の妃となつたイサベラは市の婦人共に、クロウーデイオの妻となつたジュリエットの如き、犯罪に陷入らない樣にと大に婦人共の心を謹嚴に改革したのであつた。

悍婦馴し

バヂュアの富豪バプチスタの長女のカゼリネと云ふものは悍婦とも云ふべき女で、人の命には從はない火の樣な性質怒り易く、悍婦カゼリネと云へば、バヂュアに於て知らぬ者のない有樣であつた。

此の女と結婚しようと云ふ紳士は、まあ無いと云つてもよいくらゐで、妹の優しいビアンカに對しては評判がいゝものだから、親のバプチスタは大に之れを耻として居た。だから、ビアンカの婿を取ることさへもまだ遠慮して、姉の方を先へ片付けなけりやならぬと思つて居た。

ペトラチオと云ふ一紳士が妻を一人欲しいと思つてバヂュアに來たが、此のカゼリネの性質を聞いたが非常に美しい且つ富有の身だときいたから、一つ此の荒つぽい女と結婚して非常に溫和しい女に馴らして見ようと考へて、結婚を申込んだが、此のペトラチオの樣

な人は丁度此の危うい事をするに適當な人であつて、此の人は機智があり滑稽で且つ賢く、狂暴の者をどうして靜めるかと云ふ事もよく知つて居たので、自分自身が怒つた動作をしても心が靜かになれば今の行ひを顧みて笑つたりする事が出來る人で、自分は狂暴の風を裝つてもカゼリネの心を見拔いて自分の通りにして見たいと思つて居た。

始めへトラチオは悍婦カゼリネの家へ行つて父に面會して云ふには、カゼリネ孃の非常に優しい御行を聞いて、頂きに態々ベロナの市からやつて來たといへば、父はカゼリネの結婚は望むところであるが、性質については惡く答へたが此のことはすぐ現はれた、音樂の先生が、カゼリネのことについて不平を、訴へに室の中へ入つて來たので、聞いて見ると、音樂の彈き方に注意をすると、樂器で先生の頭を打ち割つたと云ふのであつた、此れをきいてペトラチオは、

「大膽な御孃さんですね、其う云ふ方ときいて前より好きになりました。」

此の答へをきいて老人は大に驚いて居たが、

「私は大に急いで居るのでして、毎日斯うしては來て居られませぬから、貴郎は私の父を御存知でしたらう、最う死んで私に土地と家屋とを遺して置いて呉れました、若し御孃さんの愛を得ましたら持參物は何にして下さいますね。」

此れは一寸無作法だとは思つたが孃のカゼリネが嫁入りが出來る事だからと思ひ二十萬クラウンの持參金を持たせる事を述べ死後には領地の半分を讓ることを約した、此れをきいて大に紳士は喜んでカゼリネに面會する事になつた。此の間にペトラチオはどう云ふ風に應對し樣かと考へて、

「乃公は女が罵つたときには鶯のやうにいゝ聲で、御唄ひなさると云つてやらう、女が厭やな顏をしたらば、露に濕れた奇麗な薔薇のやうだと賞めてやらう、何事も女が言はなかつたら、女の雄辯のことを賞め、最う出て行くと云へば、後一週間一緒は居て呉れと賴んでやるんだ。」

と思ひ込んで居た。

其處へカゼリネが入つて來たから、ペトラチオは談し出し、

「今日は妾の名はケートさんでしたな。」

カゼリネは此の挨拶をいやがつて、嘲笑て、
「皆は妾に云ふ時はカザリネさんつて云ひますの。」
「御戯談でしよう、皆は貴女のことをケートさん、美しいケートさんと呼ぶぢやありませんか、ケート悍婦と云ふこともありますが、貴女は、基督教國の美しいケートさんでございますよ、貴女の評判はどの市へも響いて居ります、ですから私の妻に頂きたいと參つたのでした。」
可笑しな挨拶が始まつたので、女は自分が悍婦だと云ふ事を見せんがため、聲高く怒つた調子で此れに答へて居たが、尙ほ男は美しいと云ふ樣な事を丁寧な語で云つて居たが、父が來さうだから早く婚姻の事を纏め樣と思つて、
「美しいカザリネさん此んなつまらない應對は止しませうや、貴女の御父さんは私の妻にしてやるとの仰せですし、持參金についても定まりました、貴女の返答次第で私は結婚したいと思ひます。」
父が來た時に、

「貴郎の御嬢さんは親切に私を待遇して下さいました、次の日曜日には結婚して下さるさうです。」
「いえ〳〵違ひます、今度の日曜には此の人の首を絞めてやりたい位です、御父さんは何故こんな狂人の惡者に妾をやらう等と約束して下さいました。」
「あゝ御父さん決して御嬢さんの此の御言葉は何とも私は思ひません、今は斯う云つて御居でゝすけれど、私と二人の時は非常にいゝんです。」
とのべた。
此の女の狂暴を喜んで居る樣に云つて、
「カザリネさん御手を借して下さい、此れから私は結婚日に着る晴衣を買ひに、ベニスへ行きます、御馳走の御用意なさい、御父さん招待客の事も御用意を願ひます、指環に美しい衣服を買ひますと、カザリネさんは美しく引き立ちませう、ケートさん接吻して下さい私等は日曜に結婚するんですから。」
日曜日には結婚のため招待客は集まつて來て、ペトラチオの來るのを長い間待つて居た、

カザリネは戯事をされてるのかと考へて困つて泣いて居た、やがてペトラチオは來たけれど前に約束した樣な晴着もカザリネに持つて來ず、自分にも花婿らしい服裝もしないで、可笑しな風をして、今日の事は戯れの樣に思つて居るかの樣に見えて、從者も馬も汚い奇妙な風采にかざつて來た。

ペトラチオは此の着物を別に代へ樣ともせず、カザリネと結婚しようと云ひ出した、此れに對してあれこれと議論しても無駄だと、一同の者は思つたから打ち連れて敎會へ行つた、やがて僧が出て來てペトラチオにカザリネを妻とするかときくと、大聲で其れを誓つた、僧は此の時聖書を下に落したから、拾はうと腰をかゞめると、此の花婿は僧を毆つて又本を落さしたから一同は驚いて仕舞つた。

此の間に結婚式は行はれて、ペトラチオは其れを誓ひ押印したが、氣丈夫のカザリネは恐しさに振へて居た、式後皆が敎會にまだ居た時に、ペトラチオは酒を取り寄せて、一同の健康を祝すと云つて飲み干し、傍にあつた肉汁の瓶を取つて、寺の役僧の顏へ投げつけたから、其の男の髯に厚くついて、役僧の飲んだ樣に見えて肉汁と話して居る樣に見えた、

此んな變な結婚はなかつたが、ペトラチオは此の計略を亂暴に行つて、狂暴な妻を馴す樣に旨く成効した。

父のバプチスタは高價な御馳走を用意して待つて居たが、敎會から歸るとペトラチオはカザリネの手を取つて此れから直ぐ家へ歸ると云ひ出した、婿に對して議論をすることもなく怒つて居るカザリネの語も、夫の權利を持つたペトラチオの志を代へる事が出來ないで、誰も止め手がなく其の通りにすることになつた。

ペトラチオは變な馬に妻をのせて其の馬は痩せ馬で、自分も從者もすくない馬に乘つて汚い泥の多い道を旅行に上つた、カザリネの乘馬が躓いたりすると、如何にも怒りつぽい人の樣に此の哀れな馬を罵つた、勞れた旅路の間はカザリネはペトラチオの馬從者に對して叱る聲のみきいたばかりで、遂に家へ歸つて來た、ペトラチオは家の中へ新妻を喜んで入れたが、今晩は女に休息も物も食はせないがいゝと思つたから、食卓が出て晩餐が持ち出されても、誤つて皿や鉢を取り落した振りをして見せ、肉を床に投げて、召使ひを叱り廻し、カザリネを愛する餘り、よく燒けてない此んな肉なんかを、喰べちやいけないと言

つた。

カザリネが勞れて飯も食はないから、寐ようとすると彼れは又來て寐床の枕や、布團を投げ散らかし仕樣がないから椅子の上に腰掛けて寐ようとすると、彼れは乃公の妻の寐床を惡くしたと云つて召使ひ共を叱り飛ばした、翌日もカザリネに親切な語を云ひながら又同じ樣に食物を床の上に投げ散らかす事は夕食の時と同樣で、流石に高慢なカザリネも召使ひに、そつと肉の一片を賴んだ、此れを夫のペトラチオは聞いて主人の知らない樣に妻にどんな事でもしてやつては成らぬと嚴命した。

「あゝあの人は妻を餓死させようと思つて結婚したのか知らん、妾は腹は減いて來るし眠るには寐られずあの人は妾にいゝ樣な事を云ふものゝ睡眠不足と空腹とで攻めて妾を殺す氣か知らん。」

と獨り語を云つて居るとペトラチオが入つて來て、肉の一片を持つて來て云ふには、

「美しいカザリネどうしたの、私は御前を愛する事に骨折つて御前の肉を自分で料理して來たよ、何默つてるんだ、肉が嫌ひなら私のやつた事は皆駄目になつて仕舞ふぢやないか。」

とペトラチオは召使ひの者に肉の皿を持つて行けと命じ、今やカザリネは空腹の餘り自れの高慢も度が減じ、

「どうか頂きたい。」と云つたが夫は持つて來てやらうとはまだ思はないで、

「最も哀れな仕事は多く御禮を云つて貰はなきやならぬ、御前が肉を食べるには先へ御禮を私に云つて呉れ。」カザリネはいや〳〵ながらに、

「御禮を云ひます、難有う。」

と答へたから、小さい肉を與へて、

「さあ忙いで御食り、私の甘い戀は一緒に御前の御父さんの家へ歸らうぢやないか、絹の外衣に帽子、金の指環をつけて、頸卷、肩を持つて美しい服も二重に代へて、行つて大に遊んで來ようや。」

と語つて實際信用を得るために仕立屋小間物屋を呼びにやつた、商人共は夫が注文した品を持つて來たし、まだ半分しかカザリネが食ひ終らぬ御膳を、彼方へ持つて行く樣に下女に命じて置いて、

「何せ御前は遠慮して食はないのだ。」

小間物屋が帽子を持つて來て見せると、ペトラチオは俄かに荒々しくなつて來て、

「此んな小さい帽子は注文した覺えは無いぞ、此の帽子は貝の殼位しか大きさは無いぢやないか、此んな物は持つて歸れ、そしてもつと大きいのを持つて來い。」

「妾は此れでよう御座んすの、皆今は女の方は此んな帽子を被つて居ますから。」

「御前が優しい時に買つてやるが、其れまでは……」

今肉を食つて元氣が少しく回復したカザリネは、

「妾の云ふ事は自信があります、思ふ事は皆御話しするんです、妾は子供や赤ん坊ぢや有りません、貴郎の勝れた事は妾の云ふ事をきくと云ふ處にあるんです、若し其れが出來ぬと仰有るなら、貴郎の耳を閉いで居たがいゝわ。」

ペトラチオは女とつまらぬ論をするより、まだいゝ方法を考へて居たから此の怒つた語をきかないで、

「さうだとも此の帽子は汚いよ、お前が嫌ひだと云ふんだから其の語が乃公には氣に入つた。」

「妾を御愛し下さい、でなくば愛して下さいますな、妾は此の帽子が好きなんです此の帽子を買ひませう他のはいやです。」

「外衣が見たいと云ふのかい。」と其れが聞えぬ振りして云つた。

仕立屋が出て來て注文の上衣を見せた、ペトラチオは帽子も上衣も持たせない考へだから又叱り出した。

「何んだ此の材料は、此れでも袖と云へるのか、恰で大砲の半分見たいに、林檎まんぢゆうの樣に上下にきざんである。」

「此れは其の今時の流行で御座いまして。」

カザリネは此んな立派な新流行の形を見た事がないから、此れを買ひたいと思ひ商人共に對して夫の不禮の言を云つたのを詫びたが、夫は大に怒り激した口調で仕立屋も小間物屋も室の外へ突き出して、

「さあケートや御出で、此の汚い今着て居る衣服でもかまはないから御父さんの家へ行か

うよ。」

今は七時だから晝飯時位にまで父のバプチスタの家へ着きたいものだと、馬を用意した然し今はそんなに早くなくつて、晝中だからカザリネもペトラチオの變な語に呆れて、

「だつて今は二時ですよ家に着くのは夕飯前になりますよ。」

ペトラチオは自分の云ふ事は父の家へ歸る前に、何事でも服從させなきやならぬと思つて己は太陽さへも支配してどうでもなる樣な事を云つて馬を命じたが、今は乃公が喜んで行く時ではあるけれど、御前が反對するから今日は止にすると云つた、其後カザリネは新しく服從しなければならぬ樣になつたのは、愈々父の家に一緒に行くと云ふので、二人が旅行の途にある時、晝間に月が輝いて居ると云つた語を、カザリネは其れは太陽ですと云つたのを、

「母の子は私だ、太陽か月か星の光りであるかは父の家に行かない前に、聽いて來よう。」と元來た道に引き返さうとした、然し最う悍婦のカザリネも此の時は、柔順になつて、

「いえ此れまで來ましたのですもの、行きませう、御願ひですから歸らないで下さいまし太陽でも貴郎の御言ひになる通りに月でも星でも、又蠟燭の火だと仰有いましても、妾は其れでいゝのですから。」

「うん其れは月の光だと私は斷言する。」

「妾も月の光と思ひますわ。」

「嘘を云へ、太陽の惠みある光ぢやないか。」

「ぢあ惠みある太陽の光です、然し貴郎が太陽ぢやないと御言ひになれば太陽では御座いませんよ、貴郎のいふ通りの名にして置いて下さいまし妾は其の通りにしますから。」

此の旅途を進めて最う此んなことを强請する最後の手段をやらうとして考へて居ると、一人の老人に出遇つた、ペトラチオは若い女だと云ひかけて、

「今日は美しい御婦人。」と挨拶してカザリネに、あの婦人の赤い白い頰を見よと老人を指し、あの目は星の樣に輝いて居る等と話して、

「美しい愛らしい御婦人、最一度御挨拶をします、おいケートやあの女の美しいことをよく見よ。」

今は全く征服され終つたカザリネは夫の云ふ通りに從つて、此の老人に對し、

「美しい御嬢さんほんとに御綺麗ですね、何處に御住ひです？　何處へ行らつしやいます貴女の御兩親樣は貴女の樣な御嬢さんを持つて御幸で御座いますね。」

「何云つてるのだケートや、狂氣になつたのかい、此の人は弱く痩せた年寄りだ、然かも男だ御前の云ふ樣な女ぢやないよ。」

「御免下さい御爺さん妾の眼は何んでも若く見える樣に、御太陽樣に眩まされましたの貴郎は貴い御年寄り、妾の誤りを御赦し下さい。」

「あゝ良い御爺さん、貴郎は何地へ御出かけなさるんですか、私共と一緒ならばよい御道伴れが出來ますが。」

「あなた方の御話しには私は大に驚きましたよ、私の名はビンセンチオと申しまして、パヂュアに住んで居る伴を訪ねて行きますので。」

ペトラチオは此の老人はバプチスタの妹娘のビアンカを娶ると云ふ若い紳士、ルセンチオの父なる人だと知り、息子の富豪と結婚したゝめに非常に幸福であると云ふ話しに、打ちつれて一同はバプチスタの家へ來た、家にはビアンカとルセンチオの結婚式を祝はんために大勢の人が集まつて居て姉娘のカザリネが嫁した後の事だからバプチスタもビアンカの祝言を非常に喜んで居た、バプチスタは一同を御馳走の席に導いて新郎新婦が來た。

ビアンカの夫のルセンチオと新しく結婚した他の人ホーテンシオは、此の席でペトラチオの妻の亂暴な仕打を眞似たり諷したりして、不運になつたとペトラチオを嘲笑して居り自分達の花嫁の優しい性質を大變喜んで居た。

ペトラチオは此れ等の事を默つてきいて居たが、婦人達が食後に歸つた後で、バプチスタに妻は二人の人の妻よりもよく順從なことが證せられると話すと、

「いや御氣の毒で貴郎には、眞の悍婦と云ふものを御持ちになつたと心配して居ます。」

「いえさうでは有りません、其の證據として私等は御互ひに、妻を呼んで見ませう第一番に此處へ來るのは最も從順な者と定めますから、私は勝つ事が出來ます。」

此の言に二人の夫の連中も大に贊成して、二人の妻共はあの傲慢なカゼリネよりは柔和だと信じ切つて居るから、二十クラウンの賭金をしようと云ひ出した。まだ自分の妻のた

めには澤山出してもいゝとペトラチオは答へたので、今度は兩人は百クラウンを賭けると云ひ、まづ最初にルセンチオが妻を呼びにやつた、使ひの者は歸つて來て、

「奥さんは忙くつて來られませんとの事でした。」

「忙しくつて來られないとは、妻たるべき者の答へだと思ひますか。」

と云つたので皆は笑つて、カゼリネだつて此れよりはまだひどい返事をして寄すのにと云つた、今度はホーレンシオの番となつて使ひに向ひ、

「行つてね、妻に一寸此處へ來て呉れと頼んで呉れ。」

「あはゝゝ、頼むのですか君は、ぢや妻君は來なきやならぬ譯だ。」

「此れは驚いた君は頼まないのですか。」

間もなく使が歸つて來た時には、ホーレンシオの顔色は變つて、

「おいどうしたのだ、何處に妻は居たのかい。」

「旦那樣、奥樣は貴郎が何か戯事をなさるんだから行かないと御言ひになりました、此處へ御出でなさいと旦那樣に御命令でした。」

「駄目〳〵其んな事では、ヒーラや御前は僕の妻の所へ行つてね、此處へ來いと私が命令したと云つて來て呉れ。」

他の者も此の命令にはあの女が來ないと思つて居たが、突然バプチスタが驚いて叫んだ、

「や、カゼリネが此方へ來ますよ。」

カゼリネは入つて來て温和しく、「何御用で妾を御呼び下さいましたの。」

「何處に御前の妹は居るんだ、而してホーレンシオの奥さんは？」

「皆さんは客間の火の傍で御話して居らつしやいます。」

「此方へ皆を連れて御出で。」と云へばカゼリネは一言の抵抗もなく彼方へ行つた。「此れは驚いた。」

「君は驚いたか、僕も驚いた。」

「結婚は人の心を靜かにしますよ、愛、靜かな生活、正しい敬神、短い間でも何事も美しく幸福にします。カゼリネの父は娘の心の變つたのを見て大に喜んだ。

「いゝ事を貴郎はして下すつた、此の賭金は貴郎の勝です、私は娘の持參金として最う二

萬クラウンを増して上げませう、最一人の娘を持つたつもりで。」

カゼリネは他の二婦人を連れて入つて來た、父は、

「御覽なさい貴郎方の二人の女は、此のカゼリネの女らしい行ひに引かされて、囚人の樣について來ました事を、カゼリネや其の帽子はつまらぬ物だ、脫いで放つてやりなさい。」

カゼリネは其の帽子を即座に取つて投げ捨てた、ホーレンシオの妻は、

「貴郎は何故此んな馬鹿な事を見せに私を御呼びになりましたの。」ビアンカも云つた。

「何んだ、つまらないわ。」

「御前の行ひの方が餘程馬鹿だ、私は晝飯後御前の義務のために百クラウンを損した。」

「そんな事なさる貴郎こそ大馬鹿です。」

「おいカゼリネ此の高慢の女共に夫に對しての務をきかせてやれ。」

此の改心した狂暴の女が從順の妻らしき義務と云ふ事を、流暢な言葉で說明した一同はあつと計りに驚いた、今やカゼリネは悍婦として有名であつたと同じように、バヂュアの市に最も從順な妻の手本としてカゼリネの名は有名になつた。

十二夜

メッサリナにセバスチャンとバイオラと云ふ兄妹があつたが、二人は雙子で非常に能く似て居た着物が違つて居なければ見別けがつかない程であつた、二人は同じ時間に生れ又同じ時間に海に航して居た時に破船してイリーヤの沖で危難に出遇つたので、船は暴風のために破られて乘組員は僅かに助かつた計りであつた。船長は部下の水夫の少數と共に小船にのつて上陸した其の時にバイオラの身は助かつたものゝ、兄が行方不明になつたから喜ぶ處か大に悲しんで居た、然し船長は難破した時に大きい檣に取りすがつて漂つて居たのは兄に違ひないから大丈夫助かつたらうと此れを慰められて、大變自分にも安心はしたけれど、今着いた此の知らない國で此の身をどうしたらいゝかと思ひ、船長に此のイリーヤの事を知つて居るかときいた。

「えゝよく知つて居ますよ、私は此處から凡そ三時間程で行けるところに生れネしたもの

でございます。」

「誰が此の土地を治めて居ますか。」

船長は此の地は品性高きオルシノ公が收めて居る事を話し、バイオラは父が元、オルシノ公の話をした事を思ひ出し、其の時はまだ獨身であつたと話した。

「さうですまだ今でも獨身です、一月前に其處へ行つた時こんな話しをきゝました、オルシノ公爵はオリビアと云ふ德の高い婦人を愛して居られたんですが、其の婦人の父上は一年前に死なれて、一人の兄さんに此の婦人の事を賴んで置かれた處が、兄さんも直きに死んで仕舞ひなすつたから、オリビアさんは今は兄を愛する餘りに、男の人とは交際したりする事は絶對になさらないと云ふ事です。」

バイオラは兄の行方が判らないで、悲しんで居る折柄、同じく兄の死を聞いて悲嘆にくれて居る其の婦人と、一緒に暮したいと思ひ、船長に其の婦人の召使ひとなりたいが、紹介して貰へないかと賴んで見た、船長は其れはオリビア姫は、兄さんの死後家へ男と云ふものは、公爵でさへ入れることを拒んで居るから六ッかしいだらうとの話しに、バイオラは自分に一つの計略を考へて、オルシノ公の侍童にならうと、男に假裝して見ようとし、此の妙齡の婦人が、男裝すると云ふことは一寸奇妙なことではあるが、美しい若い盛りの時を、知らぬ他國に只だ獨り持ち來たられたことだから、此れも仕方がないとせねばならぬ。

親切に話して呉れた船長に此の事を打ち明けると大に賛成して、種々と助力して呉れたから船長に金をやつて、丁度似合ふ樣な服を買つて貰つた、其れは兄のセバスチャンと同じ服で同じ色合のものを買つて其れを着込んだ姿は全然で、兄と同じで、兩方同志でも間違へる位であつた、後で漸々判るが實は兄も命は助かつて居た。

船長は今や此のバイオラを宮中に連れて來て、公爵に紹介してセサリノと云ふ名だと申した公爵は此の美しい青年の態度を大に喜び、早速侍童としてセサリノを使ふことにした、セサリノも公爵に對して非常に忠實に仕へて、公爵の面倒を見てやつたから一番の寵臣になつて仕舞つた。公爵は戀人オリビアの話をセサリノにして、其の女は乃公を輕んじて長い間の戀を拒みちつとも會つて呉れないと話し、此の不親切にも女のためと、勇ましい遊

戯は止めて音樂や連歌等と云ふ弱々しいものに親しんで、日頃親しかつた友達には見捨てられて毎日此のセサリノと話して暮して居た、宮城内の老臣はセサリノはあのオルシノ大公爵の友としては不似合な友だとは思つて居た。

若い女が美しい公爵の御愛しなさるのは危い事で、公爵がオリビアが戀しいとの話しを聞いて、セサリノのバイオラは自分は此の公爵が戀しくなり、此んな立派な方を何故にオルビア樣は御嫌ひ遊ばすかと思ひ、暗に此んないゝ公爵を御愛しなさらないオリビア樣を御戀ひになるのは變ですと諷した事もあつたが又、

「公爵樣が、オリビア樣を御慕ひ遊ばすやうに、貴郎樣を御慕ひ申して居る女があるとして見まして、其の女を貴郎樣がもし御嫌ひのときに、嫌ひだと其のものに向つて仰せになることは出來ますまい、而うしてまた其んな御答へを聞いた、女の心はどんなで御座いませうか。」

「いや私が思つて居る程は私を思つて呉れる女なんて、有るものか私がオリビアを思ふに比すれば女の胸なんて極く小さいものだ。」

バイオラは公爵の云ふ言葉は尤だとは思つたが全然眞だとは考へられず現に自分は公爵の持つて居る位の愛情は、自分にも持つて居たからだ。

「公爵樣、私が考へますに……。」

「何を考へるにだ、セサリノ。」

「私は女が男に戀すると云ふたとて、其れは矢張り男が戀すると同じ位に情は御座いますに違ひない……若し私が女の身なら貴郎樣を御慕ひ申しますのですが。」

「其の話は一體どう云ふ話だ？」

「つまらぬ事で御座いますが公爵樣、其の女は己が愛情を打ち明けませんから、薔薇の蕾に蟲が食ひ入つた樣に奇麗な顔はだん〳〵と哀へました。悲しさうに笑つたり、憂鬱の思ひに沈んでしまひました。」

公爵は其の女が戀死をしたかと聞くと、バイオラは曖昧な返答をしてオリシノ公爵に對する戀しい思ひを秘して居た、其の中に使者が此處へ入つて來た、其れはオリビアに送つ

た使者で、

「公爵閣下、御使ひに行きましたが、御姫樣には御面會が出來ませんでした。先方の侍女の御返事には、七年間の立つまでは顏を人には見せないから、又死んだ兄上を忍びながら涙と共に室に閉ぢ込んで尼の樣に被衣を冠つて居ますから、との御語で御座いました。」

公爵は此れをきいて叫んだ。

「兄の死にさへ其の樣に愛情を表はして居るあの女に、戀の征矢が胸に立たばどの位あの女の愛情は盛んだらう。」此度はバイオラに、

「おいセサリノ私の心はお前に打ち明けた通りだ、此れからオリビアの家へ行つて、室の戸口に立つて、一回御目に懸らねば足が腐つても退かないとさう云つてお呉れ。」

「其う云ひました後はどう致すので御座ります？」

「其の上は私が戀を私が眞の思ひを篤とあの女に話して呉れ、きつと姫は嚴めしい顏をして居る者をやるより御前を喜んで迎へるに違ひないから。」

バイオラは命を受けて出たは出たものゝ、自分が結婚したいと思つてる男に、妻になれと人を說き伏せるのだから、餘り此の使ひは好きではなかつたが、命令を受けて來た身の矢張りやらねばならぬと思つた。オリビアは戸口に面會したいと云つて居る靑年のあると云ふ事を聞いたが、侍女の言ふには、

「私は其の若者に貴女樣は御病氣だと申しましたら、其れを知つて御話しに參つたと申します、姫樣は御寐みだと云ひましたら其れを知つて居るから參つたと申し、何事か申上げたいと云つて居ますが如何なさいますか。」

オリビアは此の變な使者は何者かと好奇心にかられて、見てやらうと云ひ出し、今一度オリシノの五月蠅話しを聞いてやらうと、面被を冠つて出て來た、バイオラは部屋に入つても男の擧動をなし大公爵の侍從としての勇ましい流暢な調子で、面被を冠つた女に、

「輝くばかり美しい御姫樣、貴女樣が此の家の御姫樣ならばどうか私の事を御きゝ下さいさうでない外の方ならば折角御話した事が、他へ消えては私はつまらぬ事になりますので私の覺えて參りました文句は六ツかしくつて、覺えますに隨分骨が折れました。」

「はて御前は何處から御出でなの。」

「私は覺えました丈けしか返事が出來ませぬ、其の御尋ねの答は私の云ふ役目には有りません。」

「御前はそんなら喜劇役者か。」

「さうでは有りませんが、私には適當な役では御座いませぬ。」

此れは自分が男裝して居るが、實は女であると云ふ意味なんで、再び此の邸の姫樣かと聞いた時は主人の用事をのべるより戀の敵の顏が見たく、

「御姫樣御顏を御見せ下さいまし。」

此の大膽な願ひをオリビアは聞いた、其の理由は此の高慢な女に公爵が永の間戀して居ても無駄であつたが、此の姫樣は最初其の使者を見て愛情が起つたのであつた。

バイオラが顏を見せて呉れとの事に、

「御前の御主人は妾の顏を見よとの使ひかね。」と七年間も顏を隱すとの決心を忘れて、面被を取りながら、

「そんなら今幕を取つて、顏を見せて上げよう。」

「美しい其の御色、貴女の御頰の赤く白い其の麗はしさ、自然の神が御手に御作りなされたのか、此の御顏を御持ちになりながら、其まゝ墓場の土と御返し遊ばすのは、殘酷な御方で貴女は御座いますぞ。」

「いや〳〵決して殘酷な者ではありませぬ、世の中へは妾の目錄……一つ赤い二つの唇、一つ二つの空色の目睫、一つの首、頸……と、そして御前は妾を讃めに來たのか。」

「私は貴女樣が如何云ふ御心か知つて居ます、貴女樣は高慢な御方です然し御美しい、だから主人が戀して居ます、姫樣は美の女王としての冠を御受けにおなり遊ばしたとて此の戀を知らず顏には出來ませぬ、オルシノ樣の戀ひ方の激しさは御話しにならぬ位です。」

「御前の御主人は妾が心をよく知つて居ます、然し妾は愛する事は出來ませぬ、御主人は德のある氣高い地位も尊い、立派な御方とは妾も知つて居ます。學問も禮儀も武名も世に名高い御方です、然し愛する事は出來ませぬ、此の御返事はずつと前に致した筈です。」

「若し私が主人の樣に貴女樣を戀しますなら、私は柳の木で御門前に小屋を作り、貴名の御名を唱へ、オリビア姫を戀ふと云ふ歌を作つて、夜の靜けき時に歌ひます、貴女樣の名

は小山に響いて、木精となつて私の方へ歸つて參りませう、さうしたら貴女樣は私を哀れんで下さいませう。」

「其れは御前の勝手になさい、御前の御兩親は。」

「私の此の結構な身には比べものには成らぬ位、私は一箇の紳士ですから。」

オリビアは今は此の男をはなすが、いやな樣な氣がしたが、

「歸つて御主人に云つて下さい、妾は貴郎を愛する事は出來ませぬ、御使ひに御前が來れば兎も角、他の者には一切面會を斷りますからとね。」

バイオラは情けない御姫樣と云つて別れを告げて、立ち去つた時にオリビアは今の若者の言つた「私の此の結構な身には比べものになりませぬ、私は一箇の紳士です」との語を、繰り返し「さうだ、あの方の口調と云ひ、あの顏、手足、擧動や、精神ほんとに紳士だ」とあのセサリオが公爵であればいゝと思ひ、急に戀しくなつて餘り輕卒な戀に吾れながら難じて見た、然し自分を非難して見ることは極く根の淺い事で、姫は己が身と先方は侍從と云ふ地位さへ忘れた、處女の謹愼さへ失つて、若いセサリノの愛を得んためオルシノ公から貰つたダイヤモンドの指環を送つて、其の意中を示したが、バイオラは此の指環はオルシノが送つたものに違ひないと疑つて、オリビアの擧動から察して主人の戀人は、自分に戀したことを悟つて、「あゝあの御姫樣は夢の樣な戀をなさつた、私が男裝したのが惡かつたけれど、私がオルシノ樣に戀して居る樣に、あの方も私に對して實のない戀に苦しんで居らつしやるのだ。」と嘆いた。

バイオラはオリシノの宮殿に歸つて來て其の話しの不成功であつた事をのべ、オリビア姫は此の上妾を困らせない樣との事でしたと告げた、公爵は其れでも此のセサリノがオリビアに哀れに云つて呉れる機もあるかとも思つて、翌日も最一度使ひにやる事にして、其の面白い時をまぎらす樣に歌を謠つて呉れよと頼み、

「セサリノ御前が昨夜謠つたあの歌は、大に私の氣が慰められた、此れを御覽セサリノ此れは古くつて分り易い歌だよ、日向に糸取りが機織る時に歌ふので、下らないけれど私は好きだ、昔しの無邪氣な戀を歌つて居るんだが。」

早く來い來い死の神よ

經帷子に包まんせ
息よ絶えよ私は今
無情い女に殺される
死出の晴着よ白無垢に
此の死に様は私ばかり
假令死ぬとも棺には
花や樒は手向けるな
骨の散つたる墓の中
泣いて呉れるなわしが友
千萬人の悲しみもわしのためには無駄涙
戀しい人の來る所へ、わしの死骸を埋めてたも

はかない戀の惱みを手短かに歌つてある此の古い歌に對して、何事も云はなかつたが此の感情は顔に表はれて、公爵が悲しい様な顔をして居るバイオラを見て、

「おいセサリノ御前も年は若いけれど、思つて居る人があるかい。」
「は、はい……。」
「どんな女だ、どんな種類の女なんだ。」
「年から顔、形、貴様そつくりで御座います。」
オリシノはバイオラが己が年より老いた男を思つて居るときいて微笑したが、バイオラはオリシノ公爵の事を云つたので他に似た女なぞは無論なかつたのだ。
第二回目のバイオラがオリビア姫を訪ねた時は何の苦もなく會へて、召使ひ女共はお姫様が美しい若者と談話なさることが好きだなと思つて居たから、バイオラが來るとすぐ門の戸が開いて、大に敬はれて姫の室に通され、バイオラは主人の願ひを云ひに最一度來たことを云ふと、
「最う公爵様の仰せの事は受け取らないと云つたのに、他の人からの用を持つて來たのなら、天上の音樂よりも嬉んで御前の談しを聞きませう。」
此の意味はよく分つて居たが、オリビアは今は判然と、自分の戀を打ち明け、バイオラ

の顔に困つた色があるのを見て、

「妾を賤しいとてそんな顔をしなさるの、セサリノさん春の薔薇の樣に又乙女の氣高さと誠の心で妾は御前に戀しました、假令此れがきかれなくとも此の思ひは消えませぬ。」

と云つたがバイオラは最う此處へは使ひに來ないと覺悟して、忙いで姫の面前を去つた其の時オリビアに答へて、私は「斷然他の女に戀はしませぬから」と答へて置いた、この時オリビアに失戀をした一紳士が公爵の一侍從の若者にオリビアが思ひをかけて居ると云ふことをきいて來て、此の人に決鬪を申し込んだので、之れをきいたバイオラは實は自分は少年と戀裝してゐるのは愚か自分が劔を着けて居るのさへも恐ろしく思ふ女の身なんだ。

恐ろしい戀敵が劔を拔いて進んで來るのを見て、吾が身は女だと白狀して仕舞はうと思つたが、丁度折りよく通りかゝつた一人の通行人が此處へ來て、恰もバイオラの舊知の樣に、

「此の若者が君に對して失禮をしたのなら、僕が代つて制裁して貰はう、たつて君が彼れを責めるなら僕は應援をするから。」

バイオラは此の人に對して御禮を云はうとして居た處へ、又一人の敵が出て來て此の恩人を遂に捕へ、此の人は數年前に罪を犯したので今は公爵の命で捕り抑へに來たのだつた、此の恩人は、

「此れは御前を探しに來たから、此んな破目になつたのだ、おい財布を返してくれ、入用なんだからな、乃公が此んなに捕へられるより、御前の應援の出來ないが殘念だ、おい何を驚いてそんなに呆然、突立てるんだ、はゝ、何心配する事はないよ。」

バイオラは一層此の語に驚いて、知らない人で財布なんか預つた覺えはないと辯じたが折角厚意にして呉れた人の事だと思つて、自分の持つて居る丈の金を少しだけれど男に差し出した、すると男は、

「恩知らず、不親切者！　乃公は御前を死に際から救つたんだ。皆さんさうなのです、此奴のためにイリヤから獨りで此處まで、私は來たんですが、此んな難儀に遇せられたのです。」

役人は其んな不平には一切耳をかさず「そんな事は乃公は知つたことぢやない」と云つ

て、男を急き立てゝ連れて行つた、男は行く時にバイオラをセバスチャンと呼んで、友達甲斐の無い奴だと云つた事をきいて、此れは若しかすると兄のセバスチャンと間違へられたことではないかと思つた、さうすれば兄の命は助つて居ると望みが出來たが、其れは事實であつた。

此の男の名はアントニオと云つて或る船長で、セバスチャンが暴風の際に檣に縋つて漂流して居たのを自分の船に救け上げてやつたので、其れからは二人は親しい交際になつて何處へ行くにも一緒に行くことを誓ひ、アントニオはオルシノ公爵の宮殿へ行つて見たいとの事でイリヤに一緒に來たものゝ、アントニオは曾つて、オルシノの甥と海上で喧嘩をして其れに傷を負はせたことがあるから、イリヤでは注意人物として居た處が、遂に捕へられて仕舞つたのであつた。

此の二人はバイオラに出遇つた五六時間前に上陸したばかりだつたが、アントニオは財布をセバスチャンに渡して欲しいものは何んでも此れで買へ、乃公は旅舍で待つて居るからとの事でセバスチャンは見物に出かけたが、いつまで立つても歸つて來ないからアントニオは探しに出かけた處が、バイオラが同じ服裝をして居た顏さへ非常によく似て居るから友の危い處をと、劍を拔いて助けたばかりに自分は拘引され、相手の者は財布を呉れず、不親切者と罵つたのは無理もないことであつた。

バイオラはアントニオが去ると直に、又決鬪を挑まれると大變だと思つて早々に此處を逃げ出して家へ歸つた、すると敵手の男はまだバイオラが引き返して來たと思つたのは、兄のセバスチャンが戻つて來たので、此の男も間違へて居たのだ。

「さあ又來やがつたな、己れつ。」と打ちかゝつた。

セバスチャンは憶病者ではないから此れに烈しく打ち返して置いて劍を拔いた、其の時に一人の女が此れの仲裁に入つた、此れはオリビア姫でセサリノと見誤つて、家へセバスチャンを連れ歸らうとし誠に飛んだ目に出遇して御氣の毒樣と云つた、セバスチャンは見づ知らずの敵に對した事と其の上又知らぬ女から、斯う云はれて甚だ驚いて居たけれど兎に角オリビアの邸に行くことにした、姫は己れの意中を組み取つて呉れた事と思つて大喜び、最前戀をセサリノに打ち明けた時の樣な變な顏も此の男はしなかつたから、又嬉しが

つて居た。

セバスチャンは姫の親切な歡待を少しも拒まず、どうして此んな事になつたのか此の女は氣違ひぢやないか知らんと思つて見たが、此の人は立派な邸の姫君であり家中の召使ひを指圖して居る樣子は少しも氣違ひとは見えず、吾れに對した突然の愛らしく見えたから此の待遇を喜んで受けて居た、オリビヤは此んなに溫和しくセサリノがなつたのを見て又氣が變ると駄目だと思ひ僧も居ることだから直ぐに結婚しませうと云ひ出した。

結婚式が濟むとセバスチャンは友達のアントニオに自分の幸運を話して來るから、暫らく暇を呉れと云つて出て行つた。此の間にオリシノ公爵はオリビアを訪ね樣と家の前まで行くと役人が囚人アントニオを引つぱつて公爵の前に來た、バイオラが公爵と一緒に居るのを見付けてアントニオはセバスチャンだと又見誤つて、公爵に向ひ此の男を海上で危難に瀕して居るのを救けた事を話し、其の三ケ月間と云ふものは此の不親切な奴と夜も晝も一緒に暮して居ましたと語つた。

然し其の時オリビア姫は家の外へ出かけて來たのを見て公爵はアントニオの云ふ事を耳にもかけず、

「おゝ女神が下界を歩いて來られた、然し御前の云ふ事は氣違じみて居る此の者は三ケ月間は乃公の許に召し使つて居たのだ。」

とアントニオを引き立てる樣に命じた、然しオリビヤ姫はセサリノに對して種々と親しい語をかけるのを公爵は見て、丁度アントニオの云つた樣に恩知らずと公爵は罵り此の仇打はきつとしてやると、

「おいバイオラ一緒に來い、處分してやるから。」

と嫉妬の炎に燃え上つた公爵は、此の從者バイオラを死刑にして仕舞はうと云つたけれど元より公爵を戀して居る事だから、喜んで殺されることに覺悟して居た、オリビヤは夫の殺されると云ふのだから、

「何處へ貴郎は御出でで御座います、セサリノ樣？」

「命までもと思つて居ます、公爵樣へ」

オリビヤはセサリノは吾が夫であると叫んで、先きの僧を呼んだ、僧は二時間計り前に

此の若者との結婚を證明したけれど、バイオラはオリビアとは結婚した事は無いと主張した公爵は扨ては此の若者奴は、私が命以上に思つて居る寶までも盗んだかと思つたものゝ過去の事は取り返す事も出來ず、不實の姫に別れを告げ此の恩知らずの從者バイオラには二度とは會つてはやらぬと去らんとした時、何んと不思議な事には、他のカサリノが此處へ入つて來てオリビアに「妻よ」と呼びかけた、此の男こそ眞のオリビアの夫となつた、セバスチャンで一同の者は同じ姿、同じ聲同じ服裁を見て暫しは驚いて見比べて居た。

バイオラとセバスチャンとは互ひに尋ね合つたが、御互ひに死んだと計り思ひ込んで居た事とて容易に、兄は妹が男裝して居ることを知らなかつたが、バイオラは男裝して居ると云ふことを話し實際兄と妹であることをのべた。

今までの誤りは二人の雙兒り似して居ることに依つて始めて解決し、一同はオリビア姫が誤つて婦人に戀したことを大笑ひをしたが、オリビアは妹の代りに兄と結婚したことを厭やではないと思つて居た。公爵はオリビアの結婚にて目的は達せられず、從つて又失戀の念も消え果てゝ、思ひは親切な可愛らしいセサリノの事に馳せ、女の姿にしたらば美しいだらうと思つて居た、公爵はセサリノは乃公を愛して居たとの事を思ひ浮べていつもの謎の樣な語もまだ意味があると考へ、始めてバイオラを妻にしようと決心し出した。

「おいセサリノ、御前は始め婦人には戀をしないと云つて居たな、而して毎日よく忠實に優しくも仕へて呉れた、今まで御前が主人と呼んだ此身は、御前の夫と呼ばせて御前は公爵夫人にしてやらう。」

オリビアは公爵が自分に對しての失戀をバイオラの方へ向けたのを見て家へ一同を招き今朝セバスチャンと結婚をした時の僧の扶けに依つて、オリシノ公とバイオラの結婚式を擧げた。

かくてバイオラはオリシノ公の妻となりイリ、ヤ公爵夫人となつて、セバスチャンは、地位高く富豪の伯爵姫オリビアの夫となつた。

ペリクレス

タイルの王子ペリクレスは、希臘の皇帝アンチオサスがタイルの市や市民に、秘密になした惡い行を發見したゝめに、アンチオサスの復讐を避けて自分から家出をした、大なる勢力ある人の罪を發見〻云ふことは尤も危險なことである。

ペリクレスの後の者政は大臣の正直なヘリカヌスに任せて置いて、自己はアンチオサスの怒りを逃がれてタイルの市を出帆した、最初行つた處はサルサスの市で此處は嚴格な女の領主のために苦しめられて居るんだと聞いて其の積りで來た。

彼れが着いた時は此の市は非常の苦痛に陷入つて居て、ペリクレスは天から來た救ひの使者の樣だつたから、市の役人のクレオンは非常に彼れを歡迎した。然しペリクレスは故國の大臣からの手紙に依つて此のサルサスには長く居ると危險だとの事を知り、アンチオサスが秘密に間者を出してペリクレスの命を、つけねらつて居るときいて、早速人々が惜しき別れに名殘を惜しんで送つて呉れる中を、再び海上へ乘り出した。

海路遠くまで行かぬ中にペリクレスの船は、恐ろしい暴風に出遇ひ、一同の者は皆溺死を遂げ、殘つたのはペリクレス一人きりになり、見知らぬ海岸に流れついた、詮方なく此處を歩いて居る中に貧しい多勢の漁夫に出遇ひ食物や着物を貰つて、其人達の家へ連れられて來た、漁夫共はペリクレスに此處はシモニデスと云ふ王樣に支配されてる、ペンタポリスと云ふ所で、王樣は非常にいゝ方で國を平和に治めて下さるとの事を話した。

此のシモニデスと云ふ人は若い娘を持つて居て、明日は姫の誕生日になつて宮中には武術の大試合が行はれ、多數の王子や騎士共が此の姫君の愛を得んものと、秘術を盡くして試合をするのだときいて、ペリクレスは自分の武器は今は何處かへ失くしたゝめに、此試合に出て騎士共を相手にすることが出來ぬのを口惜しく内心に思つて居たが幸ひにも一人の漁夫が今海で網にかゝつたと云つて武器を持つて來たのを見てペリクレスは此れこそ私の失つた武器だと喜んだ、此武器は死んだ父の記念物で非常に愛して居た物だつたが今度の難船で失つたものゝ再び歸つて來た處を見ると難船もさして不幸でなかつたと云つた。

翌日はペリクレスが父の武器を身につけて、宮殿へ行き試合擧行に集まつた。王族や騎士共を容易く打ち敗さんと出かけて難なく皆に打ち勝つた、姫君テーサは己が愛を得んとして來た騎士共に今は目もくれず、此の偉大な勝利者に對して厚く歡待し、ペリクレスは姫を一目見た時から、此の美しい姿に戀して仕舞つた。シモニデス王はペリクレスの武勇と品高い事を賞め、尤も完全な紳士だと云つて此の地位の分らぬ紳士をさへ自分の婿にすることを拒まず、又自分の娘が愛情を此の人に注いで居る事を知つて居た。

ペリクレスはテーサと結婚後數月ならずして、アンチオサスが死んだと云ふ報を得、又我れの留守中に歸國を待ちかねて、遂にヘレカヌスを王位につかしたと云ふことをきいた此の報はヘレカヌス自身からの手紙で、自分は其んな高位に登る樣な身ではないから、早くペリクレスに歸つて貰つて政權を返したいと云ふのであつたから、此れをきいてシモニデス王は喜び且つ驚き、自分の婿はタイルの世嗣であつたのか然し今は此の婿と娘の兩方に別れなければならぬかと思つた、然しテーサは此の時姙娠して居たから、ペリクレスは其れが生れるまでは、父の家に殘つて居れと云つたけれど、テーサはきゝ入れず一緒に行きたいと云ひ張つたから其の云ふがまゝにした。

海は不幸にしてペリクレスのためには靜かでなく、タイルに着く前には荒れ狂つた風が吹き出して、テーサは全く恐れて病氣になつて仕舞ひ、其の時に乳母のリコリダは腕に一人の赤子を抱いてペリクレスの前に來て、

「御奥樣は此の荒れで遂に御亡なりになりました、其の時に此の御子樣が御生れなさいました此の方は此んな場所には餘り小さい御方で御座いますが、御亡くれになつた女王樣の御子で御座います。」妻が恐れて死んだときいてペリクレスは、

「あゝ神樣!!　なぜにあの御授けになりました者を私に愛させて下さいました、而して又其れを亡くして下さいました。」

「御辛抱なさいませ旦那樣!!　茲になくなつた奥樣の御記念が御座いましから此れで、御辛抱遊ばせ。」ペリクレスは新しく生れた子供を兩手に抱いて、

「御前の生涯はきつと穩かだ、此れより烈しい處に生れたものはないからな、御前の一生が穩かで優しい樣に、お前は王子の子として來たのには餘り粗末な待遇であつたからな、御

前を幸福にあらしめたい、風や波や天地が御前が母の胎内から生れる時に荒れ狂つて先き觸れをしたからだ、御前が生れた時は斯んな有樣だ、然し御前が死ぬ時は今生れた喜びより以上の喜ばしさになつて欲しいよ、新しく生れて來た御前の身にはその位の報酬はあるだらう。」

暴風は其の後少しも止まなかつた、水夫共は一箇でも、死體が船の中にある時には暴風は止まないと云ふ迷信を持つて居たから、ペリクレスの許へ來て女王の死體を海に投げ入れて呉れと頼みに來て、

「貴郎樣、其れが勇氣では御座いませんか、神樣が御助けになります。」

「勇氣は充分ある、だから暴風には恐くない、乃公の身に大害をなしたが、今は此の新しく生れた子供のために止めばいゝと思つて居る。」

「貴郎樣、女王樣の死體を海へ投げ込みませう、波は高く風は凄く吹きました、船に死人の汚れがなくなるまでは止みませんでせう。」

ペリクレスは此の迷信は實にくだらないとは思つて居たが、今は從つて、

「貴樣等が其う考へが一致する事なら、女王を投げ入れよう、尤も惡い女王だな……！」

此の不幸な王子は親愛な妻と最後の袂別に行つて、

「御前は恐ろしい產床に居て呉れた、燈火もなく火もなく、不親切な大風は無殘や、御前を忘れて荒れ狂つた、御前を墓場まで一緒に連れることが乃公には出來ない、お前の體は海へ投げ入れねばならぬ、其處には墓石の代りに波が御前の體の前を音をたてゝ叫んで居ることだらう、あゝリコリダや御前はネストーに香料とインキと紙、小箱に寶石を持つて來いと云つて呉れ、ニカンドーには棺を持つて來いと命じて呉れ、其の赤ン坊を枕に寢させて置いて呉れ、乃公はテーサに僧侶の云ふ告別をやるんだ。」

一同の者は大きい棺を持つて來て其の中へ香料をつめて、女王は其の中に入れられ、其の中からは香氣が紛紜と漏れて來る、ペリクレスは其の横に、立派な寶石と此の女の何物であると云ふ事をかいた紙とを入れて、此の棺を拾つた誰人でも葬式をして呉れる樣にして置いて、己の手から棺を海の中へ投げ入れた。

暴風はやがて靜まつた時にペリクレスはサーサスへ進路を向けよと、水夫に命じて、

「此の赤坊はタイルに持つて行くまでには死んで仕舞ふから、サーサスに殘していゝ乳母に育てさすんだ。」と云つた。

テーサが海に投げ入れられた暴風の夜明けに早く起きたエピサスの紳士で醫者のセリモンは、海岸を歩いて居ると、下僕が棺を拾つて持つて來た。

「波が此んな物を打ち上げました。」

セリモンは其れを家へ持て來いと命じて歸つた、棺を開いて見ると、若い美しい女が中に入つて居たから驚いた、何とも云へぬいゝ香ひがし、寶石の滿ちて居る箱を見てどうしてこんな不思議な、葬式をされたのだらう、きつと立派な人に違ひないと判じて、尙ほも探すと紙切れが出て來た讀んで見ると、此の女はペリクレスの妻で女王とならぬ前に死んだとの事、此の若い妻を失つた夫に同情し、此の女の顏を見て居るとまだ生き〳〵して居て死んだとは見えず、

「やつ此れは海へ早く投げ込みすぎたんだ。」

と云つて死んだとは信せず、火を焚くことを命じ興奮劑をのませ、音樂を奏でる樣に命じて、生き返つて來る女の心を落ちつかせる樣にして、集まつた皆の者共に、

「皆さん、此の婦人は生き返ります、まだ五時間ばかりしか氣を失つてやしませぬ、今息を吸ひ始めましたでせう、御覽なさい眼瞼が動き出しました、此の美しい人は生きて話しをきいて泣きませう。」

テーサは死んだのではなかつた。子供を生んで失心したのを皆が死んだと思つて居たので、此の紳士の親切な介抱で生氣に返つて、目を開いて、

「何處に妾は居ますのです？　夫は何處に居ます、茲は何處ですか。」

優しい紳士は貴女は今まで死んで居たのだと話し、十分正氣だと見て取つて例の紙を示して、夫の手跡やら寶石を見せた。

「此れは夫の手跡で御座います、妾は船にのつて出ましたことは能く覺えて居ますが、妾の生んだ赤ン坊は何處に任せたか、神樣の清い御心に任せて置いて正しく云ふことは、出來ませんし、妾は貞女として淋しく一生を送りませう、最う夫には二度と會へませぬから。」

「奥樣、貴女の御云ひなさる通りなれば、ダイアナの寺は此の近くです、其處で貞女とし

て御住ひなさつてはどうです、貴女が宜しければ私の姪が其處へ御案内をしますから、テーサは大に喜び御禮を云つた、セリモンはテーサをダイアナの寺へ入れた、其處で尼僧となつて神様に仕へ、貞女として淋しく夫を思ひながら悲しい月日を送つて居た。

ペリクレスは若い生れた娘を、マリアナと名づけて此れをクレオンの許に預ける事にした、クレオンは市の執政官で妻のデイオニシャは其れがいゝと云つて、此の母なき孤兒を親切に育てるとのべた、クレオンはペリクレスからあの美しい女王が死んだと聞いて、

「あの貴郎を大變に喜ばしたあの姫様が!!　貴郎が私に見せに連れて來て下さいました、あの方が御亡くなり遊ばしましたので！」

「吾々は吾々より以上の大なる力に從はんけれやならぬ、此の無邪氣なマリアナは御前に預けるから頼んだぞ、どうか王女になる様に立派に教育して呉れ、奥さんどうか願ひます よ子供の事をね。」

「妾は一人の子供が有りますけれど、貴郎の御子さんの方が何だか可愛いと思ひます。」

「貴郎様の御扶持で人々を養つて居ますから、人々の考へも此の御子様に向いて居ます若し御育ですることを私が怠りますと、人々は私の責任を問ひに參ります、私は神様の天罰でも此身が破滅になります。」

ペリクレスも此の語をきいて子供は、きつと注意して育てゝ呉れると思ひ、此の兩夫婦に子供を任かせて此處を去り、乳母のリコリダにも別れた、乳母は主人に別れるのが辛いとて泣いて居たが、

「泣くな、泣くな御前はあの小さい女主人をよく注意して呉れよ。」

と云つて袂を別ち、無事タイルに着いて二度目に位に登り、可愛い妻は死んだと思つて居た、小さい子供のマリアナは、母もなくクレオンの手で高位の生れに相應しい様に、育てられクレオンの良教育に依り十四歳の年には、男でさへも適はない位に勉強した、歌も上手舞踏も達者で女神の様に舞ひ、裁縫も熟達して、眞實の鳥も花も果實もマリアナの刺繍つたのに比べると劣つて居ると云へる位に巧みになつた、此の位に立派になつたにクレオンの妻デイオニシアは嫉妬の餘りに此の娘の敵となり、自分の娘の智慧が足らなくてアリアナと同等になれないのを怒り、マリアナを人々が讃め自分の娘は同じ年で、同じ様に育

てられても、人が何んとも云はないのに、祕かにマリアナを排斥して居なければ自分の娘は人から持て囃やされるだらうと考へて、此れを殺して貰ふ樣に人に賴んだ時は、丁度乳母のリコリダが死んだ時で、マリアナは此れを大に泣いて悲しんで居た、其の際ディオニシアは人に談判して殺して呉れと云つて居た。

賴まれた人は惡い人だつたが、此の賴みは容易に承け合はなかつた。此の位にマリアナは人々から可愛いがられて居たので、

「でもあの娘さんはいゝ方ですよ。」

「はあよう御座んす、外の人を誰か賴みますから、今あの女は乳母のリコリダが死んだから泣いて來ます、貴郎は決心して下さらないか。」

若しいやと云へば恐ろしいと思つて此のレオニネは、

「はあ私は決心しました。」

最う僅か經てばマリアナは不圖る死に出遇ふとは知らずに、此方へ花籠を持つて來て此れから毎日花をリコリダの墓へ手向けますと話した。

「さうすれば墓場は、紫色の菫や、金盞花の花で毛布の樣に見えませう夏の間はね――あ此の不幸な乳母は妾の御母さんが、亡くなつた嵐の時に生れた人だ、浮世は妾の友達を持つて行く嵐の樣だわ。」

「どうしたのマリアナさん、獨りで泣いてるの、妾の娘も御一緒ぢやなかつたんですか、リコリダの事は最う御泣きなさるな、此れからは妾が代つて乳母ですから、そんなに泣くと美しさが取れて仕舞ひますよ、其の花を妾に下さい海の風は枯らしますよ、いゝ天氣ですからレオニネと一緒に散歩して御出でなさい、慰めて呉れますから、レオニネや御出で御孃さんの手を引いて散歩につれて行つて御呉れ。」

「いや、貴女の御召使ひに妾を御預けなさらなくとも宜しう御座います。」

レオニネはディオニシアの召使ひの一人であつたからなので、之を企んだディオニシアは、二人で外へやらうと思ひながら、

「御出でなさい、さあ、妾は貴女の御父さんも貴女も好きです、毎日御父さんが茲に御居でなさるといゝと思つて居ますわ、御父さんが御居でになりますなら、貴女の御美しいこ

とを見て悲しさが却つて嬉しく御代りでせう、きつと御父さんが貴女を大切にしないと御考へですよ、さあ行つて樂しんで居らつしやい。」

「ぢあ行つて來ませう、餘り氣は進まないんですけれど。」

出で行く時に女はレオニネに「妾の言つたことをよく氣を付けてね」とは娘を殺せとの意味であつた、マリアナは生れ場所の海を眺めて云つた。

「今は西風が吹いて居ますか？」

「西南の風ですよ。」

「妾の生れた時は北風でした。」

と云つて嵐や暴風や父に對する悲み、母の追憶に胸が迫まつて來て、

「妾の御父さんは、乳母のリコリダの話には、暴風の時にはちつとも恐がらないで、手を繩ですりむきながら、『しつかりせよ、よき水夫共』と叫びながら、檣に卷きついて甲板に立つて居ましたさうです。」

「それは何時頃でした。」

「妾の生れた時でしたの、あんな波風烈しい時はなかつたとの事です。」

と云つて、暴風の狀態や、水夫共の働作や船長の叫び聲等の話しをして、

「で船は混亂して居ましたんです。」

リコリダは折り〳〵此の不運な生れ方を話したものだから、マリアナの想像力にさへ其れが浮ばれて見える樣になつた、レオニネは依頼された事を打ちあけた。

「何う云ふ事です。」と一寸恐れ出したが、別に判らなかつたから、

「忙がないで、神樣は耳敏い、私は急いで仕事をする樣に誓つて來ました。」

「貴郎は妾を殺すのですか、あゝなせです？」

「奥樣が御滿足なさる樣に。」

「どうして妾は生かして置けませんでせうか、妾は殺される樣な惡い事をした覺えは有りませんが、妾は惡口も申したことはなく、動物にだつて惡い樣な事をしません、鼠や蠅一疋さへ殺した事はありませんのに、一度蟲を思はず踏みましたが其れをだに、泣いてやりました、どうして妾は罪があるのですか。」

「私は理由があつて其の行ひをするんぢやない、只やればいゝんだから。」

あはや殺さんとした瞬間に一人の海賊が上陸して來て、マリアナを見て金を出して船へ買ひ取つて行き、そして又此の海賊はマリアナを奴隷に賣つたので市へ連れられて來た、此んな逆境でもマリアナの美しさと德性はメタリンの市中に大評判になり、大變な金で或る人の許へ買はれた、マリアナは音樂舞踏、刺繍を人に敎へて其の得た金を主人夫婦に與へ、學問と勉强家と云ふ評判はメタリンの支配者なる若い貴族、リシマサスの知る處となり、マリアナの住んでる家へ其の評判娘を見に出掛けた。

マリアナの談し工合は殊の外にリシマサスの氣に入つて、今まで澤山の處女を見たが、あんな美しい德のあるのは見た事がなかつたからして、マリアナの身分低いにも拘はらず結婚したいと思つて居たから、きつと氣高い名門の出に違ひないと思つて兩親の名を聞いた處が、マリアナは泣いた切りであつた。

其の間にサーサスに於てはレオニネは、デイオニシアの怒りを恐れて、マリアナを殺したと詐つたから、此の惡い婦人は眞に死んだものと思つて、葬式を出して石碑を立てゝ置いた。

間も無くペリクレスは大臣のヘリカヌスを連れて、タイルからサーサスへ航海して、娘を連れて家へ行かうとの目的に外ならないで、死んだ女王が娘を見たらどの位嬉しいかと思ひ、小さい時に手離した子供の顏を見に來た、然しマリアナは死んだとの人々の話し而かも墓場まで見せられて、戀しいテーサの只だ一つの記念の場所へ來ても、望は絕えて失望してサーサスを離れて仕舞つた、其の後は氣が鬱々として快しまず、何を見ても面白くなくなつた。

サーサスからタイルに歸る航路はマリアナが住んで居るメタリンを過ぎて行くので、此地の領主のリシマサスが立派な船が沖合を、通つて行くのであの船には誰れが乘つて居るか知りたいと思ひ、己れは小船にのつて此の船まで漕ぎつけて、其の好奇心を滿足させるためにヘリカヌスは此の船はタイルに行くので、此れには君主ペリクレスがのつて居ると話し、

「その御方は三ケ月間は人と話しも交へられませぬ、其れはいゝとして御夫人と娘樣に御

別れなさいましたのですから。」

リシマサスは一度其の方に面會したいと、會つて見るといゝ人であるから、

「陛下、神樣は貴郎樣を御助けなさいます、貴い陛下!!」

と云つてもペリクレスは一言の答へもしなかつた、又其の人の顏さへも見なかつた、リシマサスはあの美しいマリアナを呼んで來て、あの滑らかな口調で話しをさせたら此の默つて居る王の口を開かさせる事も出來ようかと、マリアナを呼びにやつた。

マリアナは船へ來て見ると、父は悲しさうに沈默を守つて居たのだが、マリアナを見た船中の人々は「美しい婦人だ」と賞めたからリシマサスは喜んで、

「此の女は一人者です、而して高貴な所に生れたと私は思ひますが、そんなことはどうでもいゝとして、妻にあの女をしたいと思つて居ます。」

と云つて此の女に、高貴の人にでも云ふ樣に、話しかけて此の船の甲板には悲觀して居る國王が居られるから、其れを慰める樣に御話して下さいとのべ、

「貴郎樣妾は御慰め申しますに、非常に上手に御話しゝて見ませう、然し何んだかそんな貴い御方に近づきますのが心配です。」

ナタリンの市に於ては自分の身分を隱して居たマリアナは、ペリクレスに向つて妾は奴隸で御座いますと云ふのは、いかにも恥づかしくて、實は高貴に生れた身が、不運に弄ばれて變化した事を話し、丁度自己の父が前に居たかの樣に悲しげに、語句は響いた、美しい聲が首をうなだれて居るペリクレスを起き上がらして、目を上げて長い間此の少女を見つめて居て動かなかつた、母の姿そつくりのマリアナの顏は、ペリクレスが愛して居る女王の姿を描き出して驚かせた、今まで長く沈默して居たペリクレスは、

「乃公が親しい妻は此の少女の樣だつた、此の少女が乃公の娘であるといゝな。妻の額やすつきりとした丈形、銀の樣な聲あの女の目は寶石の樣であつた、何處に御前は住んで居るのか、御前の兩親の名は何んと云ふのだ、御前は不運だと云つたな御前の運命は乃公と同じだと思つてると云つた樣だつた。」

「此んな樣な話しは何んだか同じ樣と、妾が思ひました丈なんで御座います。」

「御前は乃公の辛抱の千倍もして居たら、御前は男の樣な悲みだ、乃公は女の樣に意々地

がなかつた、乃公の墓に忍耐の神様の様に眺めて、永久に笑ふのだらう、さあどうして御前の名はないのか、話して聞かして御呉れ御願ひだ。」

少女の名はマリアナだと云つた時には、ペリクレスは驚いた、自分の娘は海に生れたからさう云ふ名をつけたので、餘り此の名は普通にはないと思つて居たから、

「あゝ乃公は嘲笑されてるのだ、御前は私を笑はうと神様の御使ひで此處へ來たのか。」

「暫らく御辛抱を、さうでなくば御話しが出來ませぬから。」

「うん辛抱するとも、御前がマリアナと呼ぶから乃公は驚いたのだ。」

「此の名は或る權力ある父、其れは國王の父からつけて貰つたのでした。」

「何んだと國王の娘だと、そしてマリアナと云ふのだな、御前は生きて居るのか、幽靈でないか、何處で生れてどうしてその名が付いたのだ、話して呉れ。」

「妾の母はさる國王の娘でしたが、妾を生んだ時に死にましたさうで此の事は、いゝ乳母のリコリダが折り〳〵泣いて話しました、父は妾をサーサスに置いて行つて仕舞ひました、殘された妾は殘酷なクレオンの妻に依つて殺されようとした處を、海賊が來、妾を助けて此のメタリンに連れて來ました。あれ貴郎は妾を嘘つきと思召しますか、然し貴郎妾は國王ペリクレスの娘で御座います。」

不意に喜ばしさが込み上げて來た、然し此れが事實かと疑ひ大聲で從者を呼んだ、慕しい君の御聲がきかれたから、ヘリカヌスが來た。

「おいヘリカヌスか乃公を打つて呉れ、乃公を傷けて見て呉れ、おゝ此處へ來い海で生た御前は一度、葬式に會つて又海へ再生して來たのだ、おいヘリカヌス下に座つて、神様に御禮を云つて呉れ、此れがマリアナだつたよ、サーサスで死んで居なかつたのだ、矢張りあのディオニシアの殘酷な目にあつたんだとさ、皆娘は御前に話すだらう御前が跪いて、女王様と云ふなら、おつ、此の人は誰だい。」

と傍に居た、リシマサスを初めて見た、ヘリカヌスは、

「此れはメタリンの領主の方で貴郎様の御悲觀を、御見舞ひに來て下さいました。」

「さうか、乃公の衣服を持つて來い最う大丈夫快りましたよ、おゝ天の神よ娘を惠んでくれました、やつ、音樂の響きがする。」餘り嬉しくつて音樂がきこえて居る樣な氣がした。

「貴郎樣何にも聞えませぬ。」

「何にもきこえない、其れは宇宙の音樂だ。」

音樂は聞えては居ないが、リシマサスは嬉しさに王は氣が狂つたものと思ひ、

「何、さからつてはいけないから、云ふ通りにさして置くがいゝ。」

と音樂が聞えると同意した、リシマサスはペリクレスを横にして枕をさせる樣に命じ、喜びの心を靜めて安靜に眠らせ、マリアナは此の父親の傍に靜に見戍つて居た、眠つて居る間にペリクレスは、エピサスへ行きたい夢を見た、此の夢はエピサスの女神のダイアナが現はれてエピサスの寺院に行つて、祭壇の前に自分の生涯と不幸な物語りをして見よ此の命令通りにするなら、まだ幸福な事が起つて來るとの事を夢見た。

目が覺めてから此の夢の不思議な事を話し、女神の敎へに從つて見ようと決心した、リシマサスはペリクレスを海岸に招いて此のメタリンの地に於て、歡待したいから二三日止まつて呉れないかと告げた、此の逗留の間は大變な面白い事やら、御馳走をして此のメタリンの領主はマリアナの父に對して接待の限りをつくした、ペリクレスは娘が低い地位の者と見られて居た時でも、此の領主は丁寧に取り扱かつた事を知つて居るから、娘の婿にする事を嫌とは思はなかつた、マリアナも彼が申し込みを逆はなかつた、其れで三人が一緒にエピサスの寺院へ行くことにした、一同出帆後は女神が順風を送つて數週間の後に安全にエピサスに着いた。

女神の寺院の建つて居る所へ一同の者は來た時、セリモン今は年も寄つて居たが妻は此の寺の尼僧となつて居た、一同は祭壇の前で祈りをして居ると、テーサは夫の聲や姿を見て驚き且つ喜んだ、よくきいて居ると、

「あゝディアナの神御命令に從つて參りました、私はタイルの王で國を遁れペンタポリスに於て妻テーサと婚しましたが、海上に於て一子マリアナを生んで產褥に於て死にました、子供はサーサスに於てディオニシアに育てられましたが十四歲の時に殺されんとしましたが之を免れてゐるうち幸運の星はメタリンへ子供を連れて來ました、船上に於て私と再會して吾が娘と知れました。」

テーサは此れをきいて飛び上り、「おゝ貴郎です貴郎です、おゝペリクレス樣!」

「此の婦人は何云つてるんだ、あの女は死んだ筈だ、諸君助けて呉れ!!」
「いや貴郎がディアナの御前で眞を御話しになりしたなら、此の人は確かに夫人です。」
「いや私は海の中へ投げ入れました、此の腕で投げましたのです。」
セリモンは暴風の朝にエピサスの海濱に於て、此の女が寶石や手紙や筆と一緒に棺の中に入つて漂着したことを話し、此の寺院に送つたことをのべた、今やテーサは、
「貴郎はペリクレス様でせう？　どうもよく似て居ます、貴郎は暴風、出産、死、と云ふ御名では有りませぬか。」
「此れは死んだテーサの聲だ。」
「其のテーサは妾で御座います、死んだと思はれて居ましたのです。」
「あゝ眞でしたダイアナの神様。」とペリクレスは驚いて叫んだ。
「御手にはめて御出での指輪は、妾の御父さんが貴郎がペンタポリスを御出發の時に、父が御上げ申したので、泣いて御別れ申しましたでは御座いませんか。」
「御前の親切な事は過去の不幸が戲れになつて仕舞つた、此の手で最う一度葬つてやらう、さあ御出でテーサ。」マリアナは、
「妾の心は御母さんの胸の中へ入つて行く樣な氣がします。」
ペリクレスは此れが、娘だと紹介し海で生れた故に、マリアナと呼んだと話した、
「神樣の御惠みある樣に。」とペリクレスは祭壇の前に跪いて、
「神樣どうか此の場面を御惠み下さいました御禮に、今夜は供物を御供へ致たいのです。」
斯やうにして王ペリクレスは女王テーサに云ふには、娘は德のあつた御蔭で機會は機會を生んで、此の再會が出來た、忠實なヘリカヌスは自分が王位に登る事が出來たのに、元の領主に位を讓つた正直なる忠義の心は大に吾人が讃美せねばならぬ、セリモンの援けに依つてテーサは還俗した。
かのクレオンの妻の殘忍なディオニシアは此れに對して相當な罰を加へられ、サーサスの住民は彼女の陰謀を始めて知つて、恩人の娘の仇を復さうと其の家に火をつけた、クレオン夫婦は燒け死んだ、神樣は惡人共が惡い事を企んでも、其れが成功しないで、其の惡相當の報ひが來て罰せられるのを見て喜んで居られた。

冬物語

シ、リイの王のレオンテスと其の女王のハーヨオネは非常に美しく德のある方で二人は仲睦まじく暮して居た、王は妃を非常に愛して居たから幸福な此の家庭に何の不足もなかつたが、王は舊友なるボヘミア王ポリキセネスに妻を紹介したいと思つて居たが其れはまだ行はれなかつた。

此の二人の友達同志は子供の時から一緒に育てれ、各々其の父の死んだために其の國を貰つて治めて居たから手紙の往復は度々やつたけれど、まだ數年間少しも會ふ機會が無かつた、遂にポリセネスはボヘミアからシ、リイの宮殿に、度々の招待にいなみ難く來ることになつた。

久し振りに會ふこと故レオンテスは嬉しくつて、此の舊友を自分の妻に紹介して、二人は往時の學校時代の話しをしてゐたので會話は非常に愉快さうであつた。長い間逗留の後

ポリセネスは出發しようと云ひ出したが、妃ハーマイオは夫が最う少し長く居て呉れ給へと、頼む後について同じくそれを望むだ。

王妃の悲しい事には、夫レオンテスが滯留を勸めた時に、歸ることを主張して居たレオンテスは、妃のハーマイオの勸告するに至ると直ぐに其の願ひを聞いて、逗留しようと云ひ出したので、夫レオンテスは己れの親友の眞面目で氣高い性質をよく知つて居たし、妻の貞操も知つて居るのだが、遂に嫉妬の心に捕へられて仕舞つた。

王妃は夫の命令に從つてポリセネスを客人として待遇したのが、益々夫の嫉妬心を增長せしめて、此の愛すべき親しい友達に對して俄に野蠻な怪物と代り、廷臣カミローに命じてポリセネスを毒殺して呉れと命じた。

カミローは元から善人であつて王の嫉妬心をよく知つて居たからポリセネスに、此の事を話して此のシ、リイの宮殿から逃げた方がいゝと話し込んだ、其れに依つてポリセネスはボヘミアの國のカミローに助けられて無事に歸りカミローはボヘミアの廷臣として、仕へポリセネスの親友として又寵臣として長く一緒に暮して居た、ポリセネスの逃亡の事が

王レオンテースの耳に入つたので大に怒つた、其の時王妃は子供マミラスを抱いて室に居たが、其處へ王は入つて來た。

マミラスはまだ幼少の子ではあるが、母を優しう愛して居たが王が來て其の子供と母の間を割いて、母は囚人にして仕舞つた、母の難義を知つて此の子は大に悲しみ食慾も睡眠も出來ぬ位に心配し始め、最う死ぬかと思はれた位であつた。王は妃を禁固に處した後で宮臣タレオメネスとデイオンの二人を、デルフワイの寺院に行かしめてポロー神に、王妃は自分に對して誠實があるか否かの神託を伺はせにやつた。

王妃ハーミオネは牢屋の中で女の兒を生んで、此の小さい子供のために毎日慰められて居たそして此の子供に向つては、

「小さい囚人になつたねえ御前は、妾だつて御前の樣に罪は有りませんわ。」

此のハーミオネには、親友があつて、シ、リイの宮臣のアンチゴナスの妻のポリーナと云ふもので、王妃が牢屋の中で產をしたのだといふことをきいて、牢屋へ訪ねて來て侍女のエミリアに、

「どうかね、女王樣に云つて下さいエミリアさん、赤ちやんを妾に御貸し下さい、其の御子樣を御父さんに御目にかけますなら、きつと御心が直りませうと思ひますから。」

「さうで御座いますか、早速女王樣に申し上げませう、今日も誰方か王樣の許へ此の子を、屆けて下さる人はないか等と云つて見えましたんで御座いますよ。」

「そして妾は王樣の前にむき出しにどん〳〵と云つてやりますと、仰つしやつて下さい。」

「あの女王樣を親切にして下さる貴郎の御幸福を祈りませう。」

誰も王の所へ持つて行つて呉れる人がないと心配して居た矢先、ハーミオネは大に喜んで赤ん坊を渡した、ポリーナは此れを受け取つて王の面前に來て、夫は王が御怒りだと心配して居るに係はらず、王の足の下に子供を置いて、女王の無罪につき辯解し、王の不人情を責め此の無邪氣な兒と罪のない女王を可愛いがつて下さいと申し立てた、然し此れは徒らに王の怒りを增すばかりで、夫アンチゴナスに命じて、己れが面前から引き立てる樣に命令した。

ポリーナは退げられる時に、赤ん坊を王の足の下に殘して置いた、きつと王が其れを見

て可憐の情を起すに違ひないと思つて居たから――然し此の考へは間違つて居た、王はアンチゴナスに此の兒を海邊へ連れて行き、棄てゝ來いと命令した。

アンチゴナスは妻のポリーナとは違つて、此の命令を承知し子供を船にのせて海上へ、乘り出し一番始めに見付けた、何處か海岸へ捨て樣と思つた、王は又クレオメネスとダイオンの二臣にアポローの神託をきゝにやつて置いたけれど、其の歸國するのを待たずして女王に罪があると主張して、生んだ計りで子を失つた惱みのまだ快らない此の女王を、宮廷の貴族や官吏の前で裁判をする事となつた。

貴族や裁判官や澤山の官吏共が集まつて、女王は皆の裁判を受けるために引き出された其處へ神託を受けに行つた二臣が歸つて來た。

「神託の封を切つて、讀み下せ。」

其の神託は次の樣なものであつた。

「ハーマイオは罪なき者なり、ポリセネスとても罪はなし、カミローは忠臣なり、レオンテース汝は暴君にて、失なつたる子供を見出さずんば、世嗣は絶ゆるに至らん。」

王は此れは嘘の神託だ、女王の朋友の誰かゞ揑造したものだと云つて、女王の裁判をする事に進んだ、其の時一人の男が來て王子マミラス樣は母君の命にかゝる今日の裁判を悲しむの餘り、自殺なさいましたと云つて來た、此れを聞いた女王ハーミオネは己が、可愛い子供の死と知つて氣絶して仕舞つた、王も此れで少しは女王の身を不憫だと思つてポリーナに命じて彼方へ連れて行つて介抱せよと命じたがポリーナは歸つて來て、ハーミオネ樣は御かくれになりましたと云つて來た。

レオンテースは女王の死を聞いて自分の行爲の殘酷であつたことを悟つて、其れがハーミオネの心を破つたこと、女王の罪ない事を考へ出し、神託の語は眞實で、「失つた子供を見出さずんば」とは、子供のマミラスの死後はあの捨てた娘を、世嗣としなければならぬと國中を探したく、大なる後悔を以て捨てた娘の可愛いさに悲しい月日を送つて居た。

アンチゴナスが小さい赤ん坊の王女をのせて行つた船は、ボヘミヤの海岸へ暴風のために打ち寄せられ、其處はかのよき國王ポリセネスの領地であつた、アンチゴナスは此地へ上陸して其の子を棄てゝ仕舞つた、アンチゴナスは何處に其子を捨てたとは王に話すこと

は出來なかつたので、其れは彼れが歸途に一頭の熊が出て來て、惡い王の命令を從つた爲に、正當な罰が廻つて此の熊のためにずたゞに引き裂かれて食れて仕舞つたのだ。

赤ん坊は女王がレオンテース王の許へ送つた時には、立派な着物や寶石を身につけて置いた、アンチゴナスは其の上衣に、パーディタと云ふ名をかいた紙片をつけて置いた、此の名の意別は、生れは高貴な者だが運が惡いと云ふ事であつた。此の赤坊は一人の羊飼ひに拾はれて、慈悲心に富んで居た人だつたから子供を抱いて妻の許に歸り、大切に育て上げることにして、寶石がついて居たのを見付けて、此れを賣つて人の知らない土地に來て澤山な羊を飼つて、金持ちな人となつた、パーディタは羊飼ひの娘として育て上げられたので自分は元より左樣だと思つて居た。

パーディタは可愛い娘となつて元より羊飼ひの娘だから、教育等はそんなに無かつたけれど、高貴に生れた性だけに、母の血を引いて美しい性質は、どうしても違つた兩親の下に育つた子とは見えない位であつた。

ボヘミア王はフロリゼルと呼ぶ一人の息子があつて、一日此の羊飼ひの住家の近くまで獵に來て老人の羊飼ひの娘とも見える女を見た、然し美しい淑やかで女王の樣な氣高さに即座に戀して仕舞ひ、ドリクレスと名を代へて普通の紳士の風をして毎日此の羊飼ひの家に訪問して來る樣になつた、王子フロリゼルの折り〳〵留宅になる事は、宮中での評判となつて、祕と後をつける樣に命じて置くと、羊飼ひの娘に戀して居ることが判つた。

ポリセネス王は曾て自分の生命を助けて呉れた、廷臣のカミローを呼んでパーディタの父の羊飼ひの家へ一緒に行く樣に命じた、王とカミローは姿をかへて羊飼ひの家へ行つて、羊毛を切る御祭りの席に列つた、此の御祭りはどんな人でも歡迎する御祝ひだから、二人は終日樂しく此の家で遊ぶ樣に行つたのである、此の御祭りは樂しい話しや笑ひ聲で持ち切つて、田舍料理が食卓の上へはこばれ、美しい若い男女が芝生の上で踊りをやり、戸外に賣つて居る商人から、手袋やリボンや玩具を買つたり等しゝ居た。

此の御祭りの盛りの中に、フロリゼルとパーディタは片隅の方に、一緒に座つて居て周圍に騷いで居る人々よりも、面白さうに何か會話して居た、王は息子に知られない樣に假裝して居たから二人の話し聲をきゝたいと傍に寄つて來た、パーディタの云ふ事は單純だ

が、優しい樣子が見えた、王は驚いてカミローに、

「あの娘は田舍に似合はない樣な美しさだ、何處となく高尚な點が現はれて居て、此んな處に居るのは一寸惜しいものだ。」

「さうで御座います、あの娘は此の羊飼ひの連中の女王の樣で御座います。」

「おい御老父さん、御前の娘さんが話して居る若い男は、中々好い男だね。」

「はいあの男は娘に惚れて居ると申しますのですが、どちらがどうですか……、名はドリクレスと云ふ人ですが、娘を貰つて呉れますなら幸福があの男について來ますよ。」

とパーディタに着いて居た、寶石の賣れ殘りがまだあるから、其れを暗に示したのだつた、老人は其れを結婚の時の持參物と大切に仕舞つて居たからである。

「おい若い人、君は此の御祭り其のものより何か他の者に氣がある樣だ、僕も若い時には戀人に種々な物をやつたことがあるが、小間物屋を歸して何も買つてやらないのか。」若い王子は父の王とは露知らず、

「此のパーディタと云ふ女はね、其んな小間物なんか欲しくはないさうですよ、僕の胸の

鍵が望みだと云ひます、ねえパーディタ此の方は矢張り、僕等の樣に昔しは戀に落た事もあつたさうだ、だから一寸此の人の前で此方の心を云つて置かうよ。」

と自分等二人が夫婦に成ると云ふ、固い約束をしたことを知らし、其の證人にしようと頼んで、

「貴郎よく僕等の仲を知つて置いて下さい。」

王は自分の姿を表はして、

「何んだ羊飼ひ風情の娘と惚れ合ふなんて、以つての外の事だ、直ぐに思ひ切つて仕舞へ。おい親爺!!　再び吾が子を此處へ引き寄せる樣に、娘にさせるなら親子諸共に叩き切つて仕舞ふぞ。」

とカミロールは王子を連れさせて、大に怒つて此の場を去つた、後でパーディタは、

「假令どの樣な目に遇ふとも、妾は決して恐れは致しませぬわ、此の賤が伏屋に照る御太陽樣と、あの宮殿を照らす御太陽樣との光は、別に差別は有りませんもの、然し今は夢からさめました、遂げられぬ戀は諦らめます、矢張り女王樣には成れませぬのです、昔し通

りの乳搾りにはかない運を泣きませう。」

カミローはパーディタの優しい心や、擧動に感じて王子の思ひ焦れるのも尤だと思ひ、此の二人の戀を成功させ樣と、或る計畫を考へ出した。此のカミルーは前に言つた樣に、元はと云へばシヽリイ王、レオンテースの舊臣で今はレオンテースも後悔した事を、きいて知つて居たから、最う一度舊主を訪ねてシヽリイに行つて見たいと思つて居たから、王子のフロリゼルとパーディタの二人を、シヽリイの宮廷へ連れて行つてやらうと云ひ出し、レオンテース王は二人に保護を願つて、ポリセネス王から赦しを得て結婚をさせることを運んだがいゝと申し出した。

二人は飛び立つ計りに喜んだ、此の相談をカミローも種々と指揮し、老羊飼ひの親も一緒に行く事となつた、老人はパーディタに着いて居た紙片と寶石と赤ン坊の時の着物を一緒に持つて、海路無事に四人はレオンテースの宮殿についた。

女王の死と愛兒を捨てゝ、大に悲しんで居た王オンテースは、カミローを大に喜んで向へ、王子フロリゼルをも優遇した、王子はパーディタを己が王妃だと紹介した時に、レオンテースは死んだ女王ハーミオネによく似た顏だと考へ出した。

「乃公にも此んな娘が一人あるのだが、酷いことをして仕舞つた、フロリゼルさん私は、貴郎の御父さんと、交際を絶つて仕舞ひましたが、息ある中に最一度あつて見たいと想ひますよ。」

羊飼ひの老人は、レオンテースが子供の時に失つた、娘の事を云つたり、王がパーディタの方を注目して居るのを見て、己れが此の娘を拾ひ上げた時を考へ、寶石と云ひきつと賤しい生れではなくて、失つたと云つて居る此の王樣の娘に違ひないと思ひ、一同の前で其の拾つた當時の話しをし、アンチゴナスが熊に喰はれたのを見た事も物語つて、やがて立派な外衣を取り出して見せた、ポリーナは此れはハーミオネ樣が御嬢さまに御着せ遊ばしたものだと思ひ出し、首にかけてあつた寶石やら、紙片を出して見せるのを眺め此れは夫の手跡だと證して、此處でパーディタはレオンテース王の息女と知れた。

ポリーナの胸の中は、夫の慘死やら、失つた息女の戻つて來た事、神託の事實であつたことやを知つて、今は心中煩悶の情に堪へなかのたのである、王も眞の己の娘と知つたか

らには、死んだ妻が此の娘を見ることは出來ないのを悲しく思ひ、

「おい御前の母が……母が生きて居て呉れたらな……」との外は一言も云へなかつた。

ポリーナは此の時、近頃命じて置いて出來上つた、イタリイーの名高い彫刻師のジュリオ、ローマンの手になつた像を、手に入れたので此れは女王樣に非常によく似て居て、王樣はきつとハーミオネ樣だと御考へになる位ですと、云つたのに一同は其れを見にポリーナの家へ向つた。

ポリーナは彫刻の前の幕を引き開けると、眞のハーミオネの顏に似て居るので、王は一目見て新しい悲さが湧き上つて來て、暫らくは默つて立て居た。

「無言で御立ち遊ばします、王樣には、餘程御氣に入りましたかどうで御座いますか女王樣に似て居りませぬか。」

「いや私が初戀の時も、此の樣に美しかつた、然しポリーナは此んなに、年は寄つては居なかつた。」

「女王樣が今迄生きて居らつしやる通りに、作つたのが彫刻家の其處が豪い處で御座いま

す、然し動くと思召しては駄目ですから、最う幕は締めませう。」

「幕を引かないで置いて呉れ、カミローあれは息をして居る樣に見えやしないか、目が動き出した樣だ。」

「いえ最う幕を引きます、貴郎樣は像が生きて居ると思召しますといけませぬから。」

「乃公にはあの像から息が來る樣だ、呼吸まで彫りつけたとは中々の名人だ、一つ接吻をしてやらう。」

「御待ち遊ばせ、貴郎樣は油や繪具で御口が汚れます、妾は最う幕を締めますから。」

「いや二十年ばかり待つて呉れ。」

バーディタは無言で母の像の下に跪いて居たが、

「妾も二十年ばかり茲に居まして、あの御母さんを見て居たう御座います。」

「御兩人樣最う少し御靜かに、私は此れで幕を閉めます、而してまだ〳〵御驚きになる事が御座いますから、妾は此の像を眞に動かして、踏臺から下して御二方に、握手をさせて見せませう、魔術の樣ですが決してさうでは御座いませんから。」

「どうなりと乃公は默つて見て居る、御前が像に物言はさうとするなら、乃公は聞いて居らうや、動かせる事が出來るなら話す事だつて容易はないだらう。」

ポリーナはやがて用意をして於て音樂を、緩く嚴しく彈く樣に命ずると、像は下の方へ動いて下りて來た、而してレオンテースの首に腕を卷きつけた、やがて自分の夫と、今度發見せられた娘のバーディタのために幸福を祈つた、此れは決して不思議の事ではない、此の像は實際のハーミオネで、生きて居る女王であつたのだ。

ポリーナは王に女王樣は御死去と詐つて、此の事が不幸な女主人に對して保護をする最善の手段と思つて居たから、女王の生存して居るとは王に知らせないでバーディタが、見出されるまで其うして置いた。

斯くの如く死んだと思つた女王が生き返つたばかりでなく失つた娘までも戻つて來たので、レオンテース王の喜びは假令樣もなく、今は歡喜の言葉が諸方面から湧いて來る計りであつた、兩親は此の娘を深くも、愛して吳れたフロリゼルに御禮を云ひ、厚く養育して吳れた老羊飼ひにも感謝し、カミローは自分の忠實な心から此んな幸福な結果が得られた事を大に喜んだ。

此の不思議な喜びを尙ほも圓滿にした事は、ボヘミヤ王のポリセネスが此の宮殿に入つて來た事であつた、フロリゼルとカミローが逃亡した事を知り、日頃からシ、リーに戻つて見度いとカミローが云つて居た言葉を知つて居たポリセネスは、二人はきつとシ、リーで見付けることが出來樣と、全速力でやつて來て見ると丁度レオンテース王の、慶事の最中であつた。

ポリセネスは大に樂しく一同の間に入つて、此の頃中のレオンテースの嫉妬の怒りを赦してやり、子供時代の親友の仲よりも一層厚く交はつた、勿論自らはバーティタと結婚することを敕し、バーティタは今は羊飼ひの小娘でなくて、シシリーの王冠を得べき娘であつた。

ハーミオネは永く耐へて居た其德に依つて此の報ひが來たので、此女王は夫レオンテース王と娘のバーディタと、永年樂しく最も幸福なる、女王として母として住み長らへた。

終り善くば始めもよし

ローシロンの伯爵のバートラムは、父の死後に其の位と遺産を受けついだ、フランス王はバートラムの父を愛して居たから、其の死を聞いて、バリーの宮殿に來る樣に招き、先年受けた厚誼に報ひ、自分が此の若いバートラムを保護をしようと考へて居た。

佛蘭西の老貴族のレフユーと云ふ者が、バートラムの今は寡婦となつた母の許に來てバートラムを佛王の所へ連れて行かうとした、フランス王は無上の權威ある君主で、己が宮殿へ招くにも命令的であるから、此に叛く臣下はなかつた、其れ故に此の寡婦の心は、吾が子に別れるのは第二の夫を葬式する樣に考へ、今まで一日として手離さなかつた。此子と別れるのは非常に悲しいが、佛王の命令は拒み難かつた。子を連れに來たレフユーは、此伯爵夫人に死去になつた良人の悔みをのべ、其の子の留宅中でもいゝ樣に慰めて、

「御心配なさいますな、佛王陛下は御親切なお方で御座いますから、又一人の旦那樣を御捜し下されました、御子樣の御父上とせられませう、御子樣の御幸福のために至極いゝ陛下で御座います、王樣は只今御病中で到底全快は覺束ない御樣子で……」

と此れを聞いた夫人は、非常に悲しく思ひ、自分の從者のヘレナの父が生きてたら、きつと陛下の御病氣を癒す事が出來ませうと云ひ、ヘレナの話しをしヘレナは有名な醫者のゼーラード、デ、ナーボンの娘で、其れが死ぬ時に此の夫人に其注意を頼んで逝つたから、死後はヘレナを自分の許に引き取つたので、非常に德のある秀でた性質のある娘で、矢張り父から受けついだものだと話した、此の話しを傍で聞いて居たヘレナは父の死を悲しんで泣いて居た。

今やバートラムは母に告別をつげ、母は涙を流して此れに別れ、

「どうかレフユー樣、種々と敎へてやつて下さいまし、まだ禮儀も何も知らぬ少年ですから。」

バートラムはヘレナに最後の話しをして、幸福に暮す樣とのべた、最後に、

「どうか御前の御主人の、僕の御母さんを、注意して御呉れよ、御母さんを大切にね。」

ヘレナは長い間バートラムに戀して居たから、此の悲しい別れの時の涙は、父に對して泣いた時のとは異つて居た、父を愛して居たが今は目の前の深い戀に依り、死んだ父の姿を忘れ、胸の中には優しいバートラムの影ばかりであつた。

ヘレナはバートラムを愛して居たものゝ、男の家門はバリーの最も舊家からのローシロン家の伯爵だ、然かもヘレナは賤しい身の生れで、男を高位の貴族と仰ぎ主人と仕へ、只だ召使ひの女としての他の願ひはなく、家來として死ぬまで暮す願ひであつた、バートラムとの間は此れの關係で隔つて居るから、

「妾は高い〳〵所に輝いて居なさる、御星樣を戀して結婚したいと思つてる者です、バートラム樣は妾よりも遙かに、高く遠い所に居らつしやいます。」

今やバートラムの留守になると聞いては、ヘレナは悲しく涙にくれて、假令己が望は適はずとも、毎日〳〵御側近く仕へて、バートラムの眼を眺め、圓い額や美しい毛の縮れを見て、胸の中にちやんと肖像が描けるまで覺えて、戀しい顏の輪廓も判然と心に止めて居たのであつた。

父のゼーラード、ディナーボンが死ぬ時に、德性の權化とも見るべき此の娘に、長い間の勉强と經驗に從つて、貴い確實な療法を其の娘に種々殘して行つた、其の中に今レフユーが云つた王の病氣のための療法もあつた、王の病氣と聞いて此のヘレナは自分の事が賤しいから、他の計略で王の病氣を癒さんと自分にバリーに行かうと決心したが、假令此の療法があつたとて、自分の樣な無學な少女の身として、療法のないと云はれた王の病氣を快すなんぞと信ぜられる事は出來ないと考へた。

然し計略を行つて此の事が成功すると自信して、此の良き療法は己がローリソン家の妻となるべく運が向いて來るのだと强く感じた。

バートラムが幾何も行かなかつた時に、執事が夫人の所へ來て、ヘレナが獨り語に自分はバートラム樣に戀して居るから、一緒にバリーへ行かうかと思つてると、云つて居ましたとの話に、夫人はヘレナを呼び寄せ、胸の中には夫と最初の戀に落ちた時の事を回想しながら、

「妾だつて若い時は同じでした、戀は青春の薔薇について居る針です、妾達は自然の兒と

すれば、青春時の戀は禍と氣がつかなくつても、其れは禍となります。」
と夫人は自分の若い時の戀の誤りから生じたことを考へて居た所へヘレナが入つて來た。
「ヘレナや妾は御前の母ですよ。」
「えつ妾には、あの尊い奥樣として、貴女に仕へて居ますのに。」
「御前は妾の娘ですと云ふのに、なぜ御前は其れをきいて驚いて、顏色を變へなさるの。」
扨てはヘレナは夫人が己れの戀を知つたかと、混亂した心で、
「御赦し下さいまし、奥樣貴女は妾の御母さんでは御座いませぬ、貴女はさきのローシロン伯爵夫人、今の伯爵樣は妾の兄樣では有りません、それ故妾は貴女の娘では御座いませぬ。」
「ヘレナや、妾ー御前を妾の嫁に仕ませうよ、母と娘と云ふ語は御前の心を亂しましたね、妾の子をヘレナは愛して居ますから。」
「奥樣！　御赦し下さいませ。」
「あの子を愛して居ないのか。」
「奥樣は若樣を御愛しなさいませんか。」

「そんな逃げる樣な答へ方は止て御呉れ、さあ御出で御前の戀の心はよく判つて居ます。」
ヘレナは夫人の膝に縋つて、其ハ戀を打ちあけ、耻しさと恐しさに赦しを願ひ、自分等の身分の違ふ事又此の戀は若樣には、御存知ないとの事、太陽を崇めると云ふ或る哀れな印度人の話しを、自分の身に引き比べて話した、夫人はバリーへ行く氣はないかと聞けば、佛蘭西王の病氣と聞いて行きたいと答へた。
「其れが御前がバリーへ行きたいと思つた動機なのか、眞實の事を話して御覽。」
「若樣から御話しをきゝ、王、藥、バリーと妾の考へは其れのみでした。」
此の誠意を夫人は聞いて、王を快す藥は實際效能はある積りかと問ふて見た、ヘレナは其れは父が持つて居た中の尤も高價な物であつたが、死ぬ時に娘に讓り渡したので、其の時の嚴格な約束を思ひ出し、王の死は此の事を行ふべき時の樣に考へられたと話し、夫人はヘレナに自由に行く樣に命じた、かくてヘレナは夫人の親切の許に成功を祈られながら、バリーに向つて出發した。
ヘレナはバリーに着いて舊知のレフユー貴族の助けに依つて、國王に面會した、然し王

は此の若い美しい醫者の差し出す藥を、容易に飲まうとは思はない、然しヘレナは妾は有名な醫師のゼーセード、デ、ナーボンの娘で、多年の經驗と熟練に依つて集めた、秘藥を持つて居るので二日間の中に、王の健康が回復しなければ殺されましたとて、恨は御座いませんと申しのべた。

若し二日の中に國王の病氣が快つたなら、佛蘭西國中に氣に入つた男を夫として持つことを赦して貰ひたいと賴んだ、其の父の秘藥の效が追々と現はれて國王は、全く健康に回復したのは二日目の終りの日であつた、王は大に喜んで滿廷の貴族を集め、夫として選み出す樣にヘレナに命じ、よく此の貴族等を見て、其の中から選擇する樣に云ひ渡した。

ヘレナは躊躇しないで見廻した處が、ローシロンの伯爵が見えたからして、バートラム伯に向つて、

「此の方です、御主人樣とは呼びませぬ、妾は此の方を頂きたく思ひます。」

「そんなら此の男を御前が貰ふことにしてやる。」

バートラムは此の女が嫌ひだと云ふ事は、王の面前では云ふ事は出來ず、「あれは哀れな醫者の娘で、父の死んだ後は乃公の母の慈悲の許に暮して居るんだ。」と排斥する樣な輕蔑の言葉を聞いたヘレナは、

「王樣！　全く御身體は大丈夫になりました、妾は嬉しう御座います、妾も一寸休まして頂きませう。」

此んな樣な結婚を貴族の間に命ずると云ふ事は王の特權の一つであつて、此の日遂にバートラムは此の强制的の結婚をヘレナとしたのだ、ヘレナは命に懸けても思ひ込んだ男は得られたけれど、夫の愛は國王の力でも如何ともすることが出來ず、又得る事が出來なかつた、バートラムは其の後直ぐに宮殿から立ち去りたいとヘレナに其旨を國王に賴みにやつて、ヘレナが其の許可を得て歸つて來ると、バートラムは自分は此の不意の結婚は思ひ掛けない事だつた爲めに、大に心は不定になつた、で少し此處で留守にしたつて驚いてはならぬと云つた。

ヘレナは驚きはしないけれど、夫バートラムは自分を殘して、去ると云ふ事を知つて悲しくなつた、夫は家の母の許へ歸れとヘレナに命じたので此の不親切な言葉を聞いて、

「妾は其れにつきまして、何んにも云ふことは出來ませぬが、只だ妾はあなたの尤も從順な侍女で御座いました、又妾は何處までも御一緒に行つて御從ひ申す忠實なもので御座います。」

然しヘレナの云つた語は夫を動かす事は出來ず、親切な離別の挨拶もしないで出て行つて仕舞つた。

ヘレナは母の夫人の許に歸つて、自分の目的は遂行されて王の生命を取り止め、意中の人と結婚したが、今は其の戀しい婿さんの母の家へ歸り家へ入るや否や、バートラムから來た手紙に心は傷ましくも破られた、母は大に歡待し自分に選んだ嫁の樣に、非常に親切に妻を無情にも送り歸した、息子の仕打に對して慰めた、然しヘレナは、

一奥樣！　あの方は行つて御仕舞ひになりました。」

バートラムの手紙には、

「御前は私の指から離す事の出來ぬ指環を取つて、「夫」と云つたけれど、今は私は「否」と云ひます。」

「あゝ此れは恐ろしい文句で御座います。」

母は種々と慰めて力をつけたけれど此嫁の心は益々悲んで、手紙を尙ほも見詰めて、悲哀やら怒りやらにて、

「私は佛蘭西に居たとて妻は持つたのぢやない。」

「そんな事まで書いてあるのかい？」

「は――い」とヘレナは答へるのみであつた。

翌日ヘレナは何處かへ姿を隱くして仕舞つた。遺書があるので其れを見ると、夫が無情にも振り捨てゝ去つた悲さに堪え得ず、此れから巡禮になつてセント、ジャクエス、ル、グランドの御寺へ行きますから、夫が御歸りになりましたらば、憎まれた妻は其うしたと御傳へ下さいと、夫人に宛てゝ書いてあつた。

バートラムは佛蘭西を去つて、フローレンスへ行き、此處の軍隊の士官と成り數度の戰爭に武功を表はして有名になつた、或る日母からの手紙にヘレナは最う今は居ないとの事をきいて一度歸鄕しようと思つて居る所へ、ヘレナは巡禮の衣服を着て此のフローレンス

の市に着いた。

フローレンスの市はセント、ゼクホス、ル、グランドの寺へ行く巡禮の道で、此の市へヘレナが來て此處には、女の巡禮を泊める女寡婦の旅舍があるのをきいて其處へ行つた、女主婦は心よくヘレナを迎へて、此の市の面白い所などを見物せよと話し、公爵の軍隊も見て置きなさいと云ひ、

「而して貴女と同國の方が御出でゝすよ、其の方はローシロン伯と云ふ人で、戰爭で大變武功をなすつたんです。」

ヘレナは此れをきいて、悲みと嬉しさに思ひ亂れた。

「あの方は美男子ですつてねえ。」

「妾は大變好きです。」

二人の話しはバートラムの事のみであつた、此の時に女主婦はバートラムの結婚して、其の妻と一緒に居るのが厭やさに、軍隊に入つた事などを話した、ヘレナは此れをきいて居たけれど、バートラムの話しは其れで終らず、バートラムは此の女主人の娘を戀して居ると云ふのを聞くに至つて、ヘレナは沈い思に落ちた。

バートラムは王よりの强請の結婚は嫌つたけれど、木石ならぬ彼れは、此處の軍隊に入つて居る中に、遂に此のヘレナの宿つて居る旅舍の女主人の娘のダイアナを戀する樣になつた、毎夜〳〵美しい音樂の響に歌に、ダイアナの美を讃めて此の寡婦の許に通ひ、娘の愛を求めた娘は遂に此れを赦して、夜更けに人々が寢靜まる頃に、そつと來て呉れと云つた、ダイアナはバートラムは既に妻のある人だと知つて居たから、此の男をそんなに歡待はしなかつた、此の娘は謹嚴な母親の許に育てられ、昔しは高い家柄の、カプレット家の岐れの人だつた。

女主人は此の娘の德の高い事をヘレナに話し、良敎育やよき感化を與へてある事をのべバートラムは次ぎの朝早く此のフローレンスを去るのだから此の夜の來るのを大いに喜んで居るのだと話した、此れをきいてヘレナは此のバートラムの戀を利用して、計略を案じ出した、遂に女主人に妾は其の見捨てられた妻のヘレナだと打ち明け、一つ親切な御心で此の夜バートラムの來る時に、ダイアナ樣と妾とを代らして下さいませんかと、母と娘に

願つた、其れは此の秘密の夜に代つて、妻としての證據に、バートラムから指環を貰ひたいと思つて居ると話した。

此の不幸な妻の樣子に同情した、女主人と其の娘は其れを旨く助けませうと云つた、ヘレナは其のため金を與へて賴み、其の日にバートラムにヘレナは死んだとの報知を送つた、此れでバートラムは第二の妻を自由に選ぶ事が出來ると思ひ、日頃戀して居るダイアナに結婚の申し込みをする事にさせようとした、而して指環と約束をして置けば後はきつと幸福になるを企んだ。

其の夜は暗くバートラムはダイアナの室へ入れられた、ヘレナは此れに應待しようと用意して出て行くと、バートラムは甘い戀の語や、口上手な話しをしてヘレナに話しかけた其れがダイアナと思ひ込んで居た、バートラムは先方の女が意のあるのを知つて大に喜び、永久に愛しますと固い〳〵約束をした。

此までは、バートラムはヘレナの性質は知らなかつた、毎日〳〵ヘレナの美しさを見馴れては居たものゝ、其の智慧に至ては知る事は出來ず、其れはヘレナは自分の戀心があつた爲めに、バートラムに對してはいつも無言で尊敬を持つて、彼れの面前に居たので、此の夜に於ける印象はバートラムの心に、深く刻まれるくらゐにヘレナの機智は彼れの心を喜ばせ、其の生き〳〵とした會話や、美しい愛情にバートラムは醉はされて、妻にすると誓つた。

ヘレナは其處で證しにと指環を願ふと、直ぐに呉れたヘレナは前に送られた王の指環を其の返禮としてやつた、やがて夜が白みかゝつて、女はバートラムを送つて、彼れは母への家路へと旅途に登つた。

ヘレナは女主人と娘とに一緒にパリーへ行て貰ひたい、其の計略を完成させるためにはまだ二人の御助力が必要ですからと賴んだ、其れ故一同はパリーに着いて見ると王はローシロン伯夫人を訪問しようとて出かけた留守中故、出來る丈忙いで王の後を追ふて一同は向つた、王の健康はすつかり快つて、あの女に大に感謝しようと思つて來た時に夫人に會つてヘレナの話しをした、然し夫人は悲しんでヘレナは死んだと物語つた。

良き老人の貴族なるレフユーは、其んなに早くも亡くなつた美しいヘレナの姿を忘られ

ないで、

「此れはあの若樣が陛下に罪を犯しなさいました又、母上樣にもヘレナ夫人に對しても罪をなさいましたと云へます、若樣はすべての人が驚いた美しい奥樣を、御捨てになつたからです。」

「どうしてあの女を見捨てたのだ……よし彼れを呼べ。」

バートラムは面前に呼ばれて、妻を見捨てたことにつき悲しさを表はしたから、王は代つて、亡き父や、慈愛深い母に謝してやつと自分の保護の下に可愛いがる事にした、然し王の溫顏はバートラムが己が指に、王がヘレナにやつた指環をはめて居るのを見て、大に變つた、ヘレナに其の指環を與へた時は、決して此れを天の神々に誓つて離すまいと云つた、バートラムは此の指環の話しをして、結婚以後にまだヘレナには會つた事はないと辯解した、王はバートラムがヘレナを嫌つて居たことを知つて居るから、扨てはヘレナを殺したのだと思つて、バートラムを捕縛する樣に命じ、

「私はヘレナの生命は他から取られた樣な、恐ろしい考へがする。」

其處へダイアナと女主人が入つて來て、王にバートラムと娘とは固い約束をしたのだから結婚の御許可がある樣にと賴んだ、バートラムは大に驚き此れを王に知られては、怒りを求める計りだと思つて、其んな事はないと云ひ隱したのを、ダイアナは其の證據にと先に貰つた指環を見せた、而して妾も自分の指環を渡しました、其の時結婚の約束が出來たと述べた。

此れを聞いて王は其の娘も捕縛する樣に命じた然し指環はどうも娘のとしては違つて居るから王の疑は益々大となつて、

「貴樣達は、此のヘレナの指環をどうして持つに至つたか其れを白狀しなきや、殺して仕舞ふぞ。」

「御母さん、其んならあの指環を買つた、寶石商人を此處へ呼んで下さいまし。」

母は出て行つてやがて、ヘレナを連れて此處へ戻つて來た。

伯爵夫人は、屹度自分の息子がヘレナを殺した事が事實らしく、其のため今や捕縛の憂き目にあつて、死刑になるとの事を非常に悲しく思つて居た處へ、愛して居たヘレナの姿

が見えて、未だ生きて居たと知つて、夢かとばかりに喜んだ。

王も其れがヘレナとは半信半疑に、

「今此處に來たのは眞の、バートラムの妻か？」

ヘレナはまだ自分が妻とは、夫に認められないと感じて、

「妻とは名のみ影ばかりで、其の實體では御座いませぬ。」

バートラム叫んで、

「いや兩方ともあるんだ、あゝ赦して呉れ。」

「妾は此の美しい御娘さんの風を裝ひました時に、貴郎は大變御親切で御座いました、此處に其の御手紙が御座います。」

と喜ばしさうな聲で、其れを讀んだ、嘗つては悲しく讀んだ事もあつたんだけれど、

「此の指環を吾が指から御前が取つた其の時は……と書いて御座います、貴郎が指環を御やりになつたのは妾にでした、貴郎は妾の夫で御座いませうね、此れで二度とも妾に御敗けなすつたのです。」

「御前が先夜乃公と話した、その婦人なら愛するよ、永久に愛するよ、然し其の證據は。」

其れは何んでも無い事で、ダイアナと其の母とが此處へ來て、ヘレナだと云ふ證據をのべ、王は此れをきいて大に此のダイアナが親切にも此のヘレナを助けて呉れたと喜び、別に立派な貴族を其のために御世話しようと約束した。

ヘレナは遂に父の遺產は、天に於ける尤も幸福な星に依つて淸められた事を知り、今は親しい夫バートラムの戀嫁となつた、伯爵夫人の娘となり、自分はローシロン家の伯爵新夫人に芽出度く成つた。

終りよくば始めもよし

ベロナの二紳士

ベロナの市に二紳士が居てバレンタイン、とプロセウスと呼び二人の親交は非常に固くあつた、二人は一緒に勉強し遊ぶ時も一緒になつて遊んでたが、プロセウスは一人の女を戀して居て、折り〳〵此の女を訪問のために離れる事があつた、バレンタインは自分に戀人がないことだから、此の話しを不快に思つて居た、女の名はジュリヤと云つて、此んな女に戀する事をバレンタインは常に笑つて居た。

或る朝にバレンタインはプロセウスの所へ來て、今日から別れなけりやならぬ用があつてミランに行かねばならぬと云つた、バレンタインはそんな事を心よく思はないで別れずにミランなんかに行くのは止めたらどうかと云つて見たが、

「いや其んなに云つて呉れ給ふな、青年時代には家にぐつ〳〵して居られない、若し君だつてジュリヤさんと云ふ女が居なければ、一緒に出掛けて廣い世の中の面白い事共を見に

行くのだけれど、戀人があつては其れも駄目だ、ぢやあ君左樣なら君等の戀も幸福に榮える樣に祈つて居るよ。」

「バレンタイン君、御機嫌宜う、君が旅行中に面白い事があつたら僕のことを思つて、幸福を分けて呉れ給へ。」

プロセウスはバレンタインと別れてから、家に歸つてジュリヤの許へ手紙を書いて、ジュリヤの侍女ラセッタに此れを渡して貰ふ樣に頼んだ、ジュリヤは同じくプロセウスを愛しては居たが、品性が高い女であるから、容易くプロセウスの戀を入れることもせず、其れに關して無意識な樣子をして居たが、其所へ侍女のラセッタがプロセウスからの手紙を持つて來た、此れを見てジュリヤは其んな手紙を何故貰つたと侍女を叱つて室から出て行つて仕舞へと云つた、然しジュリヤは何が手紙にかいてあるか見たくなつて、直ぐ呼び返し、

「今は幾時なの？」ときくのを、

ラセッタは主人の心は、時よりも手紙だらうと思つて、其れに答へないで手紙を渡した

ジュリヤは、己が心の中を見透かされた口惜しさに、大に怒つて其の手紙を引き割き床に投げて、再び此處を出て行けと吐罵つた。

侍女の立つた後でジュリヤは落ちた手紙の切れを、拾ひ上げながら惜しさうに眺めて居るまだ怒つてる居る樣子をして、

「早く行つて御仕舞ひ、手紙なんか妾に押しつけて妾を腹立たせる計りだ。」

ジュリヤは切れ〳〵の手紙を細かく付ぎ合すと、「戀ひに傷きたるプロセウス」と云ふ語が出來たのでジュリヤは自分が今まで無情な、態度を取つた事を、耻ぢて前にも優る親切な語を書いた手紙をプロセウスに送つた。

プロセウスは此れを讀んで大に喜んで、「甘まき戀!!　美しい愛、樂しい生活」と叫んで居る時に、突然老人の父が此處へ入つて來た。

「何んだ何んの手紙だ其れは？」

「はーい、此れは親友バレンタイン君がミランから送つた手紙なんです。」

「おゝさうか、一寸乃公にも見せて呉れ。」

「いや何にも變つた事は有りませんよ、ミランの公爵からバレンタイン君は寵愛を受けて居るとかいてある位のものです、而してバレンタイン君の幸福を僕に分けたいと思ふなんて書いてあります。」

「其のバレンタインさんの御思召しを、何んと御前は感づるのか。」

「人が父樣の御意志に願ひます樣に感じまして、親友としてゝあります。」

プロセウスの父の友人が訪ねて來て、其の父に他所の人々は其の息子を廣く、海外やら他國の事情を見せに旅行に出すのを、プロセウスの父は家に其の息子をぼんやり暮させる事を不思議がつて、

「或る人は戰爭に、或る者は外國の大學に留學に行きます、バレンタイン樣何んかはミランの宮廷に行つて居るんでせう、御子息なんかは丁度今がいゝ時期と思ひますがね。」

父は此の人の勸めを尤だと思ひ、バレンタインの事も話して息子を直ぐにも、ミランへやりたい、バレンタインの許へ行かないかと勸めた。

「實は僕も行つて見たいと思つてるんです、いやそんなに御驚きなさらなくつても宜しう